

跡 跡 跡
田 遺 遺 遺
長 待 田
日 目

北 権 堂

発 掘 調 査 報 告 書

1995

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

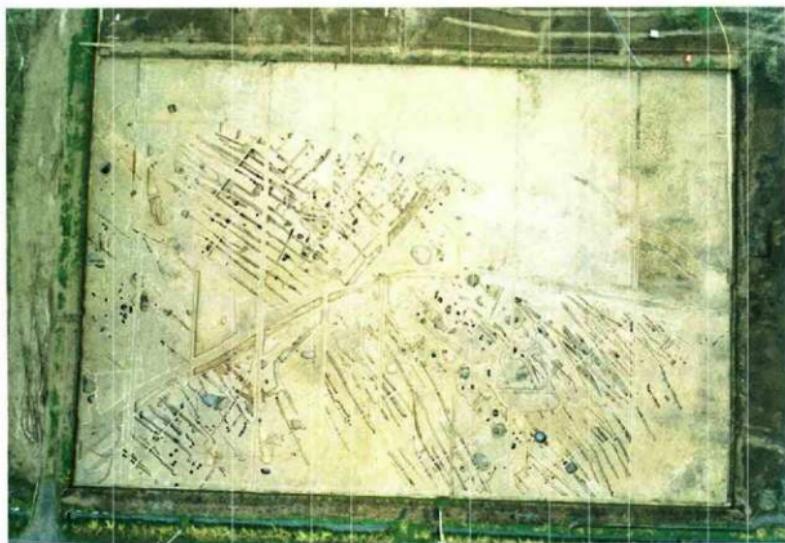
北櫻堂
目長待田
跡跡跡
発掘調査報告書

平成7年3月

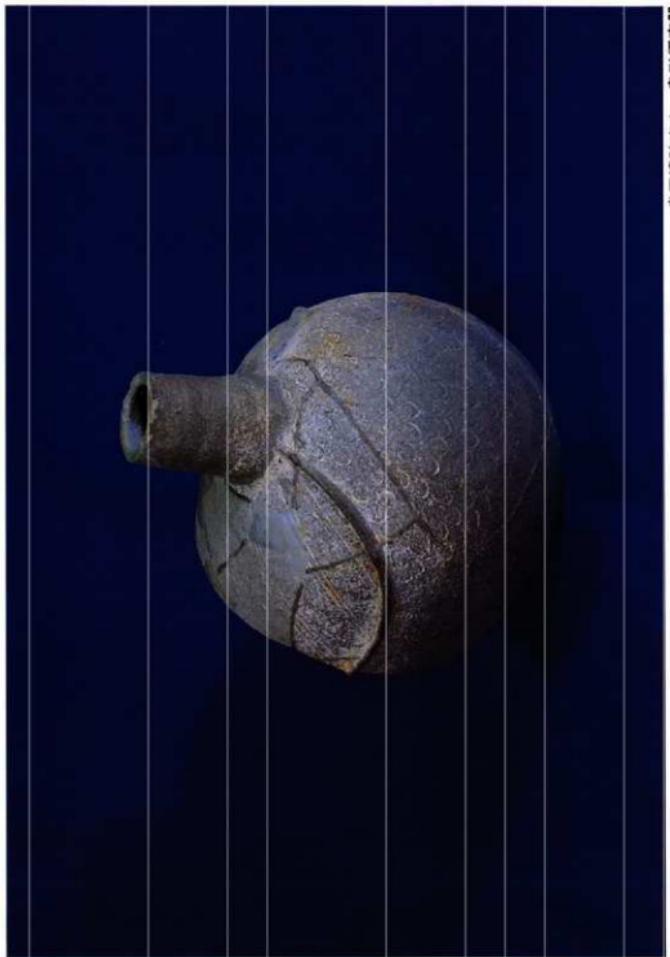
財団法人 山形県埋蔵文化財センター



北目長田遺跡調査区全景（南方上空から）



北目長田遺跡調査区全景（空中写真）



常田遺跡出土 鳥形埴輪

序

本書は、平成6年度に財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した北目長田遺跡・橋待遺跡・堂田遺跡の調査成果をまとめたものです。

これらの3遺跡は山形県北西部の日本海に面した鮎海郡遊佐町に所在し、遺跡周辺は水田と鳥海山から延びてた山裾の広がるのどかな田園地帯となっています。

調査は県営ほ場整備事業を契機とし、広大な遺跡全域が施工範囲内に含まれることに起因します。本書に記されるように各遺跡はそのごく一部を発掘対象としたにすぎません。しかし、この調査に至るまでには関係諸機関の協力により多くの部分が現状で保存できるような配慮があったことを忘れることができません。

今回の発掘調査では、3遺跡共に掘立柱建物跡をはじめとする平安時代の遺構群が姿を現しました。その内容は本報告に書き留められた通りです。自然地形に沿って立地する集落の様子、建物跡を取り巻くように配置された畠の歴跡群などに特色が見られます。これらは、今日見る人の心を引き付け、否応なく当時の暮らしぶりに思いを馳せさせてくれるに充分なものがあるでしょう。

遺跡は一度壊してしまえば二度とは元に戻らないものです。埋蔵文化財は私たちの祖先が長い歴史の中で創造した貴重な国民的財産と言えるものです。調査により明らかにされた内容は過去の村々や生活の有様を具体的に再現してくれるものでした。こうした祖先の歴史を学びこれを愛護し子孫へと伝え残していくこととは、現代に生きる私たちに課せられた重要な責務の一つです。

地域の環境整備等事業の一環として、埋蔵文化財の保存や調査研究を位置付け、諸開発事業との調和を計ることが緊急の課題と考えています。また、本書が埋蔵文化財に対する保護思想の普及・学術研究・教育活動などの場面において、皆様のご理解の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査にご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成7年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 木場 清耕

例　　言

- 本書は県営は場整備事業（高瀬川地区）に係る「北目長田遺跡」・「櫛待遺跡」・「堂田遺跡」の発掘報告書である。
- 調査は山形県教育委員会の委託により財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 調査要項は下記のとおりである。

遺跡名 北目長田遺跡 (A Y Z K N) 遺跡番号 平成3年度登録(山形県1991)

所在地 山形県鮎海郡遊佐町大字北目字長田

調査期間 発掘調査 平成6年4月1日～平成7年3月31日

現地調査 平成6年5月10日～平成6年7月8日 44日間

調査主体 財団法人山形県埋蔵文化財センター

発掘調査・資料整理担当

調査研究課長 佐々木洋治

主任調査研究員 尾形 與典

調査研究員 阿部 明彦 (現場主任)

調査研究員 佐藤 善春

遺跡名 櫛待遺跡 (A Y Z S M) 遺跡番号 県平成3年度登録(山形県1991)

所在地 山形県鮎海郡遊佐町大字北目字櫛待

調査期間 発掘調査 平成6年4月1日～平成7年3月31日

現地調査 平成6年6月22日～平成6年6月28日 5日間

調査主体 財団法人山形県埋蔵文化財センター

発掘調査・資料整理担当

調査研究課長 佐々木洋治

主任調査研究員 尾形 與典

調査研究員 阿部 明彦 (現場主任)

調査研究員 佐藤 善春

遺跡名 堂田遺跡 (A Y Z D D) 遺跡番号 県遺跡番号2085

所在地 山形県鮎海郡遊佐町大字北目字堂田

調査期間 発掘調査 平成6年4月1日～平成7年3月31日

現地調査 平成6年5月11日～平成6年7月15日 48日間

調査主体 財団法人山形県埋蔵文化財センター

発掘調査・資料整理担当

調査研究課長 佐々木洋治

主任調査研究員 尾形 與典

調査研究員 鈴木 良仁 (現場主任)

嘱託職員 川田 嘉信

- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県庄内支庁経済部月光川土地改良事務所、月光川土地改良区、遊佐町教育委員会など関係諸機関の協力を得た。ここに記して感謝申し上げる。
- 5 本書の作成・執筆は、北目長田・櫛待遺跡を阿部明彦・佐藤善春が、堂田遺跡を鈴木良仁・川田嘉信が各担当した。編集は尾形與典・須賀井新人が担当し、全体について佐々木洋治が監修した。
- 6 委託業務は下記の通りである。

北目長田遺跡	遺構の写真実測	鈴日本テクニカルセンター
資料の理化学分析	パリノ・サーヴェイ株式会社	
堂田遺跡	遺構の写真実測	東武計画株式会社
資料の理化学分析	パリノ・サーヴェイ株式会社	
- 7 出土遺物・調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　　例

- 1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は次の通りである。

S B ; 建物跡	S K ; 土壙	S D ; 溝	S P ; 柱穴・ピット	S X ; 性格不明遺構		
S G ; 河川	R	； 遺物	R P ; 登録土器	S ; 繖	W ; 木製品	M ; 金属製品
Q ; 石製品	F ; 包含層					
- 2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。
- 3 報告書の執筆基準は下記の通りである。
 - (1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は真北を示している。
 - (2) グリッドの南北軸は真北方向に合わせた。
 - (3) 遺構実測図は、1/40・1/50・1/100・1/200・1/300で採録し、各々スケールを付した。
 - (4) 遺物実測図・拓影図は、北目長田・櫛待遺跡が1/4、堂田遺跡が1/3・1/4を基準として採録し、各々スケールを付した。なお、実測図中のスクリーントーンは黒色処理を、黒ベタは須恵器を表している。
 - (5) 遺物図版については、1/3を基準とするが、一部に任意のものがある。
- (5) 観察表中の（ ）内の数値は推計値、あるいは現存値を示す。

目 次

I	調査の経緯	
1	調査に至る経過	1
2	調査の経過	1
II 遺跡の立地と環境		
1	地理的環境	2
2	歴史的環境	2
III 北目長田遺跡		
1	調査の概要	5
2	遺跡の層序	6
3	遺構と遺物の分布	6
4	検出遺構	9
5	出土遺物	21
6	まとめ	47
IV 機待遺跡		
1	調査の概要	48
2	遺構と遺物の分布	48
3	検出された遺構と遺物	49
V 堂田遺跡		
1	調査の概要	50
2	遺跡の層序	50
3	遺構と遺物の分布	54
4	検出遺構	54
5	出土遺物	61
6	まとめ	76
VI 総括		78

挿 図

第1図	遺跡位置図	3
第2図	遺跡概要図	4
第3図	北目長田遺跡調査概要図	5
第4図	北目長田遺跡土層柱状図	6
第5図	北目長田遺跡遺構配置図	7
第6図	北目長田遺跡軟状溝跡実測図(1)	12
第7図	北目長田遺跡軟状溝跡実測図(2)	13
第8図	北目長田遺跡軟状溝跡実測図(3)	14
第9図	北目長田遺跡軟状溝跡実測図(4)	15
第10図	北目長田遺跡土壤実測図(1)	16
第11図	北目長田遺跡土壤実測図(2)	17
第12図	北目長田遺跡土壤実測図(3)	18
第13図	北目長田遺跡土壤実測図(4)	19
第14図	北目長田遺跡土壤実測図(5)	20
第15図	北目長田遺跡遺物実測図(1)	28
第16図	北目長田遺跡遺物実測図(2)	29
第17図	北目長田遺跡遺物実測図(3)	30
第18図	北目長田遺跡遺物実測図(4)	31
第19図	北目長田遺跡遺物実測図(5)	32
第20図	北目長田遺跡遺物実測図(6)	33
第21図	北目長田遺跡遺物実測図(7)	34
第22図	北目長田遺跡遺物実測図(8)	35
第23図	北目長田遺跡遺物実測図(9)	36
第24図	北目長田遺跡遺物実測図(10)	37
第25図	北目長田遺跡遺物実測図(11)	38
第26図	北目長田遺跡遺物実測図(12)	39
第27図	北目長田遺跡土器分類図	40
第28図	北目長田遺跡土器組成図(1)	41
第29図	北目長田遺跡土器組成図(2)	42
第30図	機待遺跡調査概要図	48
第31図	機待遺跡遺構・遺物実測図	49
第32図	堂田遺跡調査概要図	51
第33図	堂田遺跡遺構配置図	53
第34図	堂田遺跡SB1遺構実測図	57
第35図	堂田遺跡SB2遺構実測図	58
第36図	堂田遺跡SB3・4・8遺構実測図	59
第37図	堂田遺跡SB5遺構実測図	60
第38図	堂田遺跡SB6・7・9遺構実測図	61
第39図	堂田遺跡SE51他遺構実測図	62
第40図	堂田遺跡遺物実測図(1)	65
第41図	堂田遺跡遺物実測図(2)	66
第42図	堂田遺跡遺物実測図(3)	67
第43図	堂田遺跡遺物実測図(4)	68
第44図	堂田遺跡遺物実測図(5)	69
第45図	堂田遺跡遺物実測図(6)	70
第46図	堂田遺跡遺物実測図(7)	71
第47図	堂田遺跡遺物実測図(8)	72
第48図	堂田遺跡遺物実測図(9)	73

表

表1	北目長田遺跡遺物観察表(1)	43
表2	北目長田遺跡遺物観察表(2)	44
表3	北目長田遺跡遺物観察表(3)	45
表4	北目長田遺跡遺物観察表(4)	46
表5	堂田遺跡遺物観察表(1)	74
表6	堂田遺跡遺物観察表(2)	75
表7	堂田遺跡遺物観察表(3)	76
表8	堂田遺跡遺物観察表(4)	77

I 調査の経緯

1 調査に至る経緯

遊佐町北西部に位置する富岡から北目・山崎地区などの高瀬地区一帯には、庄内高瀬川や月光川の流れに沿って断続する数多くの平安時代遺跡が点在している。遺跡の立地基盤は、これらの河川が形成した微高地（自然堤防）と理解でき、基本的に現集落の立地状況にも変わらないと看取される。低平で沖積の発達する平地にあっては、周囲よりも水掃けの良い高燥な住空間と、飲料や農用などの「水」の利便さが求められたことは容易に推測されるところである。そして何より古代からこの地を人々が営々と耕し続けてきた事が重要であろう。

一方、今まで辛うじて遺されてきた遺跡群は、近年の大規模で継続的なほ場整備事業をはじめとする開発の波を直接かつ広範に受けるようになってきており、その保護と活用を含めた調整や諸施策が今日的緊急な課題として浮上している。今回の調査も、本年度に予定される県営ほ場整備事業（高瀬川地区）を原因としており、県教育委員会は現状保存を前提とした事前の調整を月光川土地改良事務所をはじめとする県農林部他の関係機関と行っている。また、調査に先づ平成2年度の秋から、これら遺跡の分布や保存状況・範囲他の確認目的とした詳細分布調査を県教育委員会が継続的に進めてきた経過も貴重であった。しかし、止むを得ず壊れると判断された部分については緊急の発掘調査を山形県埋蔵文化財センターが主体となって実施し、記録保存とする運びとなったのである。

2 調査の経緯

平成6年4月19日に月光川土地改良事務所管内に係わる遺跡調査の打ち合わせ会を開催して最終の協議を行い、同年5月9日から現地での調査を開始した。以下に各遺跡毎の実績を基に調査の実施状況を列記しておく。詳しくは後項の各遺跡調査概要を参照されたい。

北目長田遺跡は平成6年5月10より調査を開始し、7月8日に終了した。実調査日数は44日である。調査面積は主に拡張した部分2,400平方m、その他排水路等に係るトレンチ部分、900平方メートル計3,300平方mであった。

橿待遺跡は平成6年6月22日に調査を開始し、6月28日に終了している。実調査日数は7日間で、調査面積は排水路に係わる1,000平方mである。調査終了間際、集中豪雨に見舞われ調査トレンチが冠水するなどのアクシデントがあった。

堂田遺跡は平成6年5月11日より調査を開始し、7月15日に終了している。実調査日数は48日で、調査面積は面的に拡張した主体部3,300平方m、排水路に係わる遺跡西端部分のトレンチ500平方mの計3,800平方mである。

いずれの遺跡も平安時代に帰属し、年代にして9世紀から10世紀前半頃と近接した時間帶の中で継続したことが解っており、100年前後で集落を廃棄・移動する様子が窺えた。

なお、調査期間中に調査成果を公表して埋蔵文化財に対する理解や、保護思想の普及を目的とした各遺跡毎の調査説明会を開催した（北目長田・橿待遺跡6月30日、堂田遺跡7月7日）ところ、関係者ほか町民多数の参加が得られたことを付記しておく。

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

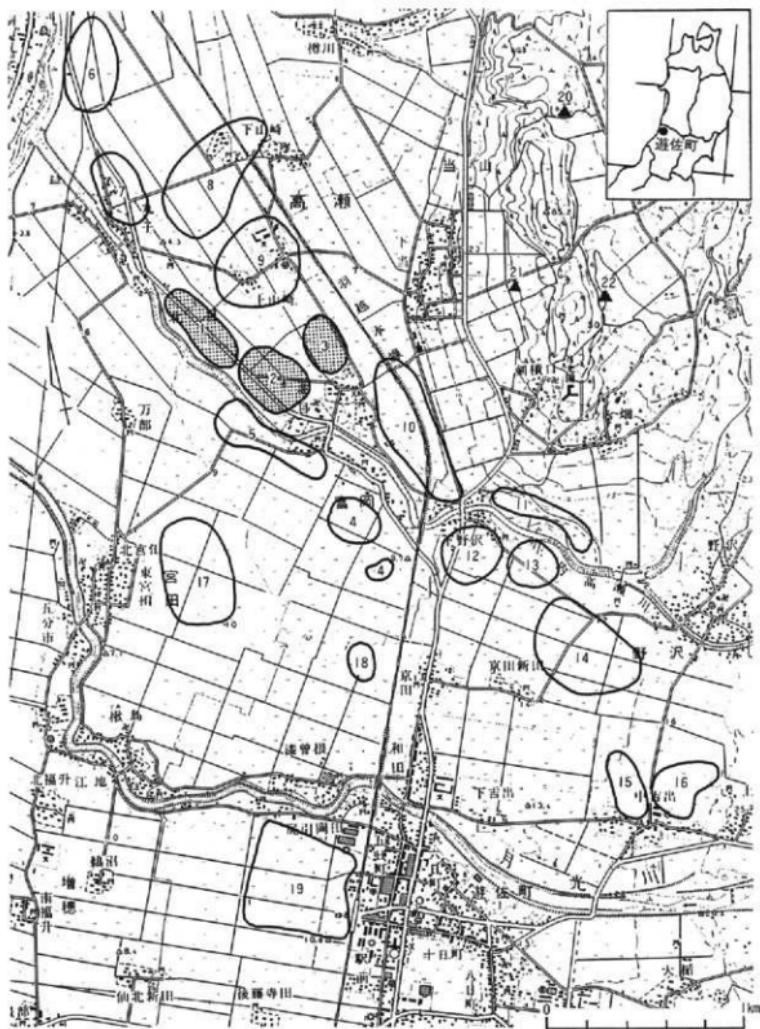
北目長田・権待・堂田の3つの隣接する遺跡は、遊佐町の中心部から北西方向に約3kmのところに位置している。一帯は水田で、その周囲には、南方に北目、北方に上山崎、北西方に丸子の各集落がある。標高は、北目長田遺跡の調査区付近で5.3mを測る。庄内平野の北端にあたり、北から北東方にかけて鳥海山の雄姿を臨むことができる。また、この周辺には、第1図で示すように、庄内高瀬川に沿って並ぶ様に、数多くの平安期を中心とした遺跡が点在しており、今回調査を実施した3遺跡もこの遺跡群の中に含まれている。

遺跡の範囲としては、北目長田遺跡と権待遺跡が東西約500m、南北200~300mほどの規模であるのに対して、堂田遺跡の範囲はおよそその2分の1である(第2図参照)。これらの遺跡群は、庄内高瀬川や月光川など北西に流下して日本海に注ぐ中小の河川が形成した自然堤防(微高地)が立地基盤となっている。現在は、長年の水田耕作他の影響からだいぶ平坦化されているが、かつては自然堤防による微高地や葦や茅の生い茂る後背湿地が、流路に沿ってより明確な形で点在していたものと推察される。遺跡周辺に見る泥炭層の分布や河川による砂礫層他の堆積物、加えて遺跡の分布状況等が、そのことを傍証するかのごとくである。人々は、比較的高燥な自然堤防上を居住空間に、低温な後背湿地や小河川のそばは水田にというように、自然地形をうまく利用しながら低地での居住域を拡大していったと捉えることができるだろう。

2. 歴史的環境

遊佐町管内でこれまでに確認された遺跡総数は173箇所以上におよび、県内でも有数の遺跡密集地と位置づけられる。これまで注目された遺跡・遺物を例に上げれば、縄文時代前期末葉の吹浦遺跡、縄文後期から晩期全般にわたる神矢田遺跡、大陸との交渉を物語る三崎山出土の青銅刀、特殊な出土状況と端正な形姿を止める中空土偶で著名な杉沢遺跡、縄釉陶器や灰釉陶器のまとまりと地震に遭った建物跡やその後の地鎮祭祀が注目された下長橋遺跡、出羽國の産物「甘藷」を記した木簡や、東海地方産と推定される灰釉陶器類の優品が多数出土した大坪遺跡など枚挙に暇がない。一方、目を転じて本遺跡群の所在する水田地帯に目を向ければ、南東に仁田々遺跡・袋冷遺跡・三田遺跡・大坪遺跡・宅田遺跡・石田遺跡、南方へ上高田遺跡・木原遺跡・木戸下遺跡、北方の地蔵田遺跡・中田浦遺跡・野瀬遺跡・筋田遺跡他多数の遺跡が密集して分布する様子は注目に値しよう(第1図)。

さらに、これらの多くの遺跡が近年のは場整備事業に伴って広範にあるいは部分的にしろ発掘調査されており、時代的に奈良時代後葉から平安時代中葉(10世紀)頃までのいわゆる「律令期」に継続した遺跡群であることが注目される。なお、この地区の中核といえる大坪遺跡に関して言えば、隣接する宅田遺跡や石田遺跡等をも含めて「古代駅家」(遊佐駅?)他の官衙関連の性格が推定できる内容をもち、月光川南岸の小深田遺跡・下長橋遺跡・東田遺跡・地正面遺跡他の遺跡群が含まれるかどうかは問題としても古代飽海郡域の中核的一角(遊佐郷?)を占める地域であった可能性は否定できない。



第1図 遺跡位置図（国土地理院発行2万5千分の1地形図「吹浦」を使用）



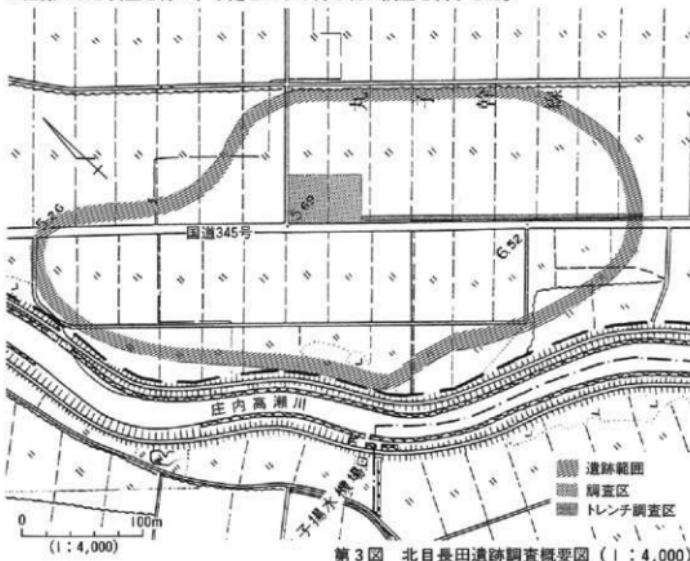
第2図 遺跡概要図 (1:5,000)

III 北目長田遺跡

1. 調査の概要

今回の調査は、北目長田遺跡域の北東部分に係る国道345号線沿いの3,300m²を主な調査対象地区（第3図参照）として実施したものである。調査区の設定からはじめて、表土の除去、面整理・面精査、遺構検出他一連の手順で進めたが、以下に各作業の工程と経過を略記しておく。

平成6年5月10日、現地プレハブ事務所に器材を搬入し、事務所内外の環境整備、作業員に対する作業の説明等を行い、翌日からの調査に備えた。5月11日に調査区（大区画）を設定し、中央十字レンチにより層序と遺構検出面までの深さを確認した。5月12日から5月18日までの延べ5日間にわたり、重機を導入して表土の除去作業を実施し、併行して面整理を行っている。5月20日には、調査区内に杭打ちを行い、10m四方の小区画を設定した。その後、遺構検出に向けての面整理及び面精査を継続し、6月9日で大方遺構の検出を終了した。検出した遺構については、遺構配置図（1:100）を作成し、6月10日からは遺構の登録と精査を開始した。重要な遺構については、遺物の出土状況や完掘状況、土層の堆積状況等を記録するための平面図・断面図の作成及び写真撮影を行った。また、出土した遺物についても、重要なものについてはR.P番号を付け、出土地点・レベル等の記録と写真撮影を行っている。調査の最終段階として、6月30日に現地説明会、7月6日に空撮による測量を行い、予定どおり7月8日に調査を終了した。



2. 遺跡の層序

今回の調査区は、遺跡範囲の北東部に位置している。

平成4年11月の分布調査によると、遺跡北西部とともに、遺構・遺物が集中して分布している地域である。調査区西側の土層状況（第4図）をみると、遺構検出面はIII層の上面で、地表面からの深さは30cm前後である。

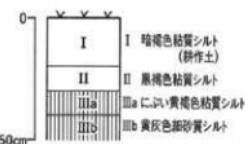
I・II層の粘質土に対して、III層は概ね砂質シルトな

いしは細砂であるが、ところによっては、上部にやや粘質の層（IIIa）がみられる。II層の下からIII層に入り込む形で、炭化粒を含む薄くしまったブロック状の層が所々にあり、調査区内での遺構の存在を示していた。また、II層目から多量の遺物の包蔵が認められ、重機による粗掘や面整理の段階で1日平均コンテナ4箱程度の土器類が出土している。ただし、北東方向に向かうに従って地盤が低くなり、D-2～3及びEグリッドでは、遺構はほとんど検出されず遺物の出土もわずかであった。従って前述の分布調査の結果と合わせて考えると、Eグリッド付近が遺跡範囲の境界線で、それより北東部分は、旧河道あるいは後背湿地であったと判断できる。また、一部の遺構の覆土に火山灰の堆積がみられたが、すべて十和田aテフラに由来するとの分析結果であった。多くの混入物が存在するところから、一時的に降下堆積した火山灰である可能性は低いとされる。したがって、降灰の時期と遺構が営まれた時期との関連を明確に結びつけるまでには至らなかったが、大方の遺構は降灰以前のものと判断される。

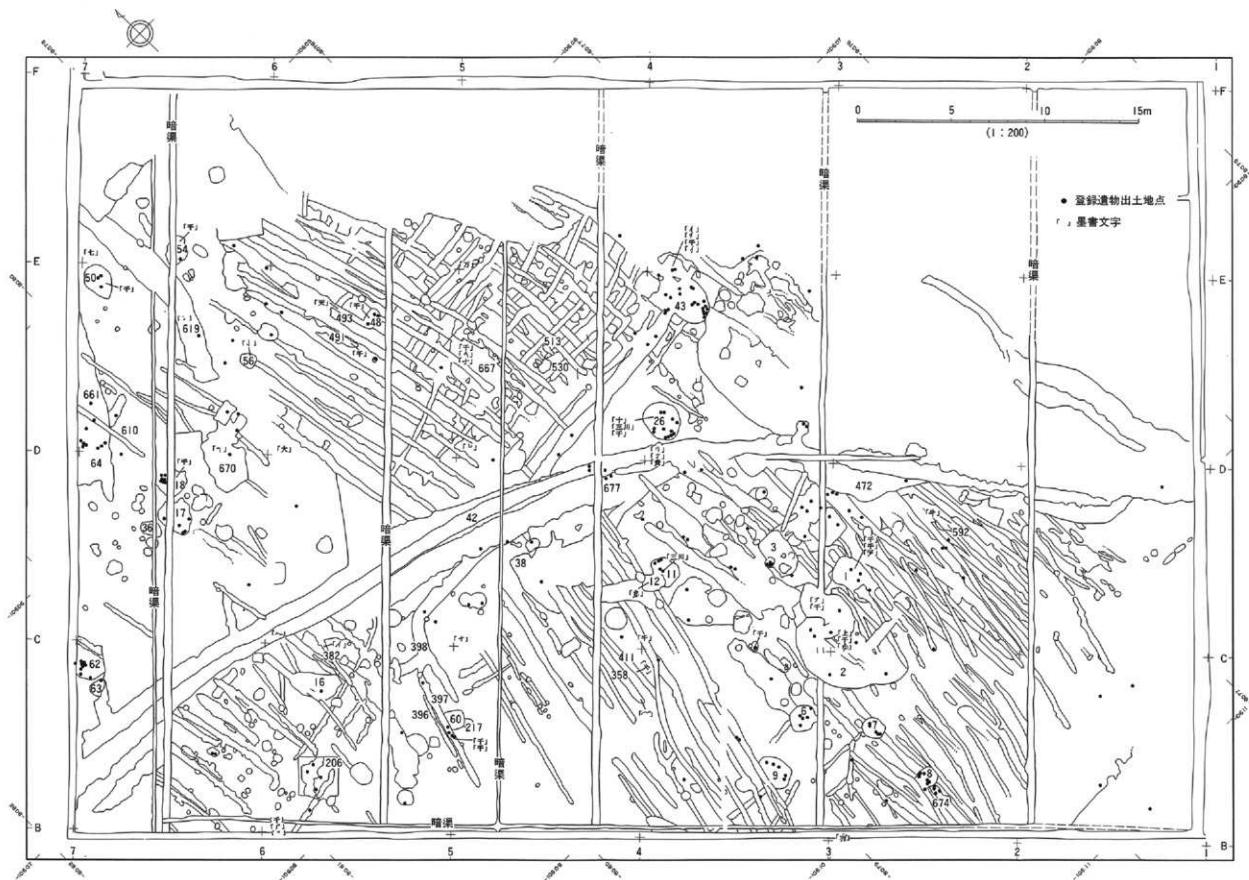
3. 遺構と遺物の分布

検出遺構の配置状況は、第5図に示した通りである。遺構の中でもっとも多く認められたのは、調査区中央部の微高地上に広がっている畝状の遺構である。282条の溝跡が検出され、畝の軌跡群と考えられた。溝跡は、南北あるいは東西方向で等間隔に平行配置され大きく4つの区画より構成される。1条の溝跡は、幅30～50cm、長さは10～15m程度である。さらに、その区画の中でも、溝跡の方向や間隔の違いから2～4時期の変遷（第14図参照）が認められた。次いで、大小の円形や梢円形をした土壙が77基検出された。SK26、SK43など、いくつかの土壙からは墨書き土器を含む須恵器やあかやき土器がまとまって出土している。建物跡については、柱根が数点検出されており、その存在が確認された。しかし、柱根検出地点のほとんどは、SD492やSD577など前述の密集した畝状溝跡の中であり、一棟の建物跡を構成するような柱穴のまとまりを検出するまでには至らなかった。建物は畝状溝跡を築く時期には、すでに廃絶しており、建物を解体後に畝として利用したと考えられる。

遺物は、第5図の●で示すように比較的大きな土壙を中心に分布している。出土点数の約半数をあかやき土器が占め、次いで須恵器となるが、墨書き土器（第5図の「」参照）に関しては須恵器が大半であった。製塩土器が、3つの地点で集中して出土していることも本遺跡の特徴である。器種では、壺がもっとも多く、須恵器では範切りが主流である。



第4図 上層柱状図



第5図 北目長田遺跡遺構配置図 (1:200)

4. 検出遺構

歛状溝跡（第6・7・8・9図、第14図下）

今回検出された畠の歛跡と考えられる溝跡は、大きく4つの区画より構成される。

A区画（第6図）、B-6～7グリッド、SG42の南側に位置し、東西15m、南北10m程の規模を持つ。溝跡群はSG42によって切られる形になっており、対岸にそれに連続すると考えられる溝跡も検出されることから、この区画は北の方向にさらに7～8m広がる可能性が考えられる。歛跡には3時期の変遷が認められる。第1期は、SD361・363・366・372・377・381・183等の南北方向に走行する溝跡で構成され、長さ5～8m、幅30～50cm、深さ20～30cmの溝跡が2～2.5mの間隔で平行に配置されたものである。ただし、前述のようにSG42の対岸の溝跡まで含めてとらえると、長さは約2倍の10～15mになる。第2期は、SD384・385・386（389）等の東西に走行する溝跡で構成され、1m間隔で平行に配置される。SD384は第1期のものと同等の長さを持つ。第3期は、SD375・379（387）・382等の南北方向に走行する溝跡によって構成される。第1期と比較すると約20°東に傾く方向に配置され、幅は20～30mと狭くなる。その他の形態は第1期と類似する。

B区画（第7図）、B-C-4～5グリッドに位置し、東西10m、南北18m以上の規模を持つ。北方はC-5グリッド付近のSG398によって区画されるが、南方は調査区を越えてさらに広がる様相を見せてている。歛跡の変遷は認められず、同時期のものと考えられる溝跡が約20本南北方向に走行する。区画の北側にSD401～422、南側にSD413～423が配置されるが、これらの南北に分かれて検出された溝跡は本来SD423のような1本の長い溝として機能していた可能性が高い。その場合、1本の溝跡の長さは約20mとなる。幅・深さは、それぞれ30～40cm・20～40cmを測る。溝跡の間隔は1m前後である。

C区画（第8図）、B-C-2～3グリッド、SG472の南側に位置し、東西20m、南北15m以上の規模を持つ。B区画と同様に、調査区の南北方向にさらに広がっている可能性が強い。歛跡には2時期の変遷が認められる。第1期の歛跡は、SD434・435・437・439・448・453・454・458・581・577・582・583・588・590・592・595・596・464・468等の南北方向に走行する溝跡で構成される。溝跡の長さは3m～5mを測るが、B-2グリッドまで延びていたと考えられる溝跡が多く、本来の長さを確定することはできない。幅・深さは、それぞれ20～30cm・20～50cmを測る。1m前後の間隔で南北方向に平行に配置されている。第2期は、SD431・433・437（438）・440・446・449・450（453・560・559）・662（570）・456（572）・457（580）・459・460（597）・462等の南北に走行する溝跡によって構成される。第1期と比較すると約20°東に傾く方向で平行に配置されるが、この関係はA区画の第1期と第3期の関係に類似している。また、B区画の溝跡と同一方向であることも注目される。この時期は、2つの区画が東西30m、南北20m規模の1つの区画として機能していたと考えてもよさうである。1本の溝跡の長さは約15mを測り、幅・深さは第1期のものと同等であった。

D区画（第9図）、D-5～6グリッド、SG506の北側に位置し、東西20m、南北18m

の規模を持つ。歯跡には、3時期以上の変遷が認められ、30本以上の溝跡が切り合っている。第2期の歯跡に含まれている S D533やS D658、S D535は第1期歯跡以前の溝跡とも考えられ、その場合、第1期を遡る最古期が存在すると考えられる。第1期は、S D484・486・489・492・495・510・514・540・542等の南北に走行する溝跡によって構成される。溝跡は、区画中央付近のもので長さ20m、幅30~40cm、深さ20~50cmを測り、2m間隔で平行に配置される。第2期は、S D505・530・533・534・658・515・535・536・501・630・644・643・642等の東西に走行する溝跡によって構成される。1m間隔で区画東部を中心に平行に配置されるが、前述のように最古期が存在する場合は、それぞれの時期で2m間隔の配置がなされていたと推測される。S D501のように西方向に長く延びる溝跡もあるが、概ね5~8mの長さで、幅・深さは第1期と同等である。第3期は、S D485・488・490・623・507(497)・509(633)・513・541等の南北に走行する溝跡によって構成される。溝跡の方向・長さ・幅・深さ・間隔、いずれも第1期と同等である。溝跡は、第1期の溝跡と1mの間隔を置いて並行するように配置される。ところで、本区画の第1期および第2期の歯跡をA区画のそれと比較すると、方向、間隔等が極めて類似していることがわかる。両区画は、S G43やC-6グリッド周辺の擾乱によって分断された同一の区画であったと考えることもできそうである。

従って、上記4区画の歯跡は、S G398(506)の両岸に展開する2~3区画にまとめられ、それを単位とした集落が営まれていたと捉えられそうである。

建物跡

「3. 遺構と遺物の分布」で述べたように、1棟の建物跡を構成する柱穴のまとまりを検出するまでは至らなかったが、S K36(第12図下参照)で示すような柱根の検出によって建物跡の存在は明らかである。柱根の出土地点を前述の歯状溝跡区画に対応させてみると、B~C区画ではS D592他4箇所、D区画ではS D492他5箇所となり、いずれも歯状溝跡と重複していた。建物はこれらの歯状溝跡区画を単位として、歯跡に先行して構築されたものと判断される。

土壙(第10・11・12・13・14図)

検出された土壙の多くは、歯状溝跡と重複関係を持っている。以下、まとまった遺物を出土した土壙や特徴ある土壙のいくつかについて概略を述べる。

S K 6(第10図左上)、B-4~5グリッドに位置し、北側をS K 5と接している。略円形で、長径155cm・短径130cm、深さ40cmの規模を有す。覆土は、炭化粒を含む5層からなり、4層中央部に火山灰を含む。底面近くから出土した糸切り須恵器壺と1層で出土したあかやき土器壺等との時期差は認められず、短期間に埋没した土壙と考えられる。

S K 7・S K 8(第10図右上・左上)、B-3グリッドに位置し、両土壙ともS D438を切る。略円形で、長径110~120cm・短径110cm、深さ20~40cmの規模を有す。S K 7の覆土は、炭化粒を含む9層からなり、7層は炭の純層ともいえる。同層より熱を受け煤の付着するあかやき土器鉢が出土しており、土壙内での焼成痕跡を窺える。S K 8の断面は船底

形を呈し、覆土が2層からなる浅い土壇である。両黒の黒色土器壺や製塩土器が出土している点が注目される。両土壇は、遺物の比較からも同時期の遺構と判断できる。

S K 9 (第10図左下), B-4グリッドに位置し、西方をS D 423に切られる。平面形は橢円形で、長径195cm・短径120cm、深さ25cmの規模を持つ。覆土は3層からなるが、最上層は大粒の炭化粒を含み、あかやき土器の壺、甕等が出土している。

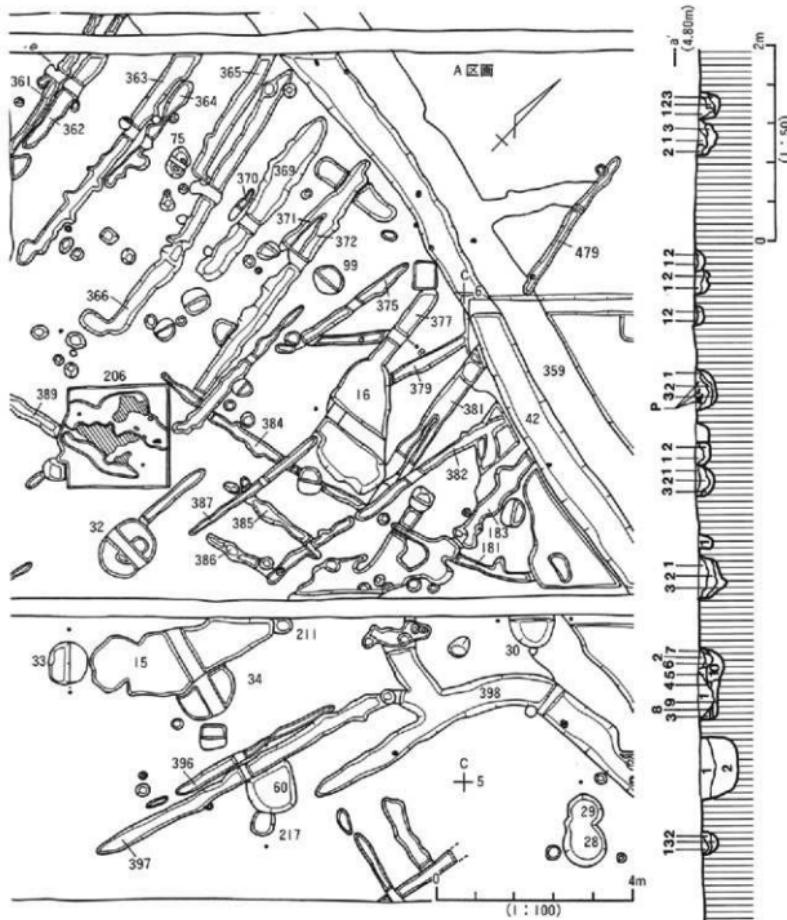
S K 43・S K 26 (第11図), D-E-4グリッド位置する。S K 43は、西方をS G 506と接し、長径400cm・短径200cmの不整形で、深さ20cm内外を測る。水分を含み軟弱な覆土の中に、時期差のある土器が多数散在していた。破片集計で、須恵器72点・あかやき土器154点、黒色土器他65点を数えるが、壺は須恵器が主体である。底部に墨書き文字「イ」を有する窓切りの須恵器が3点(壺2・高台付壺1)、窓描を有する窓切り須恵器壺が1点出土している。墨書きは、同一人物あるいは同一家族によって記されたものと推察される。他に、土錐、砥石が各1点出土している。S K 26の平面形は略円形で、長径210cm・短径180cm、深さ20cmの規模を持つ。覆土は炭化物を含む4層からなり、断面は船底形を呈する。遺物が多数出土し、墨書き文字を有する須恵器が4点含まれている。「十」の文字を持つ窓切り壺2点、「三川」の文字を持つ糸切り壺1点、「千」の文字を持つ蓋が1点である。「三川」文字を持つ須恵器は、S K 26の南西約7mに位置するS K 11からも1点出土しており、筆跡の類似が認められる。また、「千」の文字を持つ土器は調査区全体で、20点以上出土しており、本遺跡を象徴する墨書き文字と言えそうである。

S K 62(第12図左上), B-7グリッドに位置し、調査区北西境界面を越えて広がる様相を呈している。長径170cm以上、短径150cmの不整形で、深さ20cmを測る。外面自然釉の須恵器壺、煤の付着したあかやき土器鍋等が出土している。

S K 50 (第12図右上), D-7グリッドに位置し、平面は橢円形で長径180cm・短径130cmの規模を有す。遺跡プラン検出中に製塩土器が集中して出土した地点にあたり、覆土最上層から炭化粒、灰とともに多数の土器片が出土した。3層目から、長さ100cm、幅10cmの木材等が出土し、4層目は人為的に埋められた粘土層であった。これらのことから、S K 50は、井戸跡と考えられるが、井戸廃棄後も他の目的で機能していたと推察される。

S K 206 (第14図), B-6グリッドに位置し、前述の畝状溝跡A区画と重複関係にある。2m四方の焼土上に製塩土器片が集中して出土した遺構である。このS K 206を中心とする半径約5mの円周上に位置するS D 372、S K 16、S K 33等の遺構(第6図参照)の覆土には炭の純層が認められた。この地点での製塩作業を示すものとして注目される。さらに、ほぼ同一円周上に位置するS P 211からは、成人のものと推定される火葬人骨が出土しているが、この区画内で火葬が行われたかは不明である。

他に注目すべき遺構として、同一筆跡の墨書き文字「千」を有する壺が3点出土したS D 397 (第11図右下)、あかやき土器や黒色土器がまとめて出土したS K 17・18 (第12図下)、溝跡と土壇の重複を遺構内に含むS X 64、墨書き土器・黒色土器・砥石等が出土したS K 11・12 (以下第13図)、製塩土器集中出土のS K 677 (第14図右上)等がある。



SD377.

1. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート
（斜面を含む。しまっている）

2. 10Y14/4周壁面斜面斜面シート
（斜面を含む。しまっている）

SD375.

1. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート（斜面を含む。しまっている）
2. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート（斜面を含む）

SP376.

1. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート（斜面を含む。しまっている）
2. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート（斜面を含む）

SD377-371.

1. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート（斜面を含む。しまっている）
2. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート（斜面を含む。しまっている）
3. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート（斜面を含む。しまっている）
4. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート（斜面を含む。しまっている）
5. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート（斜面を含む。しまっている）
6. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート（斜面を含む。しまっている）
7. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート（斜面を含む。しまっている）
8. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート（斜面を含む。しまっている）
9. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート（斜面を含む。しまっている）
10. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート（斜面を含む。しまっている）

SD369.

1. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート
（斜面を含む。しまっている）
2. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート
（斜面を含む。しまっている）

SD370.

1. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート（斜面を含む。しまっている）

SD366.

1. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート
（斜面を含む。しまっている）

2. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート（斜面を含む。しまっている）

SD365.

1. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート（斜面を含む。しまっている）
2. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート（斜面を含む）

SP75.

1. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート
（斜面を含む。しまっている）

2. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート
（斜面を含む。しまっている）

SD349.

1. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート（斜面を含む。しまっている）
2. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート（斜面を含む）

SP70.

1. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート（斜面を含む。しまっている）

2. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート（斜面を含む）

SD367.

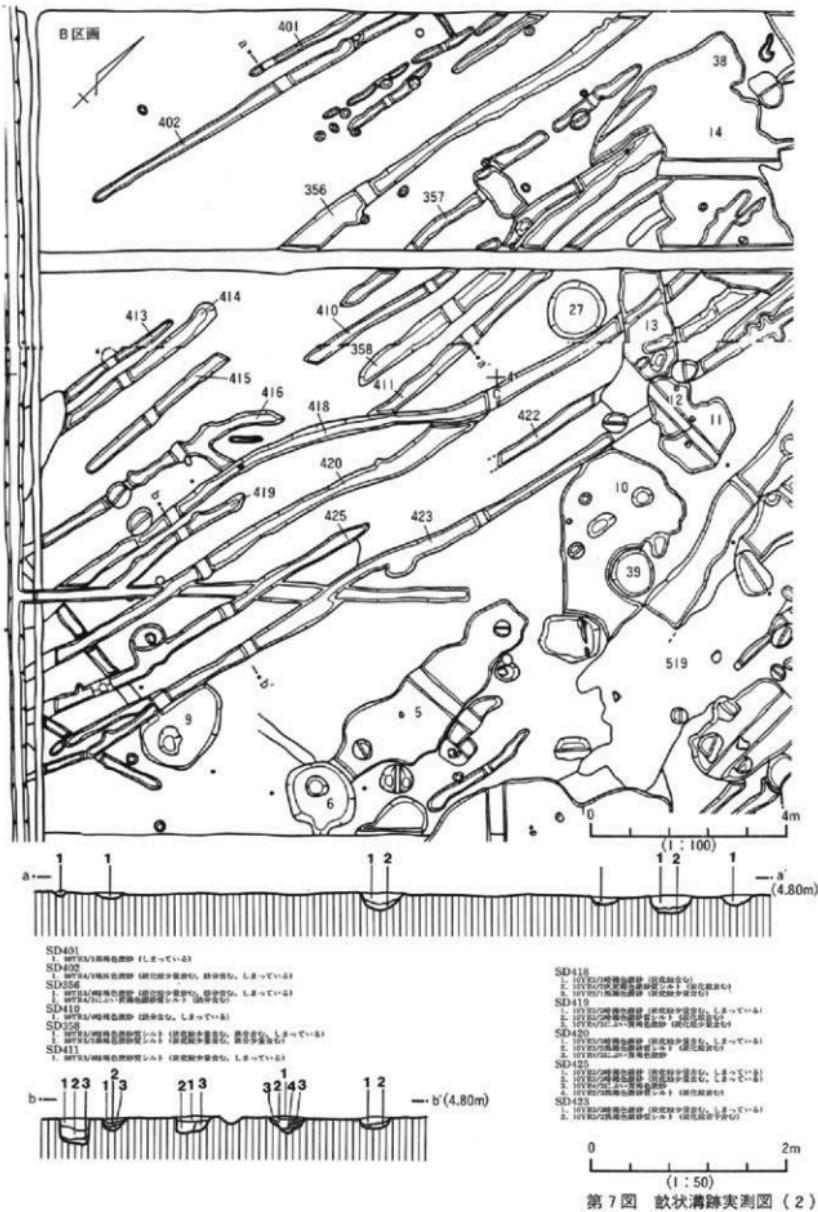
1. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート
（斜面を含む。しまっている）

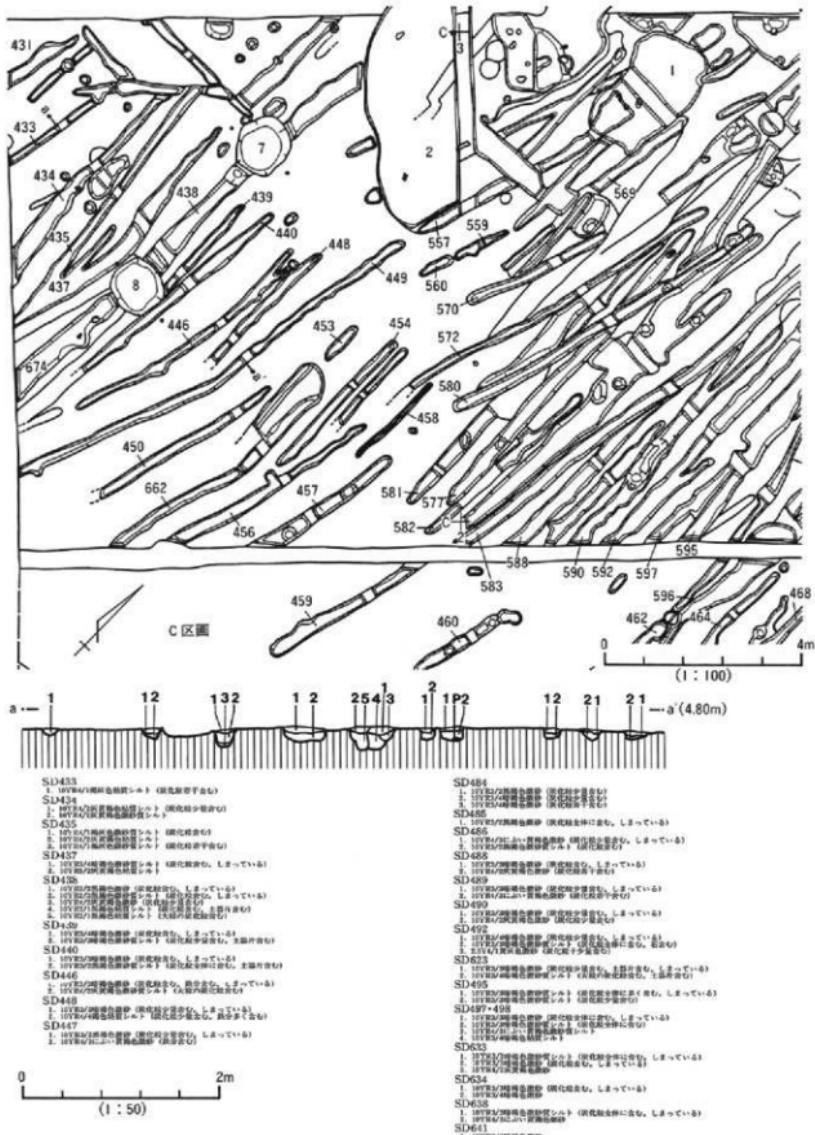
2. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート
（斜面を含む）

SD361.

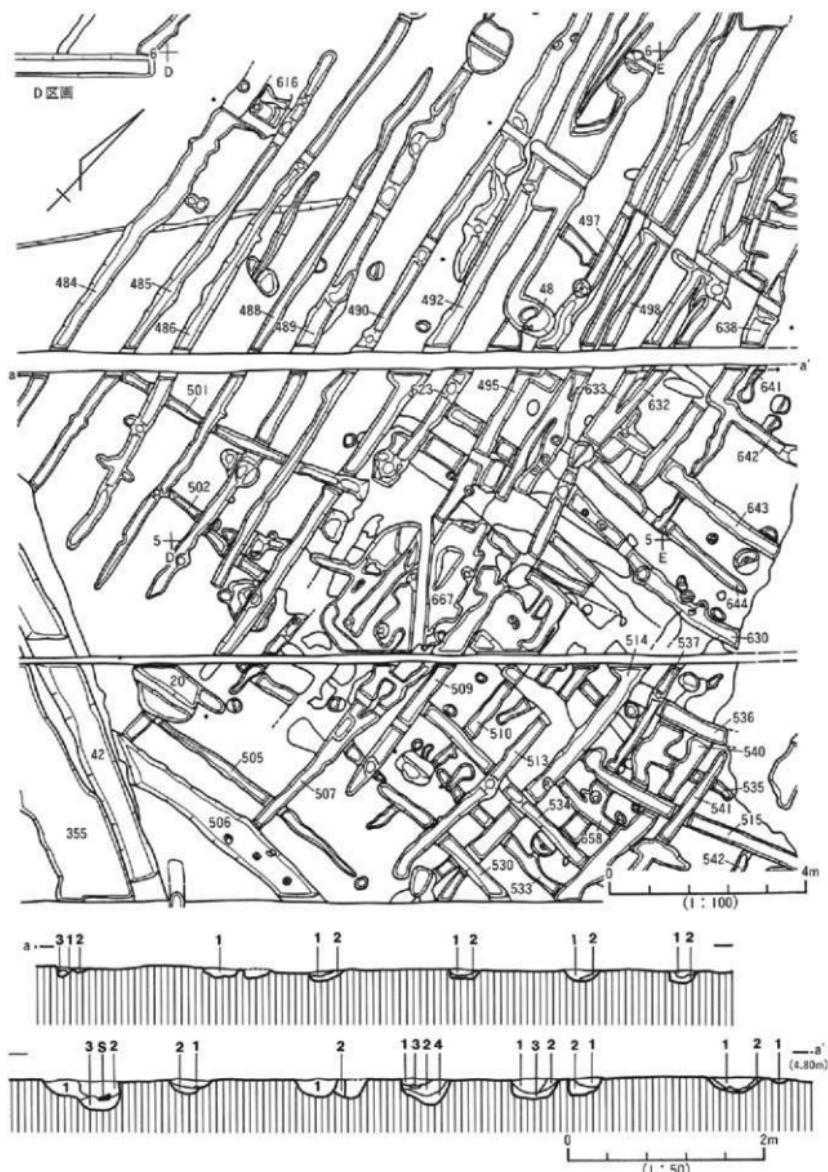
1. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート（斜面を含む。しまっている）
2. 10Y12/3周壁面斜面斜面シート（斜面を含む）

第6図 款状溝跡実測図(1)

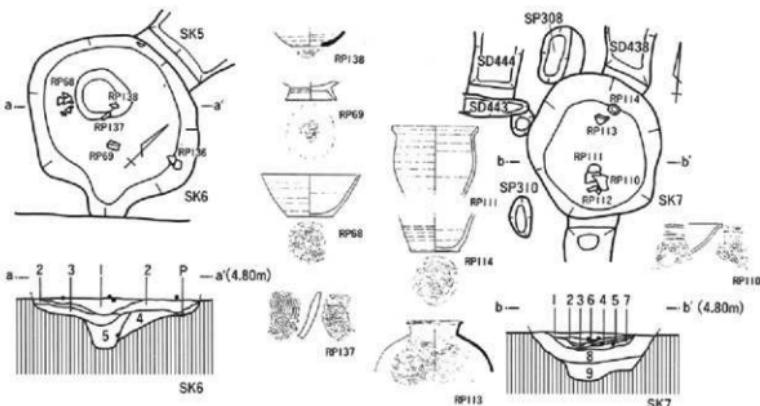




第8図 故状溝跡実測図(3)

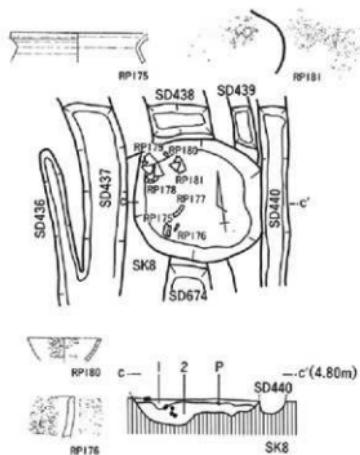


第9図 欠状溝跡実測図(4)

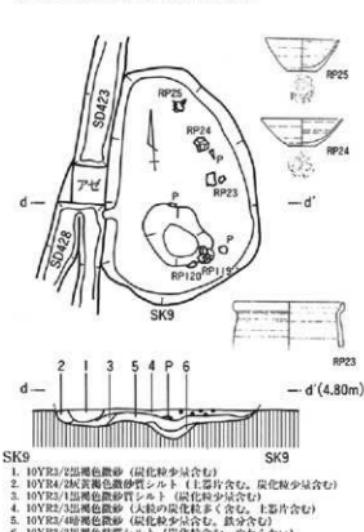


1. 10YR3/2黒褐色微砂質シルト (炭化物、上部片含む)
2. 10YR6/2に2.5赤褐色微砂質シルト (炭化物少含む)
3. 10YR6/3に2.5赤褐色微砂質シルト (炭化物少含む)
4. 10YR3/1黒褐色砂質 (青苔。RP138、上部片含む。中央下部に火成岩を含む)
5. 5Y4/1赤褐色砂 (炭化物全体に混じる)

1. 10YR2/3黒褐色微砂質シルト (炭化物。上部片含む)
2. 10YR2/3に2.5赤褐色微砂質シルト (炭化物少含む)
3. 10YR2/3に2.5赤褐色微砂質シルト (炭化物少含む)
4. 10YR2/1黒褐色粘質シルト (炭化物全体に多く含む)
5. 10YR4/3に2.5赤褐色粘質シルト (炭化物少含む)
6. 10YR2/3黒褐色粘質シルト (炭化物の層)
7. 7.5Y4/2赤褐色粘質シルト (炭化物、上部片少含む)
8. 10YR4/2黒褐色粘質シルト (炭化物若干含む)

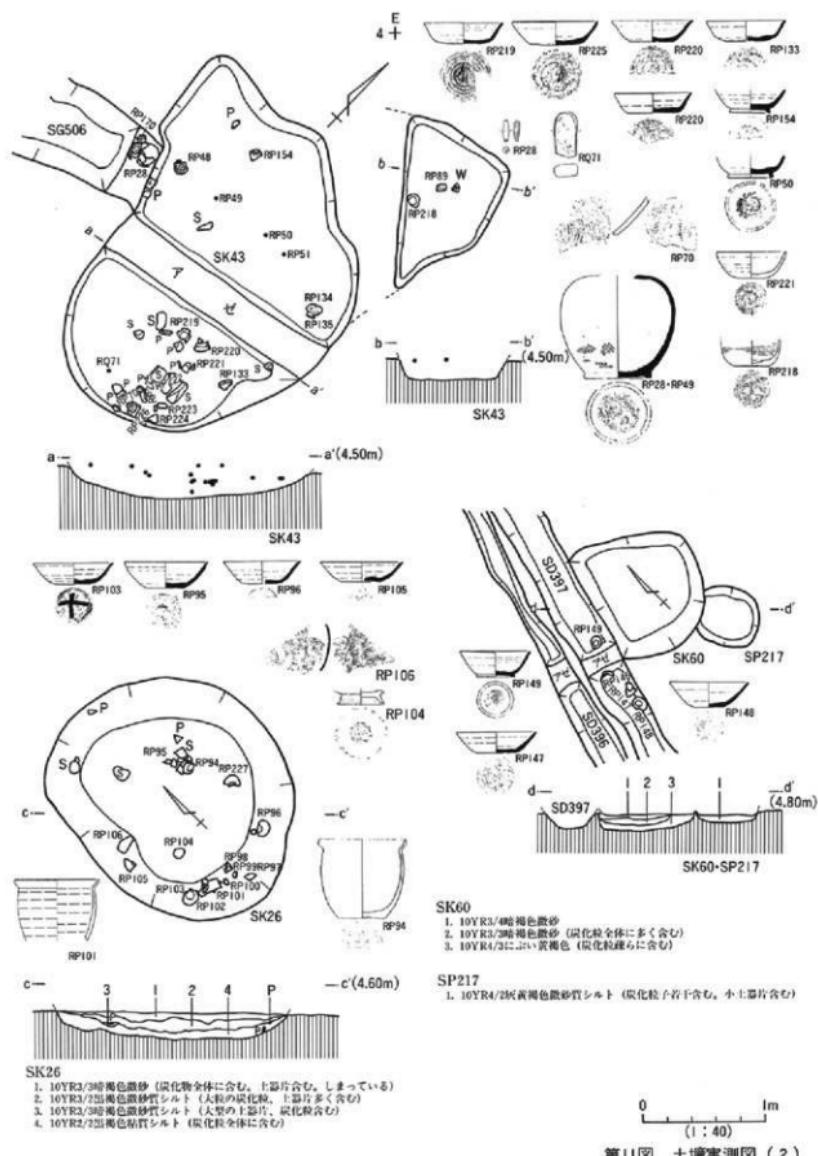


1. 10YR2/2黒褐色微砂質シルト (炭化物全体に含む)
2. 10YR4/2赤褐色微砂質シルト (炭化物少含む。鉄分、上部片含む)

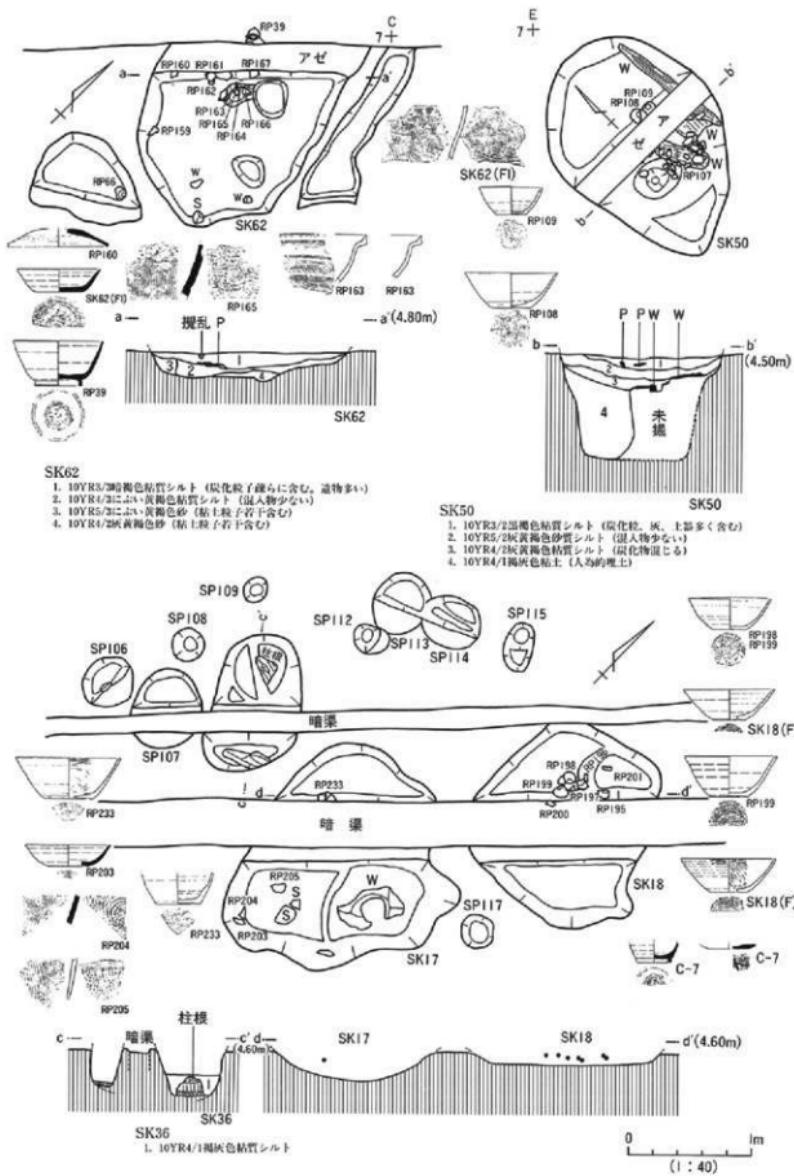


1. 10YR2/2黒褐色微砂 (炭化物少含む)
2. 10YR4/2赤褐色微砂質シルト (上部片含む。炭化物少含む)
3. 10YR4/1黒褐色微砂質シルト (炭化物少含む)
4. 10YR2/3出褐色微砂 (炭化物多く含む。上部片含む)
5. 10YR3/4赤褐色微砂 (炭化物少含む。鉄分含む)
6. 10YR4/2赤褐色粘質シルト (炭化物含む。やわらかい)

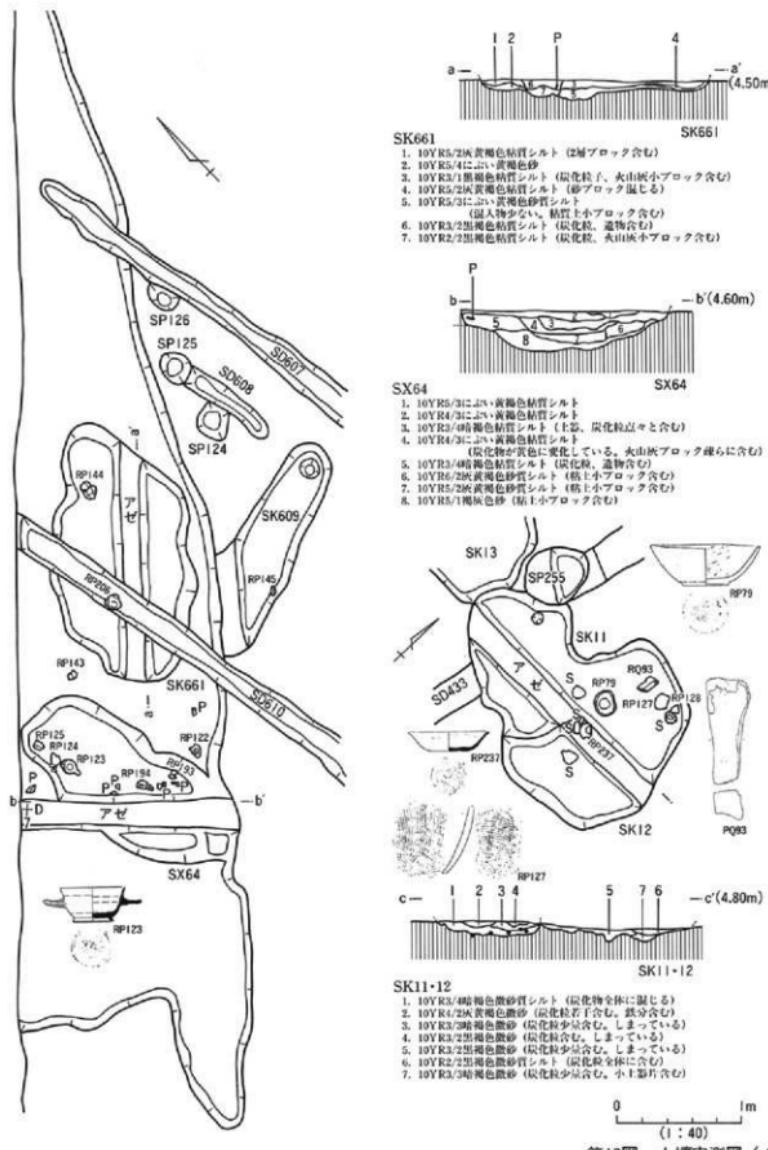
第10図 土壌実測図 (1)



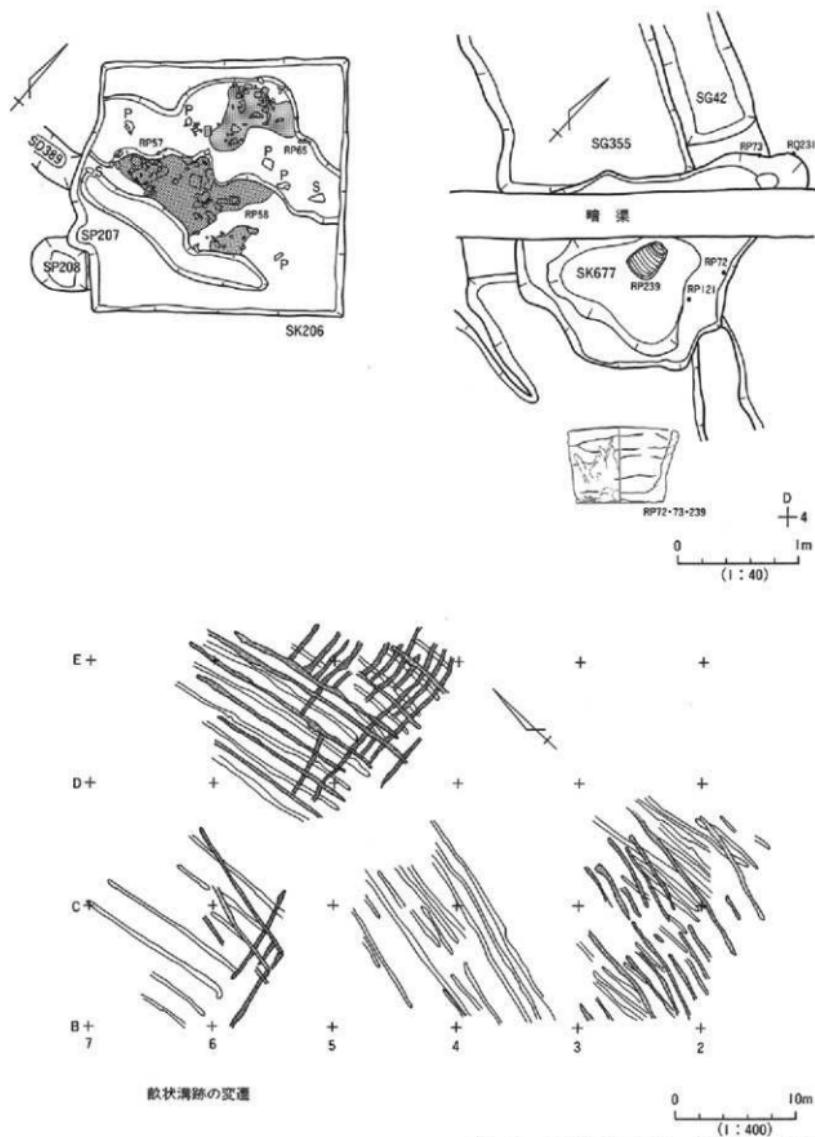
第II図 土壤実測図 (2)



第12図 土壌実測図(3)



第13図 土壌実測図 (4)



5 出土遺物

本遺跡から出土した遺物は包含層・遺構内を合わせて整理箱79個相当の分量であり、種別的には土器・土製品・石器・石製品及び若干の木製品等であった。これらは主体的に精査拡張した面積が2,400平方m程であったことからみれば、単位面積当たりの出土数がいかに高率であったかを示している。以下では出土遺物の大半を占めた土器類を中心に種別器種毎の概要を記していく。

1) 土器 (第15~26図)

出土土器他の種別では、包含層を除く遺構内出土総数11,245点の内訳に限って言えば、須恵器19%、あかやき土器53%、黒色土器4%、製塙土器23%、土師器・土錐・石錐・砥石等1%であった。「須恵器の定量、黒色土器の低率組成、あかやき土器の優勢と際だった製塙土器量、その他土・石製品の希少性」等とここでの特徴を概括できる。

しかし、この数値には、あかやき土器で煮炊形態各器種の破片類を相当数含むこと、須恵器の壺・壺類が遺構内に少なく、主体は小型の壺類が占めたこと、黒色土器も須恵器同様に供膳器の壺・碗類に限定されるなどの状況が含まれており、加えて、製塙土器では固体数が少ないながら破片数としては多大に計量されるなどの特殊な全体像が反映された結果であることに一面では留意すべきと思われた。

小型の供膳具に限った種別組成を検討すると（集計に当たっては、須恵器・あかやき土器・黒色土器・土師器等の壺類底部592個体相当を対象とした。）、須恵器50%、あかやき土器42%、黒色土器1%となり、ここでは「須恵器の優位と卓越傾向、あかやき土器の量的擅場、黒色土器の低率組成、在地的土師器の極少・劣勢」等の特徴が看取される。

また、須恵器壺類での底部切り離し手法では、回転糸切29.4%、回転箇切58.9%、台付で糸切7.1%、箇切4.4%の数値であった。従って全体では箇切63%、糸切37%となり総じて箇切り手法の優勢な9世紀中葉段階以前の古相を呈していると判断できる。

以下に遺構単位で認められた遺物群のまとまり等について須恵器・あかやき土器・黒色土器等の供膳器を中心概説していく。なお指標となる須恵器壺他の供膳器については遺構相互の関連を窺う目的から、分類してその概略（第27図）を記す。遺物個々については諸属性の概略を觀察表中にまとめてるので参考されたい。

須恵器蓋の分類

蓋は法量から口径16cm内外のA（5・9・10・12・13）と口径14cm内外を示すB（1～4・6～8・14）の主体的な2種が識別でき、さらに各々の形態や調整手法等から細分される。

高台付壺との相関はその法量から蓋Aが高台付壺A、蓋Bは高台付壺Cに対応すると推定でき、有蓋壺での法量分化が傍証される。また、形態からa；山笠タイプ（3～6・8）とb；平笠タイプ（1・2・7・9～14等）の二つに大別できるほか、切り離し手法と再調整（回転箇削り調整の有無）、あるいは口縁端部の作り出し等特徴をもってさらに細分可能と思われたが量的まとまりを欠如することから詳細を割愛した。

須恵器壺の分類（第27図）

高台付壺（15～34）は形態と法量及び切り離し技法などからA・B・C・D・E・Fの

5器種に分けられる。A～Dは切り離し手法が回転窓切りで、E・Fは回転糸切である。A・Cは蓋の法量と照らせば基本的に有蓋形態と捉えられる。各タイプの特徴は口径と器高、高台の取付位置・高台端部の作出手法等から細分が可能である。なお、Cには幾分か器高差の認められる双耳环も含めた。法量的には「Aが深型、Bが浅大型、Cが中型、Dが小型」とでき、A～Dの順に小型化している。

一方、糸切りのEは形態的にFの大型タイプ、Fは中小型と識別でき、内弯して開く口縁部形態等に特徴が求められる。なお、Gは糸切りの台付皿で、量的には僅少であった。

坏(36～63)は供膳器の主体を占めており、高台坏同様に切り離しが窓切り(A～F)の6種と糸切り(G～I)の3種が識別される。窓切りの坏6種は「A；小型でやや深身、B；箱形の逆台形、C；丸底風の大型品、D；E類に近い小型品、E；体部の引き出しが強く、底部やや小径で口縁の外傾・外反度が大き目。F；体部と底部の境界が明瞭で、口縁が直線的に外傾し、以前に桑原氏らが類別した多賀城周辺の須恵器坏6-b類に相当する(岡田・桑原1974)。」等の主要な特徴が指摘できる。また、糸切りの3種は、主として形態的特徴から「G；窓切りのEに似た形態と法量を呈し、体部下端を強く押し下げて疑似底部風となす。H；体部と底部の境界が明瞭で器高が増し、口縁は直線的な外傾となる。I；底部小径で器高があり口縁の開きがさらに増大している。」等から類別が可能である。

あかやき土器坏の分類

あかやき(赤焼)土器は從来「回転糸切り無調整」と定義づけられるものながら、その認識直後から秋田城例(赤褐色土器)をはじめとして回転窓削り再調整を施す一群の存在が指摘された。しかし、これらはいわゆる「須恵系土器」提唱段階で分析対象とした土器群とは燒締使用・酸化焰焼成等の技法的共通性と系譜上の連続性は迫れるとしても、その帰属年代において大きな開きのあったことは周知の通りである。

本遺跡においても、「A；窓切りタイプの須恵器坏に近似する例(21-18, 22-7・13)、B a；内弯タイプのあかやき土器坏においては粗形的な窓切り手法を示す坏(18-24-19)、B b；底・体部境界付近の狭い範囲に回転窓削り再調整を施す一群(17-16, 19-13, 21-6, 24-7)」等の存在が確認され注目される。また、これらに後続するタイプはこれまでにも庄内地域北半の鮭海郡域では普遍的に認められたものであり、「C；口縁が内弯ないし直線的外傾を示すもので、さらに、底径が口縁部径の4割強以上を占める逆台形状を呈する一群(15-29, 17-22・26, 17-21・30他の大小2タイプがある。)」等と規定できる。

以後、「D；底径の縮小化と器高の増大、口縁の外傾・外反度合いの増大、あるいは胎土の粗悪化に比例した著しい歪みの顕現化と量産化への傾向(15-11, 16-12, 20-2他)」へと移行し、總体的として「E；器高の浅い皿形化」、例えば遊佐町浮橋遺跡のSK16での様相から「F；下長橋遺跡V期」への変遷が一般には認められるところである。

こうした状況を勘案すれば、本遺跡ではA；B；C；Dの各類型を含むと見なすことができ、D類僅少でB・C類が主体を占めると判断される。また、資料的に僅かながらA・B a・B bタイプの確認と抽出は、秋田城のみが例外ではなかったことを示した点で意義

深く、日本海沿岸の出羽北半部での特徴的一様相として位置づけることが可能であろう。

なお、分類に加えなかった資料中に、長くシャープな高台の付く皿ないし台付壺類の同一器種2例(15-26, 18-9)と短脚の皿(23-3)1点があつたことを付記しておく。

黒色土器壺の分類

黒色土器は内黒と両黒(C)の2種があり、前者で無台(A)と有台(B)の別が認められた。内黒壺Aの形態的特徴は、あかやき土器壺Cにほぼ等しい「体部や内窓で底径の大きめな逆台形型」と概括される。これには法量的大(a)・小(b)の2種が識別でき、小型のものがより多いと推測できた。調整技法からは、体部下端に回転鎔削り調整を施すタイプ(1)と無調整タイプ(2)のものとが認められ、前者は法量的大小の双方で確認される。

一方、体部やや球形で丸みを呈する有台(B)の一群は、内黒壺A同様に法量的大(a)・小(b)があり、削り出し高台風の高台に特徴が求められ、その祖形が綠釉陶器他の施釉陶器類にあることを示唆するものと推測させる。また、高台は底部の外周を摘み出す様に作出されており、越州窯の青磁壺や古手の綠釉陶器模等にみる「蛇の目高台」風を意識したかと連想させるものがある。なお、両黒壺ないし椀(C)の類は量的に僅少かつ破片資料若干に限られるためここでの細別は不可能であった。

以上のことから挿図中に掲載した当該例を、上記分類に従って列記しておく。無台の内黒壺A a 1類(17-15)、同内黒壺A b 1類(21-5)、同内黒壺A b 2類(17-12・24, 19-26, 24-13, 25-15)、有台の内黒壺B a類(17-3)、同内黒壺B b類(19-5, 25-4)等である。

土器組成(第28・29図)

本遺跡で検出された遺構は畠の跡とみられる小溝跡群・土壤・柱穴、自然の小河川、区画等の人為的溝跡などが主要なものである。このうち、土壤内を中心として幾つかの遺構からまとまつた遺物群が検出されて、遺物の種別組成や変遷を辿る上では欠かせない資料群と考えられた。従って、これらの遺構約30基ほどから得られた成果を基に、既に不十分ながら記した供膳器他の種別器種がどのような組成となっているかを組成1~3に大別して概略を記す。

組成1 (SK 1・14・17・43・62, SD 355, SG 506・522・574)

以下に述べる土器群の組成では、須恵器高台付壺A・B?・C、同壺A・B・C、あかやき土器壺A・B a・B b類が供膳器の主体となって構成される内容と理解され、本遺跡中では最も古い段階の様相を示していると捉えられる。

SK 43では供膳器に須恵器の高台付壺A(1)、壺B(3)・C(4~6)・F(7)、あかやき土器壺B a(9・10)、貯蔵器に須恵器の壺(11)、長頸瓶(12)他の組成が知られた。他の遺構と較べれば須恵器壺C類のまとまりと、回転鎔切りで半球形の形態を呈すあかやき土器壺B aの存在が特筆されるが、遺構の重複からか組成2との混在状況が認められる。

SK 62では須恵器蓋A b(16)、高台付壺A(17)、壺B(18)、須恵器壺(19)、あかや

き土器鍋（21・22）、同長甕（20）などが認められた。時期的特徴を窺うとすれば、あかやき土器鍋の口縁から口唇部にわたる形態的特徴なども須恵器坏以外での手がかりとなりそうで、次の段階と考えているSK 3例での鍋・甕類に近縁なことも注意される。

SK 1では器種的に須恵器の供膳器に限られるが、高台付坏D（48）、坏C（49・50）・E（51）、回転糸切りの坏G（52）の組成を認める。回転糸切りを有する須恵器坏出現の状況を伝える1例と捉えられよう。

SK 14もSK 1同様に須恵器の供膳器に限られる一群で、須恵器高台付坏A（83）、同E（84）、須恵器坏C（85）、あかやき土器の鉢底部（86）等の組成がみられた。

高台付坏Aは体部下端に回転範削りを施しており、全体に作りが丁寧でシャープな優品である。また、高台付坏Eは体部にやや丸みを見せる形態で、底部の切り離しは回転糸切りとなる。須恵器坏Cに含めた（85）も切り離し部が幾分突出してやや小径となる特徴を捉えれば、（40～42）に示したものとは区別すべき類型と考えられ、範切りから糸切りへの総体的流れからみれば、いくらか後出のものと理解される。高台付坏Eも同様に考えてよいものだろう。

SK 17では須恵器坏G（93）、小型のあかやき土器坏B b（94）、大型の黒色土器坏A a 1（95）、須恵器甕の体部破片（96）、あかやき土器長胴甕の体部（97）、同鉢ないし小甕（98）などの組成が知られた。破片類は別として、あかやき土器坏B b類と黒色土器坏A a 1の共伴が認められたことは重要である。なお、須恵器坏Gは破片のため微妙な位置にあると考えられるが、須恵器坏Eの古相に近縁のものと見なせば矛盾しない結果と言える。

SG 506では須恵器の高台付坏C（31）と須恵器の坏Bに似た形態と法量を持つあかやき土器の坏A（32）、その他須恵器の短頭甕（33）や青海波紋の当痕を見せる甕（34）などがある。従ってここでの様相は、あかやき土器坏Aの帰属が須恵器坏Bや高台付坏C段階にあることを示す1例と捉えられる。

SD 522では須恵器高台付坏B（37）と資料的に少ないとされる体部下端に回転範削り調整を行う黒色土器坏A b 1（39）が認められた。また、あかやき土器坏でも回転範削り再調整を施す坏B b（38）が共存しており全体的組み合わせは古い様相と理解されるが、須恵器の坏類を欠くなどの資料的制約が大きいため明確な位置づけは困難である。

その他、器種が限定されるためその位置づけの困難な組成ながら、SG 574の須恵器蓋A b（28・29）等は有蓋形態が組成1の段階に多い理由から、また、体部球形の細口甕（36）の形態が窺えるSG 355等もここで組成段階に含めてよいと考えられた。

組成2（SK 3・6～8・10・11・18・26・42・50・670、SG 398、SD 493）

これらの遺構における供膳器は須恵器坏Eとあかやき土器坏Cを中心に組成される内容と認められるもので、その前後の類型が客観的に混在していると考えられる。

SK 670では、須恵器坏Eの量的まとまりが認められ、削り調整のある須恵器高台付坏C（23）、須恵器坏E（24～26）、同坏F（27）などの組成がみられた。これには近い状況はSK 3にも看取され、その他の器種も含めて良好なまとまりをみせている。

SK 3では須恵器坏E（41～44）、同蓋B b（40）、あかやき土器坏C（45）、同長胴甕

(46)、同鍋 (47) 等の組成が窺えた。しかし、須恵器坏Eとした (41) は器高の浅い同坏C的でもあり古相を残すタイプと識別できる。他の須恵器坏E類 (42~44) の一群も器高的にSK26例よりは幾分高く、その分底径がやや縮小化していると見なすことができそうである。その限りではSK670にみる組成よりはやや後続的要素を有するものと判断される。

SK26では須恵器坏E (54・55)、同坏F (27)、糸切りの須恵器坏G (57・58)、須恵器蓋B a、須恵器坏Hの形態に類似するあかやき土器の坏 (59)、同鉢ないし小甕類 (62~64)、同高台付坏ないし皿 (60)、須恵器甕 (61) などの多様な種別器種よりなる組み合わせが認められ、この段階でのセット関係を辿る上では恰好な1例とできるものとなる。

SK50では回転範削り調整の認められる法量の大きなあかやき土器坏B b (75) と、小型の無調整で箱形を呈する各々タイプを異にする坏C (73・74) が同時期であり、種別器種内での法量分化が捉えられる。また、須恵器の坏類では高台付坏C (71) と双耳坏(70)・同坏F (72) を認めるが、やや崩れかけた須恵器坏Fの形態から推測すると、底部切り離しにおける回転範削りから同糸切り手法への転換期的状況とも受け止められる。

同様な傾向はSK42の須恵器坏F (77) などでも認められ、そこでは須恵器坏H (78) や同蓋A b (76)、深身のあかやき土器鍋 (79)、製塙土器各器種 (80~82) 等の組成と関与を認めてよいと考えられる。

一方、黒色土器はこれまでにみた組成中にほとんど含まれておらず、須恵器やあかやき土器に較べて量的にごく少ないと判断される。遺跡全体についての状況は冒頭に記した通りであったが、土器の用途・機能等の性格に由来する偏在性の有無なども考慮されるべきことがらとして気にかかる。しかしながら、黒色土器そのものの平安期における出現と変遷、食器や儀器として黒色土器が担った機能と性格、およびその需要と供給から規定される出現率の推移等がすなわち組成傾向には少なくとも反映されるとみなすことが可能であろう。集計等手続き段階に大過なければ、既に述べた出自や変遷とその背景までをも含んだ結果と考えてよい。

本遺跡の構造中に黒色土器が認められたのはSK8・11・17・18・48・SD522等に限られており、内容的にはその分類中に述べた通りである。須恵器やあかやき土器坏類との共伴関係からSK11・17・18例などがここに述べる須恵器坏E類やあかやき土器C類を主体とする一群の組成に含まれるものと捉えられる。従ってSK48例については後項で触れ、以下にSK8・11・18での様相を記しておく。なお、SK17・SD522の黒色土器は主として回転範削り再調整有無の観点から前段の組成に含めて検討したところである。

SK11では須恵器蓋A b (65)・同坏E (66)、黒色土器坏B a (67)、あかやき土器長胴甕体部 (68) などの組成が知られ、削り出し高台風の底部調整を施す大振りな黒色土器碗の存在が注目される。また、SK3例 (42) に近い底部小径の須恵器坏E (66) にはSK26の須恵器坏G (54) に記された「三川」に同筆と見られる墨書が認められた。従って須恵器坏Eの新相と同坏G相互の同時性、あるいはSK26で須恵器坏F (56) として小径で

器高の高い壺類が近縁のものであると推定できることは重要である。

S K18では須恵器高台付壺D (87)・同壺E (88)、あかやき土器壺C (91)・同壺D (89・90)と黒色土器壺A b 2の組成が見られ、特にあかやき土器壺Cから同壺Dへの傾斜傾向が読み取れる。須恵器高台付壺Dや同壺Eにしても既に主体とは考えられず、これらの帰属する段階よりは後出のものと位置づけるのが妥当であろう。

S K 8では須恵器類の出土例がなく、形態の判別できるものではあかやき土器壺C (144) 両黒土器碗C (145)、あかやき土器長胴甕 (146)、製塙土器鉢 (147)がある。両黒の黒色土器碗は口縁～体部にかけての破片で、全形他の特徴等は明確でない。あかやき土器壺C や同甕の口縁部形態からみればS K50やS K670などとの近縁段階のものとできそうで、共伴の須恵器があるとすれば須恵器壺E の新相か同壺F類等と推測される。

以上の他、須恵器壺類等の供膳器が不明な組成をもつ一群についてはその説明を割愛したが、主としてあかやき土器壺Dを含まないS K 6・S G398・S D439、および須恵器甕 (149) や柱状の支脚 (150) からなるS K10、端正で背の低い輪高台を有する皿G (137) を出土したS D547、そして青海波紋の当痕が顕著で精製な須恵器鍋 (130)・甕 (129)などの諸相を示すS K 7等もこの組成段階に含めてよいと考えられる。

組成3 (S K 2・9・22・24・25・48、S D397)

ここで述べる遺構単位での土器群は、須恵器壺H・同壺I、あかやき土器壺C・D、および黒色土器壺B bなどの供膳器を中心に組成される内容と理解でき、これらに須恵器壺Gの一部や高台付壺Fなどの関連が考えられる様相と捉えられる。

S K 2では須恵器蓋B b (106)・同壺G (107)、あかやき土器壺C (110・111)・同あかやき土器壺D (108・109) 他が認められ、須恵器の供膳器に限れば組成2の仲間ともみえなくはない。しかし、底径の小さなあかやき土器壺Dや、多様な様相を呈するあかやき土器壺Cの類型からは積極的に組成2の仲間とはできかねる要素と認識される。

S K48では資料的に限られるが、須恵器壺I (102)、あかやき土器壺C (103・104)、黒色土器壺B b (105)の組成が知られ、あかやき土器壺Cの体部には本遺跡中では最も多い字種となる「千」の墨書きが認められる。また、黒色土器壺B bの内面には漆の皮膜が観察され、漆容器として使われた様子も窺い知れた。

S D397では須恵器高台付壺F (99)・同壺G (100)・同壺I (101)の完形品が一括で出土しており、少なくとも廃棄時点での同時性が確実な資料である。

S K 9・22では須恵器壺H (121・122)とあかやき土器壺C (122・126)・D (123)の組成がみられ、あかやき土器壺Cとした類型での厳密な細分の必要性が感じられた。

その他のS K24・25では須恵器壺類の組成が不明であるが、あかやき土器の壺は壺C (131・134)・壺D (133)であり、S K25のあかやき土器鍋 (135)の口縁部形態も組成1・2の例に較べて鋭角さを失い、総体に円みを見せ始める段階での特徴と指摘できる。

土器群の年代

以上で識別できた土器組成1～3のあり方はこれらの土器群が概ね9世紀代に帰属するものであることを示すと捉えられる。しかし、組成1では供膳器における種別器種の中で

も有蓋形態の須恵器高台付坏や同坏などの組成比が極めて高いこと、タイプ的に坏B・C・E類の一部がそこでの主体を占めるなどの内容と確認された。また、これらに伴って所謂あかやき土器の供膳形態が出現し、その原型があかやき土器坏B aや同坏B b類に求められるとの見通しが得られたなどの成果は特筆すべきことである。

これらの帰属年代を奈良時代末葉ないし平安時代初頭とすべきかの評価をここでは明確に成し得ないが、いずれにしろ煮炊形態ではない供膳形態器種坏の出現時期としての評価は動かないものと考えられる。

組成2では須恵器坏E類が供膳器の主体となる様子が確認され、これらに量的にはさほどでもないあかやき土器坏B bや同坏B aの糸切り版とも目される小型で底径の大きな坏C類（例えば94そして73）が伴う等状況が顕著であった。從来このような様相は手持ち・回転窓削り両調整を含めて「再調整を施す手法の顯現期が9世紀中葉段階以前」として認識されるところであり、本遺跡での状況もこの見解に矛盾しないと判断される。

従って、組成2の主たる年代は9世紀第2四半期と位置づけられるが、内容的にはSK3・26他で認めた「箆切りから糸切り手法への傾斜と転換」に伴う須恵器坏E類等の変遷、同様な視点での須恵器坏Fおよび坏G類等の多様なあり方等に特徴が求められる。こうした様相は9世紀中葉代に実現される画期としての土器生産体制の変質と対応する消費遺跡内での動向を物語るとして位置づけられる。

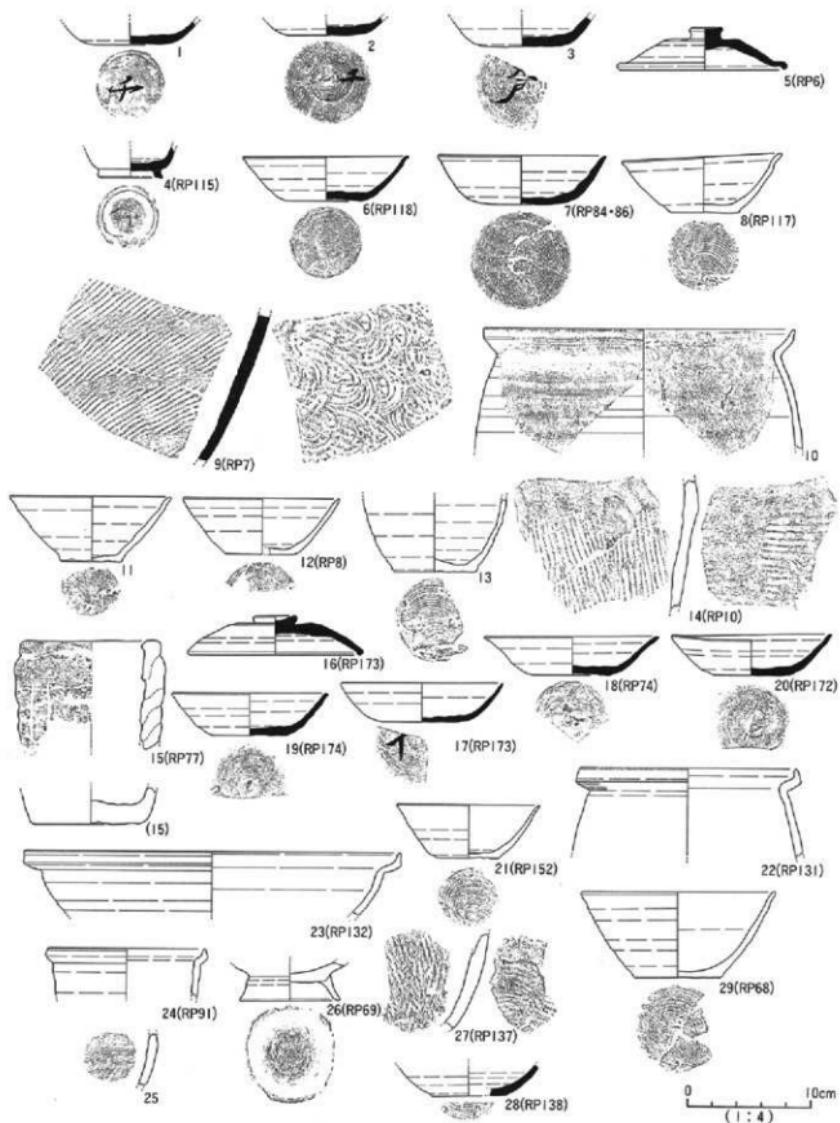
組成3はほぼ箆切り手法の払拭される9世紀第3四半期を中心として第4四半期にかかる頃までの間と想定でき、須恵器坏類の主体が坏G・坏H・坏Iに移行していると判断される。なお、この段階では既に集落としての機能が低下しており、所謂十和田aに比定される白色火山灰降下以前の段階で遺構の方は既に埋没していたと判断できる状況があった。

2) 土・石製品他（第23・26図）

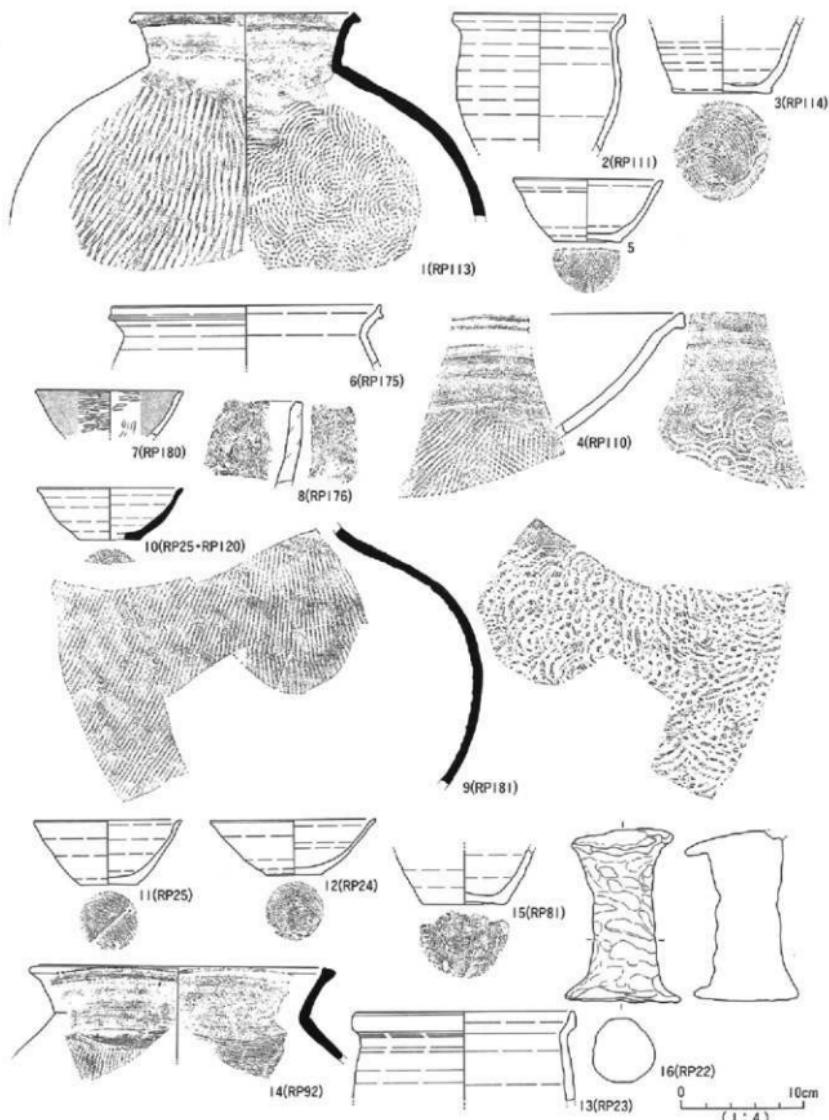
土鍤10点、砥石8点、縄文時代晩期のものと思われる石鏃1点と石匙1点、その他珠洲系陶器の壺・壺類の体部小破片1点がある。土鍤は大半が破損品で、廻棄されたものが構内などに紛れ込んだと推測される。手捏で作られ長さや太さ等に大小が認められた。

砥石は泥質で緻密な石材が用いられ、仕上砥として小刀類の刃研ぎに用いられたものだろう。用途の違いがある場合は使い込んだ結果なのか、ごく小さくなるまで使い込んだ形跡が認められる。しかし、何れも土鍤同様に廻棄されたものと捉えてよい出土状況があった。

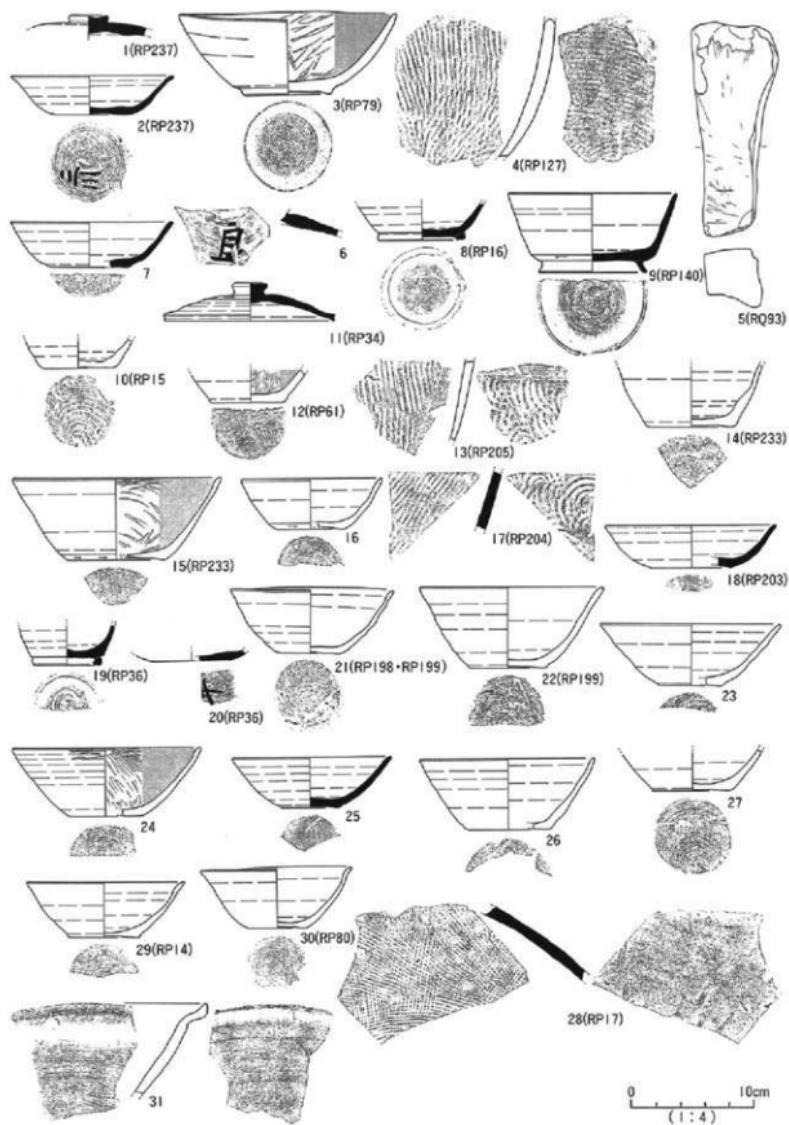
注目すべき遺物は石鏃である。近くに神矢田遺跡等があるため出土自体に不思議はないが、平安時代それも9世紀代に造られた遺構（SK19）内からの出土であった。流転等による摩滅は見られず、當時集落に暮らした人の手によって何らかの機会に持ち込まれ、後に廻棄されたと考えるのが自然であろう。「出羽国雷電十日余、田川郡五十里の間、多くの石鏃・石鉤等露出す（続日本後紀）西暦839」、「鮑海郡の海浜に石鏃多く降り（三代実録、西暦884）」等の記事が思い浮かぶ。集落の當まれた年代とも重なっている。一方、石匙は包含層からの出土で摩滅痕が全体に認められた。なお、木製品は曲物その他の容器類は皆無であり、遺存状態の悪い箸等若干に限られたことから割愛した。



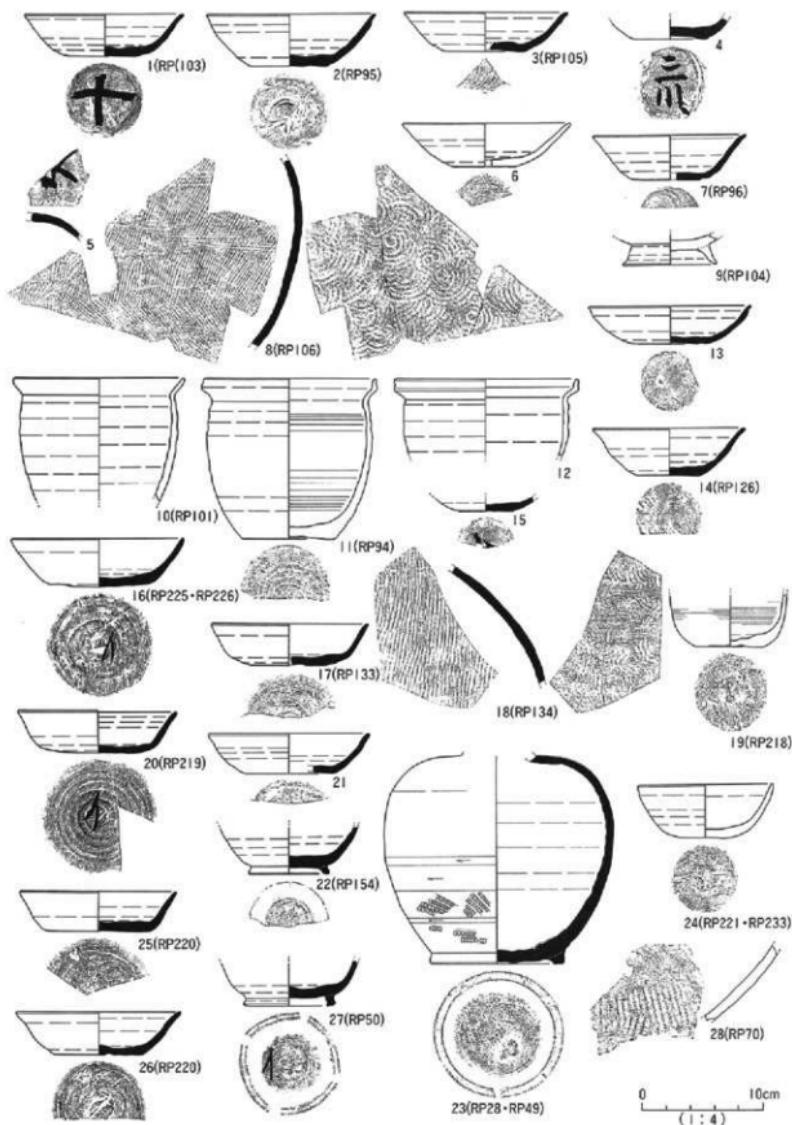
第15図 遺物実測図(1)



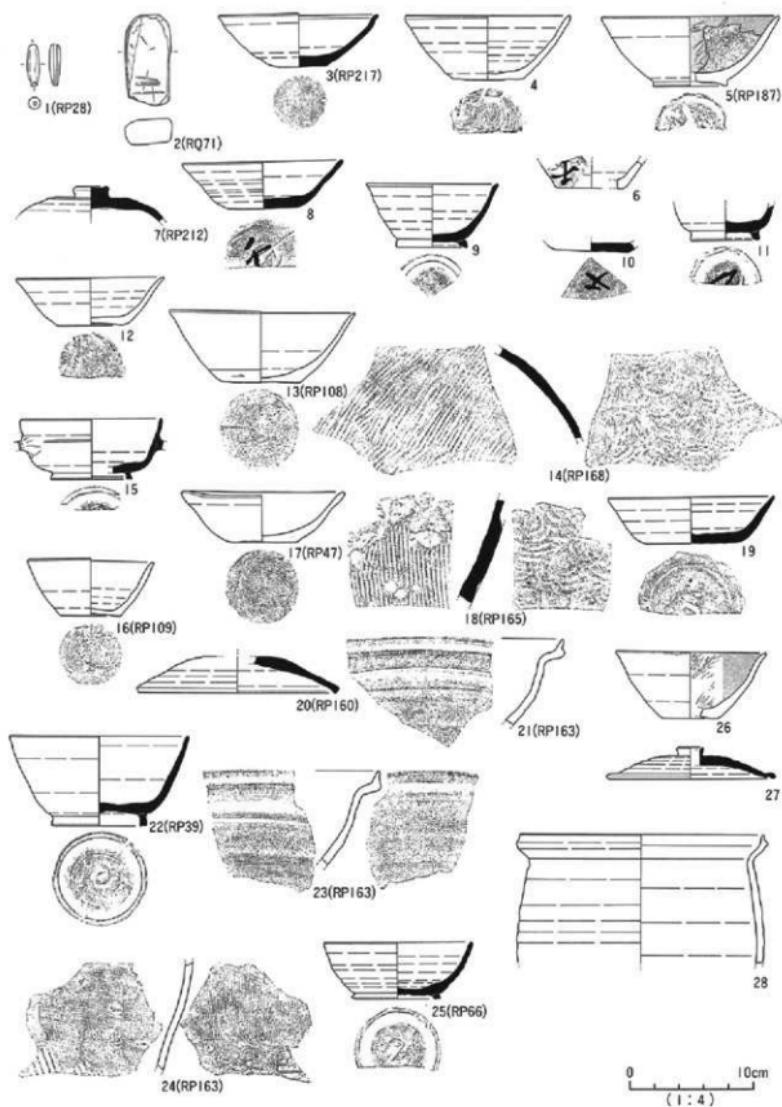
第16図 遺物実測図(2)



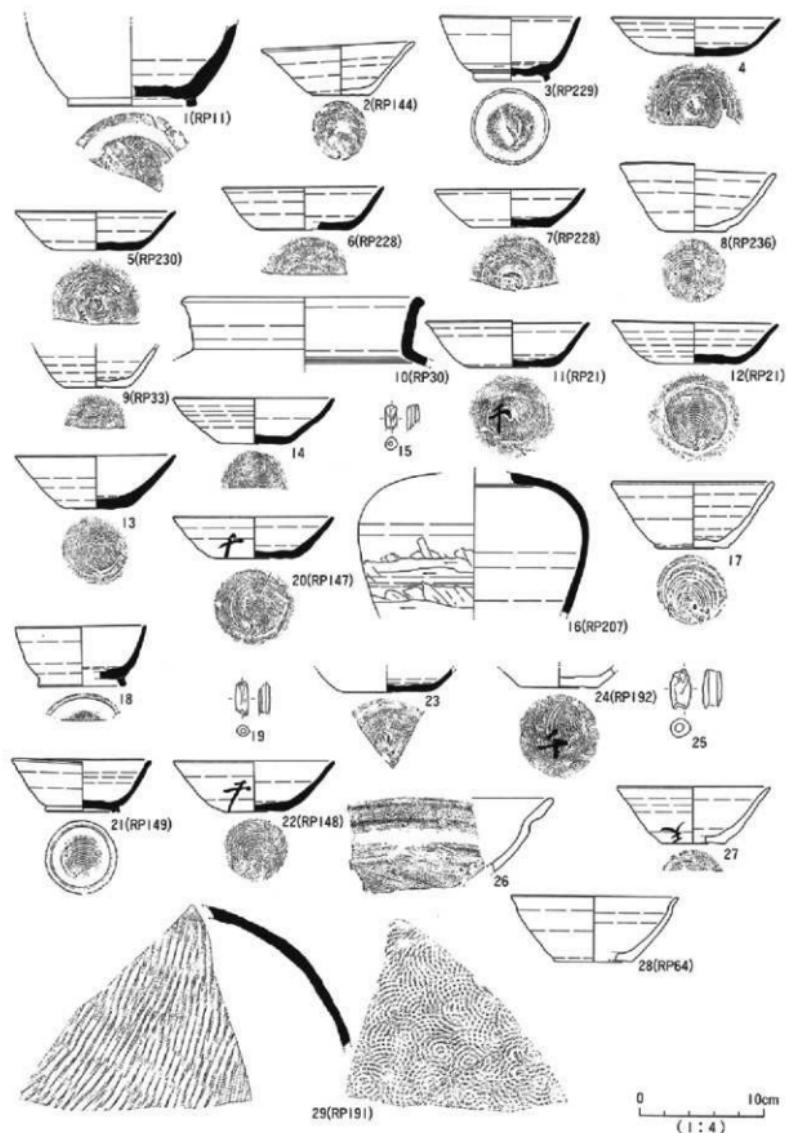
第17図 遺物実測図 (3)



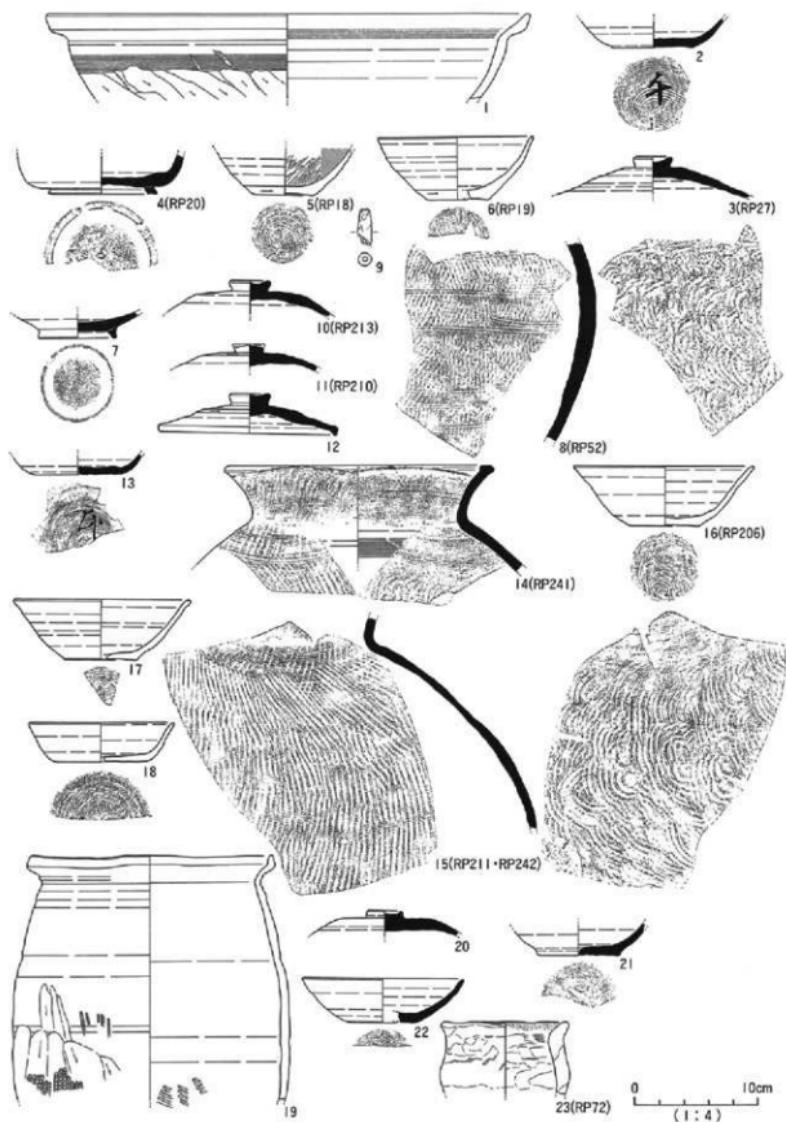
第18図 遺物実測図 (4)



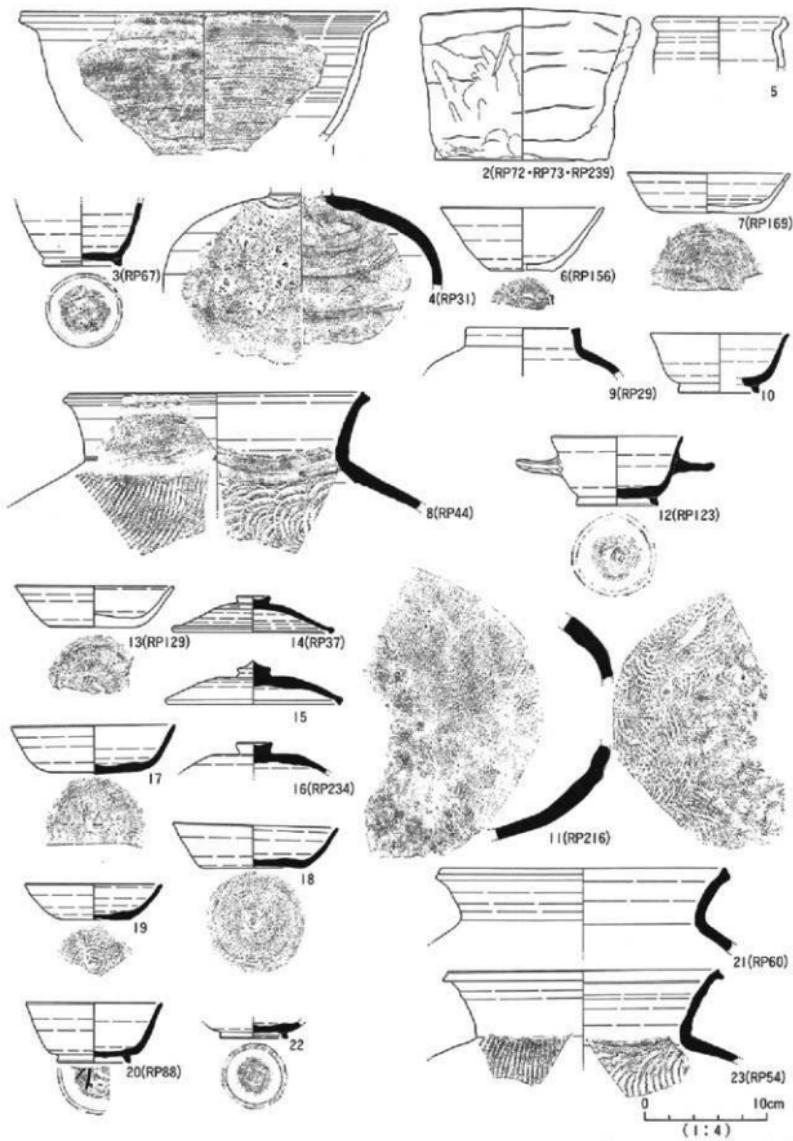
第19図 遺物実測図（5）



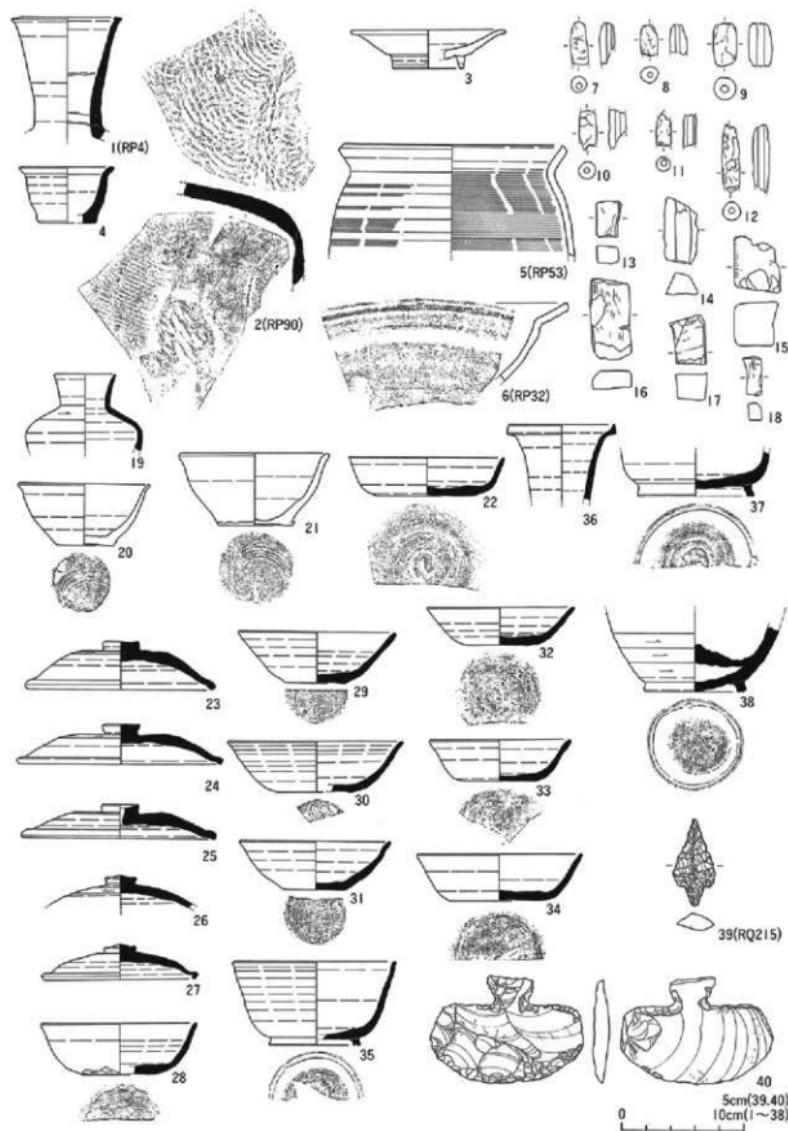
第20図 遺物実測図 (6)



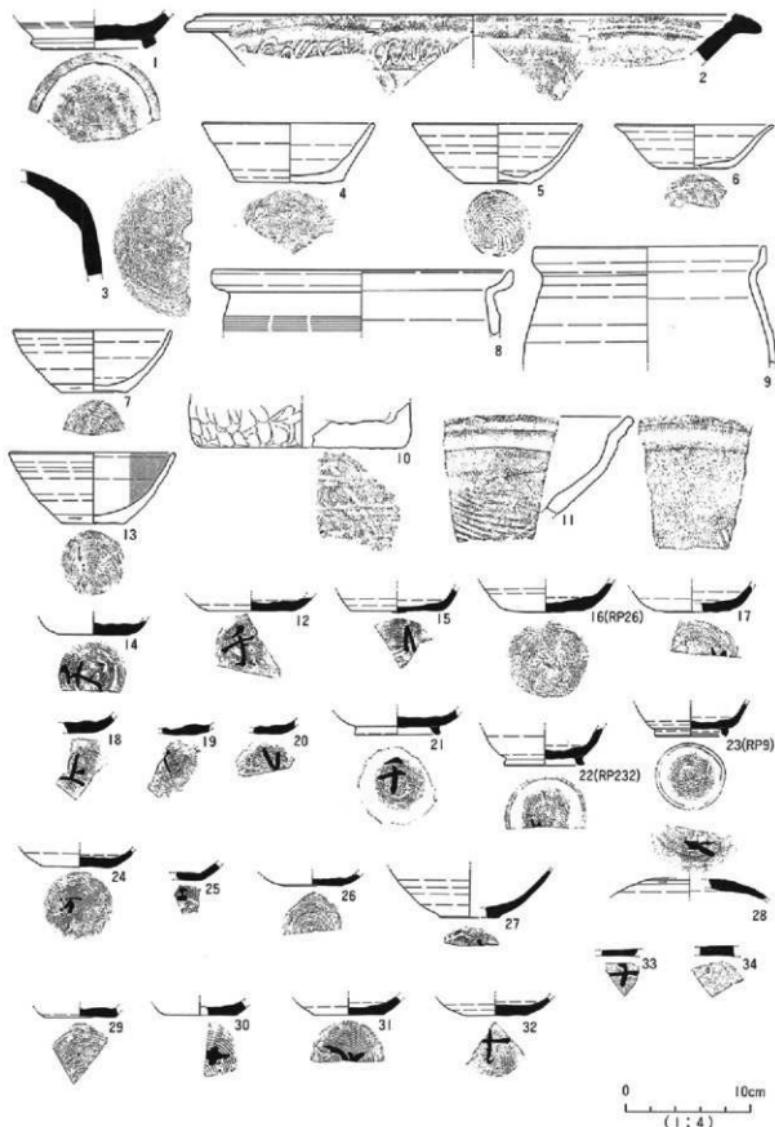
第21図 遺物実測図 (7)



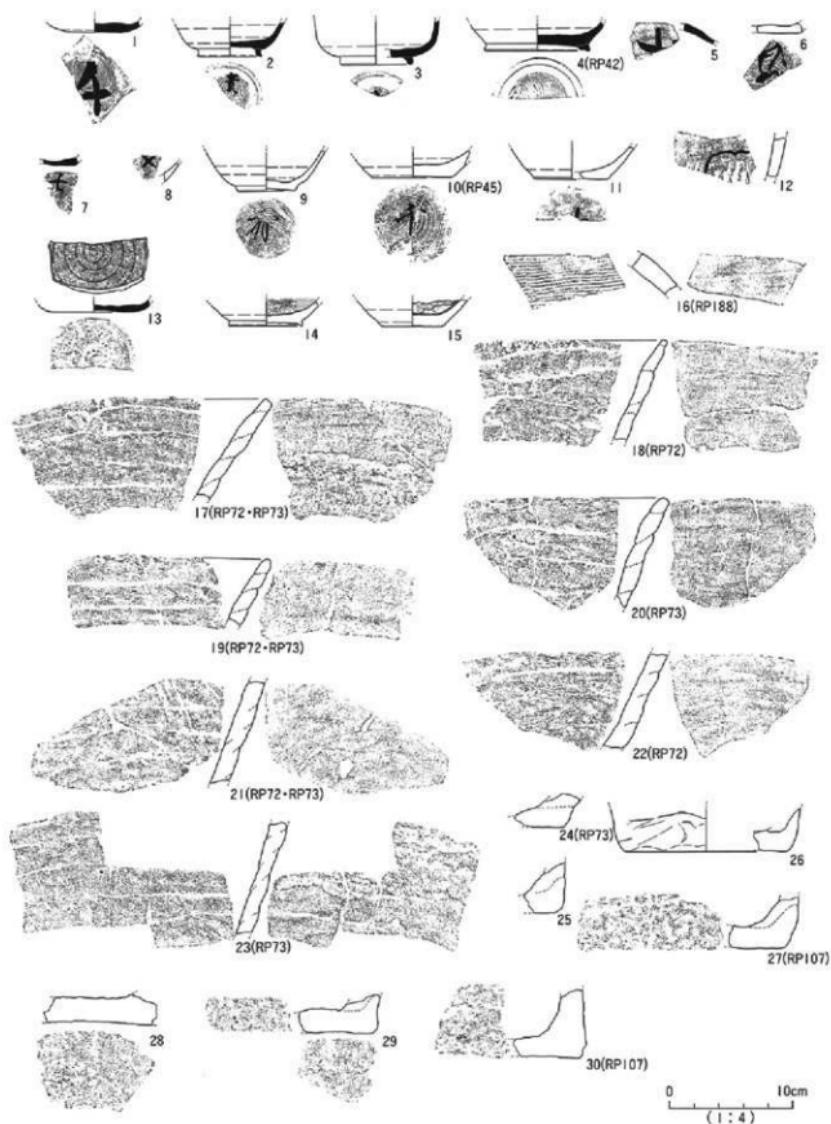
第22図 遺物実測図 (8)



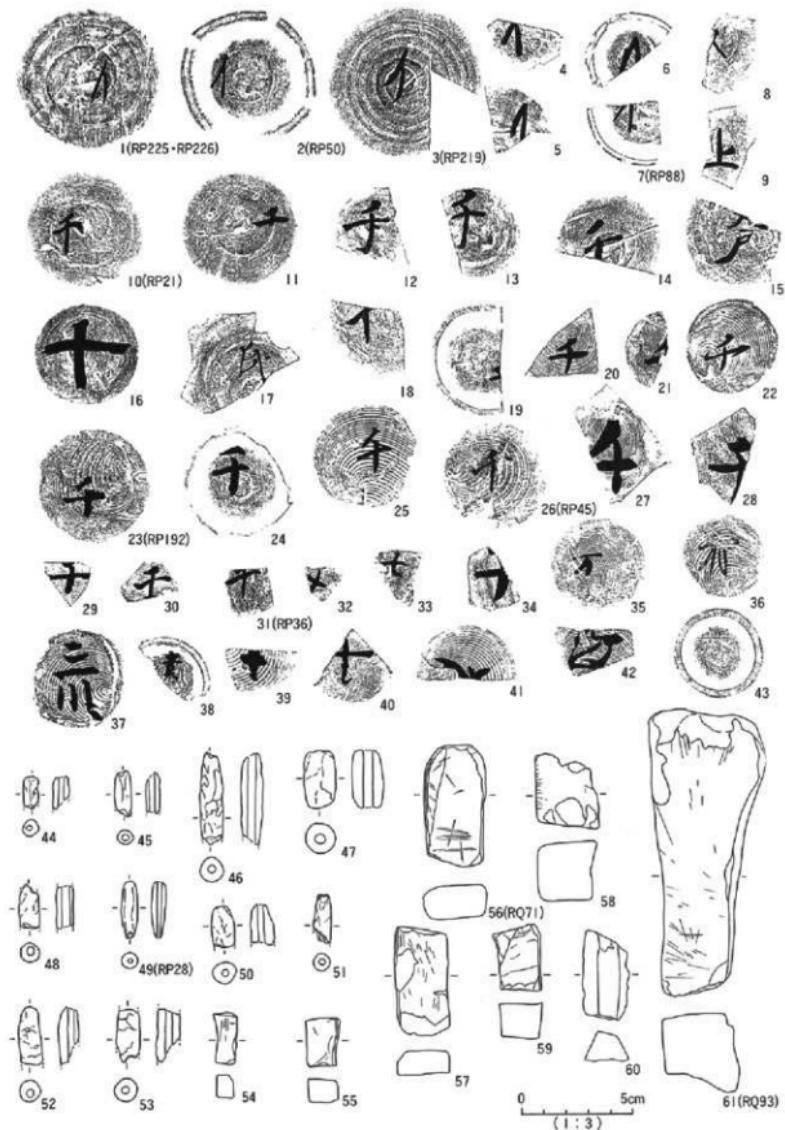
第23図 遺物実測図 (9)



第24図 遺物実測図 (10)



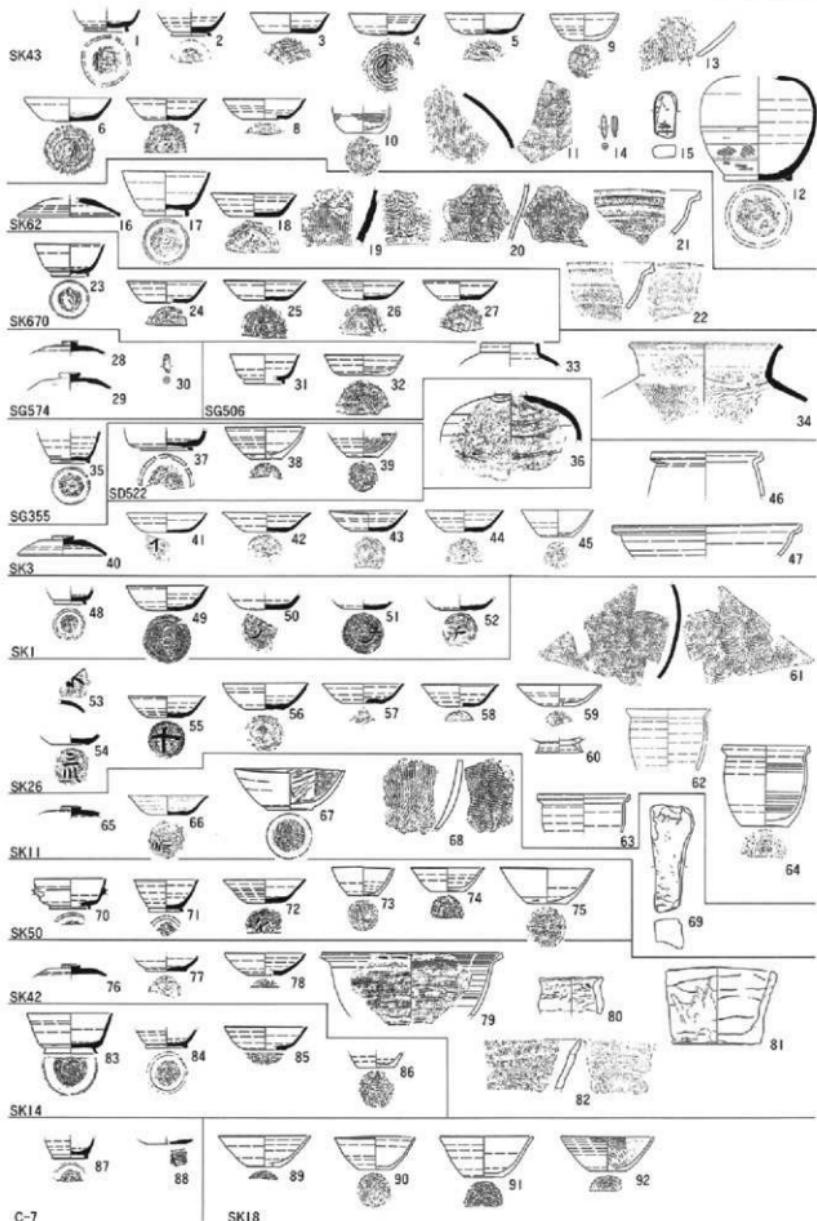
第25図 遺物実測図 (II)



第26図 遺物実測図 (12)

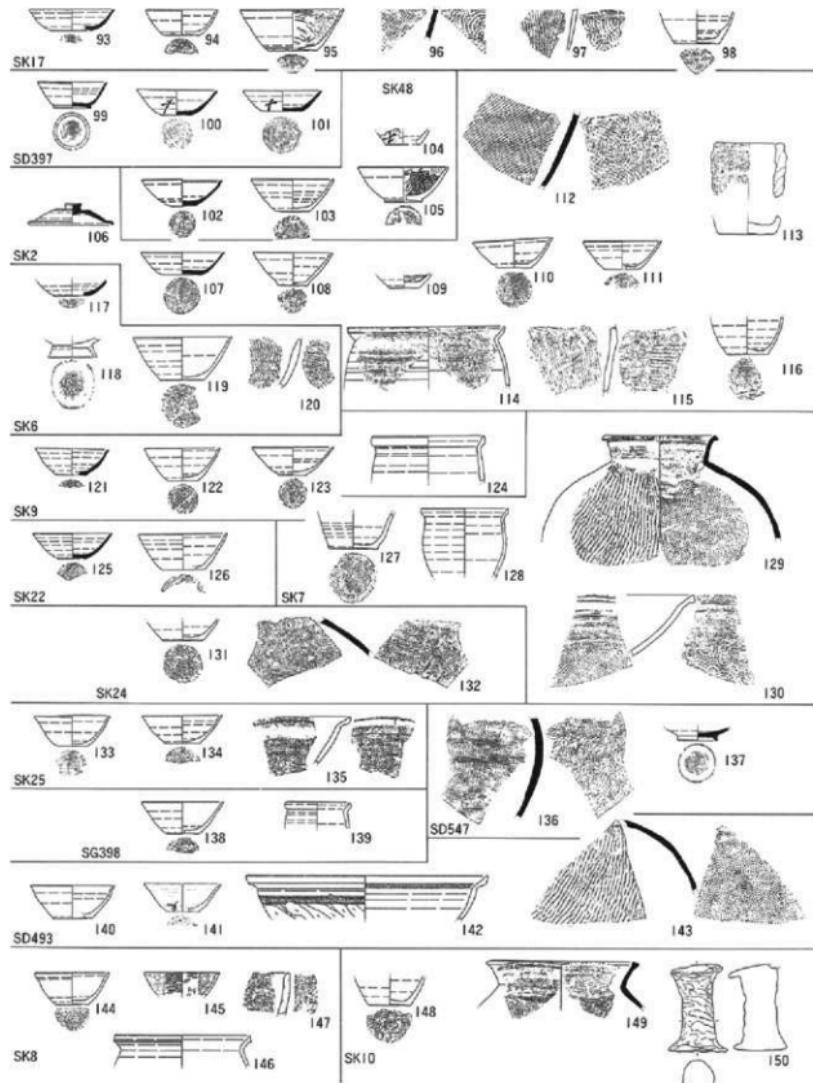


第27図 土器分類図



C-7

III 北目長田遺跡



土器組成図(1-2)出土遺物

1~15:SK43	16~22:SK62	23~27:SK670	28~30:SG574	31~34:SG506	35~36:SG355
37~39:SG522	40~47:SK3	48~52:SK1	53~64:SK26	65~69:SK11	70~75:SK50
76~82:SK42	83~86:SK14	87~92:SK18	93~98:SK17	99~101:SD397	102~105:SK48
106~116:SK2	117~120:SK6	121~124:SK9	125~126:SK22	127~130:SK7	131~132:SK24
133~135:SK25	136~137:SD547	138~139:SG398	140~143:SD493	144~147:SK8	148~150:SK10
87~88:C-7					

0
20cm
(1:8)
第29図 土器組成図 (2)

表一 遺物観察表(1)

番号	種別・器種	計測値(cm)			底部切離	調査段法		出土地点 登錄番号	備考		
		直径	底厚	側厚		内面	外面				
1	須恵器	57	19	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1F	墨衝「子」		
2		60	14	3.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1F	墨衝「子」		
3		74	(25)	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1F	墨衝「大戸」		
4		54	26	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1FIRP15			
5		134	32			ロクロ	ロクロ+ケズリ	SK1 RP6	内面灰被り		
6		136	58	36	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1FIRP18			
7		136	79		回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1-12P94-6	外面スス・火ハネ		
8	あかやき土器	130	56	49	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1FIRP12		
9	須恵器			10				SK1 RP7			
10	(28)	101			ロクロ	ロクロ	SK1F	外面スス			
11	132	52	54	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1F	外面スス			
12	あかやき土器	126	55	45	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1FIRP8	外画屋敷		
13			68	61	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1F	外画屋敷		
14			105			ハケヌ	タタキ+ケズリ	SK1FIRP10	外面スス		
15	腰塗土器		90	29	10			SK1FIRP77			
16	須恵器	144	32	4.5		ロクロ	ロクロ	SK1FIRP13	転用瓶		
17		154	70	32	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1FIRP13	墨衝「子」?	
18		(144)	60	32	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1FIRP74		
19		128	60	35	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1FIRP74			
20		131	63	34.5	3.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1FIRP74		
21		116	50	43	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1FIRP12			
22	あかやき土器	178	71	6		ロクロ	ロクロ	SK1FIRP13			
23	鉢	310	(51)			ロクロ	ロクロ	SK1FIRP12			
24	壺	132		4.5		ロクロ	ロクロ	SK1 RP4			
25	土製品	円盤		(49)	6			SK1F	外画屋敷		
26	あかやき土器	高台付坪	81		回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1 RP6			
27				11				SK1FIRP12			
28	須恵器	坪	60	(25)	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1FIRP13			
29	あかやき土器		160	72	70	5	回転糸切	ロクロ	SK1FIRP13		
1	須恵器	裏	180	(16)	10		ロクロ+アテ	SK1FIRP12			
2		鉢	144	(98)	5		ロクロ	SK1FIRP11	外面スス		
3		鉢	81	58	6	回転糸切	ロクロ	SK1FIRP14	内面スス・被熱		
4	あかやき土器	环	123	55	52	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1FIRP10		
5		壺	(220)	(52)			ロクロ	SK1FIRP15			
7	黒色土器	壺	121		3		ミガキ	SK1FIRP10	両黒		
8	製塙土器					ロクロ	ロクロ	SK1FIRP10			
9	須恵器	裏			8		アテ	SK1FIRP16	青海波文		
10	須恵器	120	50	43	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1FIRP6-3			
11		124	50	53	3	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1FIRP25	内面使用スレ	
12	あかやき土器	136	47	45	3.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1FIRP24		
13	須恵器	裏	180	(72)	7		ロクロ	SK1FIRP24			
14	須恵器	鉢	(245)	(74)	6	回転糸切	ロクロ+タタキ	SK1FIRP18			
15	あかやき土器	鉢	65	(44)	11		タタキ	SK1FIRP21			
16	土製品	支脚	長142	幅52		回転糸切?	ロクロ	ロクロ	SK1FIRP21		
17	須恵器	坪	(93)		16.5	7		SK1FIRP22	外面灰被り		
18	須恵器	坪	132	60	32	4	回転糸切	ロクロ	SK1FIRP22	墨衝「三川」	
19	黒色土器	高台付坪	178	72	67.5	7	回転糸切	ロクロ+ミガキ	SK1FIRP19	内黒	
20	あかやき土器	壺			11		アテ	SK1FIRP22			
5	石質品	礫石	長176	幅47				SK1FIRP40			
6					5	回転糸切?	ロクロ	ロクロ	SK1FIRP22	墨衝「良」?	
7	須恵器	环	132	70	37	回転糸切?	ロクロ	ロクロ	SK1F		
8		高台付坪	138	70	(29)	4	回転糸切	ロクロ	SK1FIRP26		
9			88	65	44	回転糸切?	ロクロ	ロクロ	SK1FIRP26		
10	あかやき土器	鉢	61	24		回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1FIRP25	外面スス	
11	須恵器	裏	140	31	5		ロクロ	ロクロ+ケズリ	SK1FIRP24		
12	黒色土器	壺	63	27	6	回転糸切	ロクロ+ミガキ	ロクロ	SK1FIRP21	内面灰被り	
13	須恵器	裏	70	5			ロクロ+タタキ	ロクロ+アテ	SK1FIRP23		
14	あかやき土器	鉢	72	(51)	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1FIRP23	外面スス	
15	黒色土器	坪	(172)	80	67	4	回転糸切?	ロクロ+ミガキ	SK1FIRP23	底部ヘラケズリ	
16	あかやき土器	坪	(116)	(46)	3.5	回転糸切?	ロクロ	ロクロ+ケズリ	SK1F		
17		裏			7		アテ	タタキ			
18	須恵器	140	64	35		回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1FIRP23		
19		坪	54	(32)		回転糸切?	ロクロ	ロクロ	C-7 RP3		
20					(75)	回転糸切?	ロクロ	ロクロ	C-7 RP3	墨衝「千」	
21			134	54	54	3.5	回転糸切	ロクロ	SK1FIRP19	内面灰被り	
22	あかやき土器	鉢	151	63	62	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1FIRP19	全体に墨	
23			148	52	51	4	回転糸切	ロクロ	SK1F		
24	黒色土器	155	60	56		回転糸切	ロクロ+ミガキ	ロクロ	SK1F		
25	須恵器	(131)	59	41		回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1F		
26	あかやき土器	154	(70)	58		回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1F		
27			64	32		回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1		
28	須恵器	裏			9		アテ	タタキ	SK1 RP17		
29		坪	130	59	45	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1 RP16		
30	あかやき土器	坪	126	59	50	4	回転糸切	ロクロ	SK1 RP16		
31	鉢		330	(74)	9		ロクロ	ロクロ+ケズリ	SK1F		
32	須恵器	坪	129	69	35	3.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1FIRP18	墨衝「十」
33			138	63	43	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK1FIRP15	墨衝「十」?

III 北目長田遺跡

表-2 遺物観察表(2)

遺物番号	種別・器種	計 頭数(個)	底盤・器高・断面	底盤切削	調査状況		出土地名 登録番号	備考	
					内面	外面			
3	須恵器		口径 直径 器高 断面	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK26F1P105		
4			135 68 32.5 5				SK26F1P105		
5			59 17 6	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK26F1P105	墨書き「三川」	
6	あかやき土器				ロクロ	ロクロ	SK26F1P105	墨書き「千」	
7	須恵器		138 52 35	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK26F1P105		
8			126 (50) 37 5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK26F1P106		
9					アテ	タタキ	SK26F1P106		
10	高台付环		78 (24)	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK26F1P104		
11	あかやき土器		140 (101)		ロクロ	ロクロ	SK26F1P101	外輪被熱	
12	鉢	140 75 131		回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK26F1P105		
13		148 (63) 4		回転糸切?	ロクロ	ロクロ	SK26F1	内輪裏ヌス	
14	須恵器		(134) 50 31 4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK27F1	重環乳頭	
15			(125) 54 49 4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK33 F1P26		
16			(46) (11)	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK33F	墨書き「不明」	
17	須恵器		140 90 40 4	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK33 F1P25	墨書き「イ」	
18			(128) 76 34 3.5	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK33F1P33		
19	須恵器				アテ	タタキ	SK33F1P34		
20			58 (43) 3.5	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ・カキメ	SK33 F1P28		
21	須恵器		75 34.5 4	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK33 F1P29	墨書き「イ」	
22	高台付环		(122) (70) 32	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK33F	ヘラ幅[]	
23			62 (39) 4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK33 F1P54		
24	あかやき土器		110 (72) 6	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK33 F1P79+8		
25	須恵器		112 56 44.5 4	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK26F1P21		
26		120 50 33 4		回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK26F1P20		
27	須恵器		(134) 73 35 4	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK26F1P20		
28	高台付环		74 (35) 4	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK26F1P20	墨書き「イ」	
	あかやき土器				アテ	タタキ・ケズリ	SK26F1P70		
1	土製品	土器	高34	幅11			SK26F1P28		
2	石製品	砾石	高73	幅40			SK26F1P21	砂岩	
3	須恵器		130 47 44 4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK40R27	内輪裏ヌス	
4	あかやき土器		(136) 59 53 4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK40F		
5	黒色土器	高台付环	145 61 58 5	回転糸切	ロクロ	ロクロ・ミガキ	SK40 F1P19	内輪裏付青	
6	あかやき土器	環	(55)	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK40F	黒術「子」	
7				32 5	ロクロ	ロクロ・ケズリ	SK40 F1P12	蛇用環	
8	須恵器		130 58 39 3.5	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK30F	墨書き「千」	
9	須恵器	高台付环	108 59 52 5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK30F	新面セビア色	
10		環	(62)	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK34F	墨書き「千」	
11	高台付环		55 (27)	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK34F	墨書き「千」?	
12	あかやき土器	環	126 52 39	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK34F		
13	あかやき土器	環	152 67 59 3	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK34F1P108	回転ヘラケズリ	
14	須恵器			8	アテ	タタキ	SK33F1P108		
15	須恵器	高台付环	(116) (66) 49 3		ロクロ	ロクロ	SK34F1P108		
16			104 5 47 4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK34F1P109	被熱・火候	
17	あかやき土器	環	134 69 42 4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK34 F1P17		
18		環	(86) 11		アテ	タタキ・カキメ	SK42F1P105	外輪自然輪	
19	須恵器	環	136 86 38 3.5	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK42F1	生蠣風	
20			160 (30)	回転ヘラ切?	ロクロ	ロクロ	SK42F1P109		
21	あかやき土器	環		6	ロクロ	ロクロ	SK42F1P103		
22	須恵器	高台付环	146 78 74.5	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK42F1P29	外輪ヌス	
23	あかやき土器	環		6	ロクロ	ロクロ	SK42F1P105	内輪裏ヌス	
24	須恵器	環		6	アテ・ハケメ	タタキ・ケズリ	SK42F1P103		
25	須恵器	高台付环	124 71 46	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK42 F1P106	被熱・外輪ヌス	
26	黒色土器	環	(122) (45) (55)		ロクロ	ロクロ・ミガキ	SK22F1		
27	須恵器	環	(138) 26 4		ロクロ	ロクロ	SK42F1		
28	あかやき土器	環	200 (20) (105)		ロクロ	ロクロ	SK36F1		
1	須恵器	壺		167 (57) 9		ロクロ	ロクロ・タタキ	SK34 F1P11	
2	あかやき土器	環	128 50 44	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK61 F1P144	重	
3		高台付环	114 57 54 4	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK61 F1P22		
4	須恵器		137 64 31	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK61F1		
5			132 66 32	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK61 F1P22		
6			133 73 35	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK61 F1P22		
7			122 66 31	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK61 F1P22		
8	あかやき土器	環	(127) 54 56 4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SP75	墨書き「重」	
9			54 (32) 9	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SP148 F1P33		
10		壺	185 (55) 9		ロクロ	ロクロ・タタキ	SP246 F1P10	外輪医被	
11			(136) 66 38	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SP22 F1P2	墨書き「千」	
12	須恵器	壺	135 70 35 3.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SP27 F1P2		
13			132 56 44	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SP28 F1		
14			132 52 37.5 3.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SP28 F1		
15	土製品	土瓶	長(20)	幅7.5			SP55F1		
16	須恵器	壺		(118) 5	ロクロ	ロクロ・ケズリ	SP26F1P105	回転ヘラケズリ	
17	あかやき土器	壺	132 58 55 4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD58F	重	
18	須恵器	高台付环	108 71 49.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD69F		
19	土製品	土瓶	長(28.5)	幅7			SD24F1		
20		壺	130 60 34.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD102 F1P147	墨書き「子」	
21		高台付环	115 60 43 3	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD102 F1P148		
22	須恵器		130 54 42 4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD102 F1P148		
23			66 (18)	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD41 F1	墨書き「子」?	
24	あかやき土器	壺	66 (16)	6	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD40 F1P102	墨書き「子」

表一三 遺物観察表(3)

遺物 番号	種別・器種	計 量	幅 口徑(直径) 高さ 器厚	底部切面	調査方法		出土地點 基盤番号	備考		
					内面	外面				
25	土製品	長33.5	幅16	6	ロクロ	ロクロ・ケズリ	SD4651			
26	陶	(124)	46.5	4 回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD4751			
27	あかやき土器	(138)	54	5 回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD4851	墨書き[天]		
28	漆器	10		アテ	ロクロ・タタキ	ロクロ	SD4951			
1	あかやき土器	(296)	(70)	8	ロクロ	ロクロ・ケズリ	SD5051	外腹スス		
2	环	64	(23.5)	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD5151	墨書き[干]		
3	漆器	(35)	4	ロクロ	ロクロ	SD5251	RP77			
4	高台付环	89	32	6 回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SD5351	RP78		
5	土器	52	39	4 回転糸切	ミガキ	ロクロ	SD5451	断面セピア		
6	あかやき土器	126	54	5 回転糸切	ロクロ・ナデ	ロクロ・ケズリ	SD5551	非内風		
7	漆器	65		5 回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD5651			
8	漆器	13		アテ	タタキ	タタキ	SD5751	RP52		
9	土製品	長29.5	幅10				SD5851			
10			(28)	5	ロクロ	ロクロ	SD5951			
11			(21)	5	ロクロ	ロクロ・ケズリ	SD6051	RP10		
21	漆器	144	33	6	ロクロ	ロクロ・ケズリ	SD6151			
13	环	72	(14)	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SD6251	墨書き[氏]?		
14		216	176	(81)	7.5	ロクロ・アテ	SD6351			
15			(102)	6	アテ	ロクロ・タタキ	SD6451			
16		148	57	49	4 回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD6551		
17	あかやき土器	146	(60)	49.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD6651		
18		120	75	33	4 回転糸切?	ロクロ	ロクロ	SD6751		
19	漆器	198	(196)	8	ロクロ・アテ	タタキ・ケズリ	SD6851	内腹スス		
20			(9.5)		ロクロ	ロクロ	SD6951			
21	須恵器	65	25	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SD7051			
22		130	53	35	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD7151		
23	漆塗土器	104	(59)	12			SD7251			
1	あかやき土器	309	101		ロクロ	ロクロ・ケズリ	SD7351	外腹スス		
2	製塗土器	180	143	125	11		SD7451	被熟		
3	漆器	64	50.5	4 回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SD7551	付高台		
4	須恵器		(77)	8	ロクロ	ロクロ	SD7651	破被り		
5		105	(42)		ロクロ	ロクロ	SD7751	外腹スス		
6	あかやき土器	133	54	52	回転糸切	ロクロ	SD7851			
7		132	80	33	5 回転ヘラ切	ロクロ	SD7951			
8	漆器	240	217	(90)	ロクロ	ロクロ	SD8051			
9	漆器	92		6.5	ロクロ	ロクロ	SD8151			
10	須恵器	高台付环	(112)	(65)	49	3.5 回転ヘラ切?	ロクロ	ロクロ	SD8251	外腹灰被
11						アテ	SD8351	外腹灰被		
12		椎			12		SD8451			
13	あかやき土器	108	66	57	2.5 回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SD8551		
14		128	66	34	5 回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SD8651		
15		136		39	ロクロ	ロクロ	SD8751			
16		142		36	4.5 回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	D-1 RP51	重焼痕	
17			(27)	3.5 回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	E-2H			
18		133	80	38	4 回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	B-6		
19		138	84	38	3 回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	D-II~III	外腹スス	
20	須恵器	112	60	29	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	D-4 RP88	墨書き[イ]?	
21		132	60	49	4 回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	D-4 RP90		
22		242	(68)	8	ロクロ	ロクロ	D-6 RP90			
23		高台付环	56	(14)	4.5 回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	D-6 RP90	ヘラ番[大]	
1		220	(75)	6	ロクロ・アテ	ロクロ・タタキ	C-6 RP54	外腹灰被		
2		78			ロクロ	ロクロ	B-2 RP4	外腹灰被		
3				11	アテ	ロクロ・タタキ	E-5 RP90	外腹灰被		
4	あかやき土器	127	58	32	4.5 回転糸切?	ロクロ	ロクロ	C-3H~III		
5	須恵器	77	(148)	46		ロクロ	D-3H~III			
6	あかやき土器	180		6	ロクロ	ロクロ・カキメ	D-7 RP53			
7		410		7	ロクロ	ロクロ	D-6 RP92			
8		長(35)	幅13				B-2H~III			
9		長(25)	幅14				B-3H~III			
10		長(35)	幅19				C-3H~III			
11		長(33)	幅13				B-6H~III			
12		長(26)	幅11				C-3H~III			
13		長(57)	幅13				C-3H~III			
14		長(29)	幅15				B-6H~III			
15		長(55)	幅28				C-3H~III			
16		長(46.5)	幅36				C-3H~III			
17		長(66.5)	幅32				E-5			
18		長(41)	幅25				D-5H			
19	須恵器	長31.5	幅11				E-3H~III			
20	あかやき土器	50	(64)		ロクロ	ロクロ・ケズリ	X0			
21		109	47	50.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	X0		
22		122	60	59.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	X0		
23		128	82	32	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	X0	重焼痕	
24		156	39	7	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ・ケズリ	C-5H~III		
25	須恵器	166	32		回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ・ケズリ	C-5H~III		
26		162	28	6	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ・ケズリ	C-5H~III		
27		129	29	5	回転ヘラ切?	ロクロ	ロクロ	C-5H~III		
							E-7H~III			

表-4 遺物観察表(4)

器種番号	種別・器種	計測値(cm)				底面切痕	調査方法		出土地点登録番号	備考
		口径	底径	高さ	厚さ		内面	外面		
28	須恵器	130	60	42	4	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ・ケズリ	D-III~III	手持てヘラケズリ
29		130	50	42	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	E-III~III	
30		142 (50)	42	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	C-III~III		
31		123	48	50	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	B-III~III	
32		122	68	31	4	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	C-III~III	
33		115	64	34	5	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	D-III~III	
34		136	80	38	4	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	C-III~III	牛焼状
35		132	74	68	4	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	D-III~III	
36		85			4	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	C-III~III	
37			96 (34)	5	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	C-III~III		
38			81 (53)	9	回転糸切?	ロクロ	ロクロ・ケズリ	B-III~III	鉄分吹出	
39	石製品	高35	幅17			ロクロ	ロクロ・ケズリ	SX1980E15		
40	石製品	高43	幅61			ロクロ	ロクロ・ケズリ			
1	須恵器	90	(27)	8		ロクロ	ロクロ・カキメ	D-III~III	内面区地	
2		428	380	12		ロクロ	ロクロ・カキメ	C-III~III	波状沈線	
3				14		ロクロ	ロクロ	B-III~III		
4		143	87	49	6	回転ヘラ切?	ロクロ	ロクロ	C-III~III	
5		140	54	49	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	D-III~III	
6		128 (54)	46	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	E-III~III		
7		132	55	51	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	C-III~III	
8		244	(51)	9		ロクロ	ロクロ・カキメ	B-III~III		
9		186	(95)	6		ロクロ	ロクロ	C-III~III		
10	コンロ用土器		166 (36)			指彫形	指彫形	C-III~III		
11	あかやき土器	鶴		9		ロクロ・タタキ	タタキ・ケズリ	C-III~III	外画スヌ 墨書き子?	
12	須恵器	58		回転ヘラ切		ロクロ	ロクロ	C-III~III	外画スヌ 墨書き子?	
13		136	52	58.5	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	D-III~III	
14			60		回転ヘラ切		ロクロ	B-III~III	墨書き「千」	
15			75		回転糸切		XO	墨書き「イ?」		
16		65 (23)	4.5	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	C-SRP26	墨書き不明		
17		61		回転ヘラ切		ロクロ	SG1981	墨書き不明		
18				回転ヘラ切		ロクロ	C-III~III	墨書き「上」		
19				回転糸切		ロクロ	E-III~III	墨書き「子?」		
20				回転糸切		ロクロ	SX667F2+3	墨書き「イ?」		
21		70 (20)	6	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	D-III			
22	須恵器	65 (30)	6	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	D-SRP22	墨書き不明		
23		58 (27)	3.5	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	C-SP9			
24			56		回転糸切		E-5II~III	墨書き「万」		
25				回転糸切		ロクロ	D-III~III	墨書き不明		
26		48 (9)		回転糸切		ロクロ	E-4II~III	墨書き不明		
27		(48)		回転糸切		ロクロ	E-6II~III	墨書き「千?」		
28			5	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ・ケズリ	SX667F2	墨書き「千?」		
29		58	8	回転糸切	ロクロ	ロクロ	E-6II~III	墨書き不明		
30		(68)		回転糸切		ロクロ	C-5II~III	墨書き不明		
31		57		回転糸切		ロクロ	C-6II~III	軋用鏡		
32		49		回転糸切		ロクロ	E-6II~III	墨書き「千?」		
33				回転糸切		ロクロ	SX667F2+3	墨書き「千?」		
34				回転糸切		ロクロ	B-6II~III	墨書き不明		
1	須恵器	46		回転糸切		ロクロ	SK49F1	墨書き「千」		
2		50 (28)	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	D-4II~III	墨書き「貞」		
3		(58) (35)	4	回転糸切?	ロクロ	ロクロ	SK49F1	墨書き不明		
4		86 (23)	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SX1980P2	墨書き「千」		
5			4	ロクロ	ロクロ	ロクロ	SD50F1	墨書き不明		
6				回転糸切		ロクロ	C-3II~III	墨書き「子?」		
7				回転ヘラ切		ロクロ	E-7II~III	墨書き「七?」		
8				回転ヘラ切		ロクロ	SX667F2+3	墨書き「子?」		
9	あかやき土器	50 (33)	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	B-1II~III	墨書き不明		
10	鈎	65	22	9	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD29F1 RP5	墨書き「千」	
11	环	(61) (27)	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK67W1	墨書き不明		
12	壺		9		アテ	タタキ	SD50F1	鍔?		
13	須恵器	79 (11)	4	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SD48F2	軋用鏡		
14	黒色土器	60 (21)	4	回転糸切?	ミガキ	ロクロ	D-6II~III	内面研付鏡		
15	あかやき土器	50 (22)	5	回転糸切	ミガキ	ロクロ	SK2F1	内面研付鏡		
16	堆溝手四縁	15			タタキ	アテ	SG47 RP18			
17			13		指ナデ	指ナデ	SG47 RP72+23	輪横・指鑿形		
18			11		指ナデ	指ナデ	SG47 RP72	輪横・指鑿形		
19			11		指ナデ	指ナデ	SG47 RP72+23	輪横・指鑿形		
20			14		指ナデ	指ナデ	SG47 RP73	輪横・指鑿形		
21			14		指ナデ	指ナデ	SG47 RP72+23	輪横・指鑿形		
22			14		指ナデ	指ナデ	SG47 RP72	輪横・指鑿形		
23			12		指ナデ	指ナデ	SG47 RP73	輪横・指鑿形		
24	製塙土器		14		指ナデ	指ナデ	SG47 RP73	輪横・指鑿形		
25			(41)		指ナデ	指ナデ	SG47	輪横・指鑿形		
26		(135) (36)			指ナデ	指ナデ	SX50F1	輪横・指鑿形		
27		(286) (40)			指ナデ	指ナデ	SX50F1 RP107	輪横・指鑿形		
28			19		指ナデ	指ナデ	SX50F1	輪横・指鑿形		
29			(31)		指ナデ	指ナデ	SX50F1	輪横・指鑿形		
30			(58)		指ナデ	指ナデ	SX50F1 RP107	輪横・指鑿形		

6 まとめ

調査では建物跡・歯状溝跡群で構成される畑跡・土壤群・区画等の性格が推定される溝跡・建物を構成する柱穴他が検出された。主体となる歯跡群は、調査区を東西に二分する溝跡SG506を境として、北に主体的な一群、南に二ないし三群と見られるまとまりが外観的には認められ、これら相互の切り合いから3ないし4時期に亘る変遷を遂げたことが窺えた。また、歯跡に重複する建物跡や土壤群の関係は、はじて建物跡が先行し主要な土壤の一部が歯跡群に切られたり、あるいは歯跡を切るなどの関係と捉えられる。すなわち家屋から畠地へと総合的に調査地区的機能や役割が推移したと推測できる。なお、建物跡の確認と検出は困難を極め、歯跡の掘り下げ等によりかろうじて柱穴や柱根に遭遇するなどの検出状況であったことを付記しておく。

建物跡は柱穴や柱根等の検出地点のまとまりと集中部分のあり方から、結果的に歯跡群の単位に対応すると捉えられ、耕作単位としての区画と密接な関わりを持って存在した様子が看取される。一方、歯状溝跡群で構成される畠跡は、その走行方位等の企画や相互の切合い等重複関係から、真北方位をとる一群が古く、やや東に振れる一群がより新しいと窺えた。重複関係から得られる歯跡群の変遷は、少なくとも3時期、部分的には4時期に亘ると検証される。

遺物では、その主体を占める土器群が9世紀の前葉～中葉代に中心を置くと判断でき、組成的に大略1～3の3段階に区分できるまとまりと捉えられた。集落の継続と同時に変遷を遂げたと考えられるこれら土器群の組成は、当然のことながら漸移的と観察される。

そこでは主として9世紀前葉から中葉段階にかけての微妙な土器群の動向が各遺構単位に反映した結果と受けとめられる。また、詳しく触れる余裕はないが、まとまりをもった製塩土器の一群が3地点から多量に出土しており、焼土や木灰の炭化物等をも伴っていた。集落内部において製塩活動を行った様子を示すものと考えられる。本遺跡の標高が5m内外であることからみれば、当時の湖濱がすぐ近傍にまで迫っていた可能性が考えられる。

最後に本遺跡の調査によって検出された資料の理科学的分析結果（分析はパリノ・サヴェイ株式会社に委託して行ったものである。）について列記しておく。

分析は樹種同定10点、C14年代測定3点、火山灰分析5点、骨同定の4項目であった。樹種同定を行った10点の資料は柱根や板材であったが、これらはスギ（SD616, SK50, SD289）、クリ（SD492, SP614, SP171, SKS6）、ケヤキ（SK36S, SD592）、ヤマグワ（SD577）の4種に同定された。火山灰分析では、分析資料5点（SP615, SP624, SK16F1, SK670, SK16F）共に10世紀初頭に降下したとされる十和田a起源との結果であり、本質物質でない混入物の存在から一次的降灰そのものではなく、異質な碎屑物との混在化進行や遺構周囲からの流れ込みが考えられる二次堆積と推定された。年代測定ではSK36のケヤキが 670 ± 120 BP、SP614のクリ板材が 960 ± 80 BP、SD289のスギ柱根が 1260 ± 690 との測定結果である。また、SP211内の堆積土中から採取された骨は細片化した成人の火葬人骨で、上腕骨近位骨端の骨頭破片などがかろうじてかたちを保っていたと分析される。

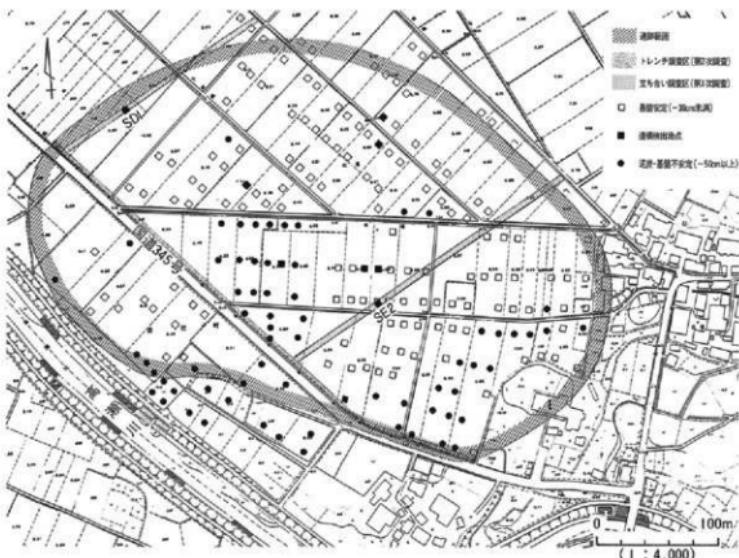
IV 橋待遺跡

1 遺跡の概要

本遺跡は平成3年度に県教委が実施した分布調査によって新たに発見されたもので北東には堂田遺跡、北西には北目長田遺跡などをはじめとする同時代の集落遺跡が數多く隣接して立地している。以下に本次調査に至るまでの経過を略記しておく。平成3年度に表面踏査による遺跡の発見、平成4年度に遺跡全城を対象とする試掘調査の実施、平成5年度に「ほ場整備事業（高瀬地区）」に伴う一部の用水路付設部分を対象とした立会調査の実施（以上県教委主体）、平成6年度に本次の排水路部分を中心とした緊急発掘調査（その他の面部分については現状保存が計られる）が行われた。試掘等の調査を除けば都合2次に亘る調査が実施されたこととなる。この2次の調査はいずれも遺跡域を東西・南北方向に縦・横断する幅2m、長さは遺跡域に係る總工事延長を各対象とするトレンチ調査で、言わば線的な調査であった。従って、遺跡の面的拡がりや遺構の具体的な内容は不明確で、遺跡の性格他の詳細はよく解っていないのが実際のところである。

2 遺構と遺物の分布

これまでの調査で確認された遺構は試掘調査時点での土壌数基と溝跡や柱穴、および第1次調査時に検出された井戸跡（S E 2）とやや規模の大きな溝跡（S D 1）など若干に限られる。また、これらの分布状況を平成4年度に行った試掘調査の結果に照らすと、現

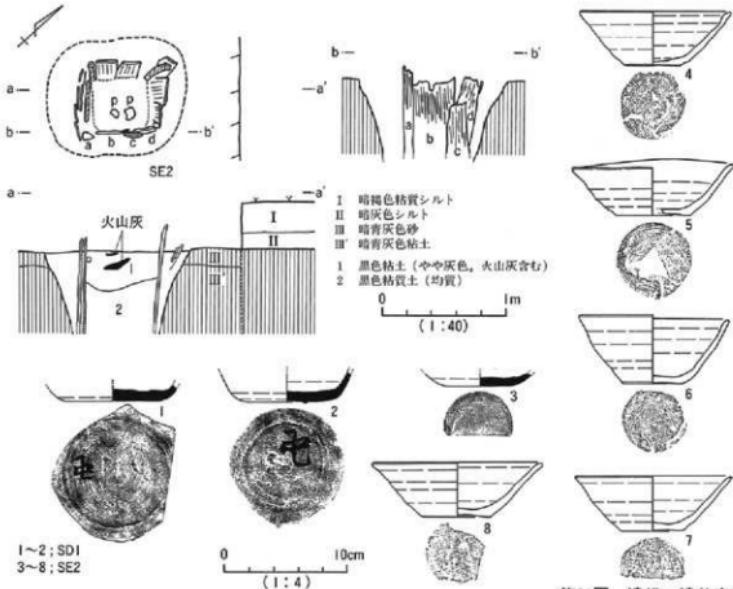


第30図 橋待遺跡調査概要図

地表面から約30cm未満のいわゆる地山層に達する深度的に浅い地点(微高地部分)、加えて若干ながらも柱跡や土壙などの構造が検出された地点や地域と重なっていることが理解でき、東西460m・南北280mとされる広範な遺跡の広がりの中にも、建物や土壙あるいは井戸跡といった構造群の集中する幾つかのブロックが存在すると推測できる。これまで得られた僅かな情報を手掛かりとすれば、4,000~5,000平方mの範囲にまとまる4ないし5箇所程の地点を指摘することが可能であろう。なお、本第2次調査による国道345号線に沿うトレンチでは殆ど構造は見られなかった。分布調査等の情報では泥炭層や地山まで50cm以上の深さがある河川や窪地などに当該トレンチの当たったためと考えられる。また、遺物も僅かに国道が北目の集落に入るカーブ付近で、平安時代の土器類若干を得ただけであった。以下に第1次調査時のSE2井戸跡と出土遺物を中心として概略を記しておく。

3 検出された構造と遺物

SE2は遺跡範囲の中央部やや東寄りで検出された。堀り方は隅丸方形で、径120cm、深さ60cm以上の規模を測る。構造は隅柱・横棟・縦(矢)板で、幅広の縦板が各辺に3ないし4枚、一部二重に配されていた。覆土は大別2層で、1層の中程から上位にかけて10世紀前葉(西暦915)に降灰したと考えられる火山灰(十和田a)のレンズ状堆積が認められた。遺物はこの火山灰層より下位にまとまっており、やや歪のあるあかやき土器壊類主体である(4~8)。なお、1・2はSD1溝跡から出土した墨書「屯」あるヘラ切りの須恵器壊で、3は4~8に紛れこんだ回転糸切りの須恵器壊の底部破片である。



第31図 遺構・遺物実測図

V 堂田遺跡

1. 調査の概要

遺跡は東西145m、南北340mの49,300m²である。調査は保存協議の結果、遺跡内で現状保存が困難な南東部分（南東調査区）の3,300m²と、遺跡西端部（西端調査区）の500m²を対象とした。調査区は、遺跡の北側を走る町道北目樽川線と平行に、南北方向に110m、東西方向に30mの長方形の南東調査区を、その調査区の西側75mのところに幅2m、長さ250mの西端調査区をそれぞれ設定した。両調査区とも主軸は磁北から西へ30度傾いており、南東調査区には5m四方のグリッドを設定した。西端調査区は遺跡の西端部に位置するため表土を剥いで面整理を行い遺構の有無を確認した結果、あかやき土器・須恵器・近世陶器の破片や細片が出土し、近世と思われる畦畔の一部が確認できたのみで、古代や中世の遺構は確認できなかった。したがって本章で扱う遺構・遺物も南東調査区のものである。

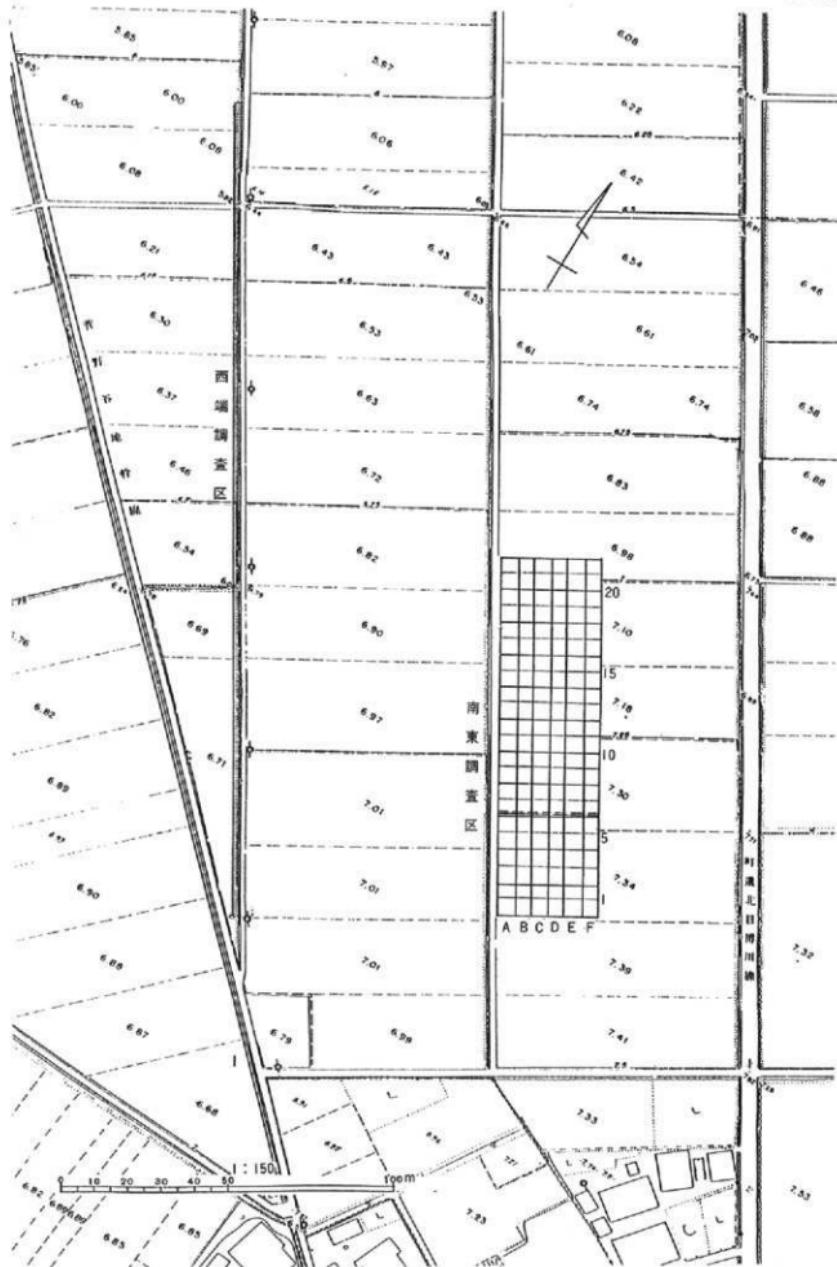
2 遺跡の層序

基本層序を大きく3層に分け、堆積の新しい順にI層（耕作土）、II層（遺物包含層）、III層（地山）とした。

I層は遺跡全体を覆っており現耕作土であるIa層（褐色シルト）と、旧耕作土のIb層（灰褐色シルト）に細分し、調査区西側のA-2グリッドセクションから北ではさらにIc層が認められた。このIc層は調査区南端のA1～F1グリッドセクションでは認められなかった。Ib層とIc層の間に搅乱層が存在し（A1～A2グリッドセクション）、Ic層の上にIa・Ib層が堆積するまでには相当の時期差が考えられる。このことからするとIc層（褐色シルト）は耕作土のひとつというよりは、基本層序として独立した性格をもった層位であるといふことが言えるのかもしれない。

II層（黒褐色シルト）が安定して分布しているのは調査区の南西部であり、東西セクションではF1のグリッドから西側で確認され、南北セクションのA1グリッド付近では搅乱層によって削られているが、A2グリッドからA10グリッドにかけて認められる。ただし、安定して認められるのはA5付近まで、A11から北ではところどころにレンズ状に分布する程度で、調査区の北になるにしたがってほどんど認めることができなくなり、逆にIc層が厚みを増すところもある。遺物はII層が分布するところではII層の下部に包含されていたが、調査区の東側などII層が分布しなかったところではIII層の上面から出土した。このため遺物の取り上げ層位はII・III層として取り上げた。

III層（黄褐色粘土-青灰色粘土）は地山で、下部ではグライ化しているところが認められるところもあった。また、調査区の北側や東側の一部では砂の分布も認められた。III層確認面はC～F・2～7グリッド付近が高く、それよりも西や北のグリッドは低いことが確認できた。このことは旧地形によると思われ、地形図でもその様子がうかがわれる。



第32図 調査概要図

3 遺構と遺物の分布

今回の発掘調査で確認された遺構は大きく二時期に分けることができる。一期は堂田遺跡の主体をなす平安時代の掘立柱建物跡や土坑・ピットなどの遺構である。二期めは近世と思われる遺構で、水田の畦畔である。遺物も平安時代の遺物がもっと多く、近世の陶磁器の破片やキセル・馬の蹄鉄などが発掘された。そのほか遺構は確認できなかったが、中世の青磁の破片や古鏡、繩文時代の石鏃なども僅かながら発掘された。鳥形須恵器の出土グリッドは、A-1・A-3・A-4・B-1・B-2・B-4・B-5・D-13・D-14というように、広い範囲に破片が散りばり、しかも柵列（S A 1）の西側に分布が偏っていた。破片は小破片が多く一括出土という状況ではなかった。

平安時代の遺構の分布は、III層（地山）が高いところと一致している（C～E・2～9）。III層の上面が生活面であった当時は、C～E・2～9付近は周囲より高燥な微高地で住居を構えるのに適したところであったため、数時期にわたって生活が営まれた結果として多数の遺構が密集したと考えられる。また、調査区の南西部で見つかった柵列の西側はIII層が落ち込んでI c層の堆積が認められ、A・3～4では切断痕のある流木が見られた。これらのことからすると、柵列から西側は低湿地のような状態だったことが考えられる。

4 検出遺構

1) 掘立柱建物跡

S B 1 (第34図)

N-27°-Wで、5間×4間の建物跡である。長軸はE B 2とE B 7で12m、短軸はE B 2とE B 29で9mを測り、桁行40尺と梁行30尺となる。各柱穴の覆土は概ね黒色をなし、礎盤や根固め石を用いたものが見受けられる。間尺などからE B 9～E B 13・E B 13～E B 27・E B 27～E B 23・E B 23～E B 9を結んだ3間×2間の純柱の建物を母屋として、四面に庇がめぐる総庇付の建物と考えられる。

S B 2 (第35図)

N-63°-Eで、2間×3間の建物跡である。長軸はE B 173とE B 569で6m、短軸はE B 173とE B 232で5.4mを測り、桁行20尺と梁行18尺となる。

S B 3 (第36図)

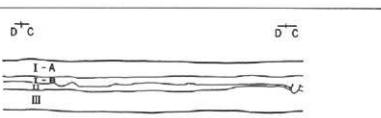
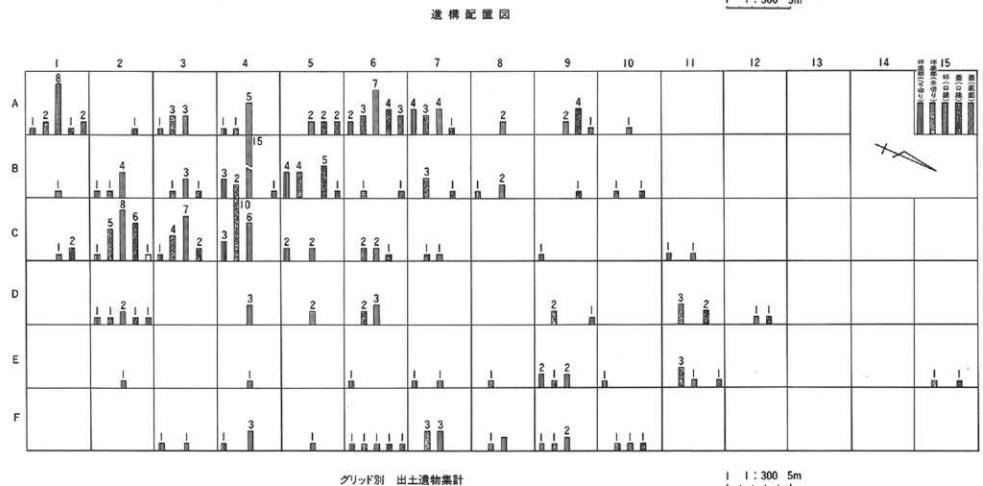
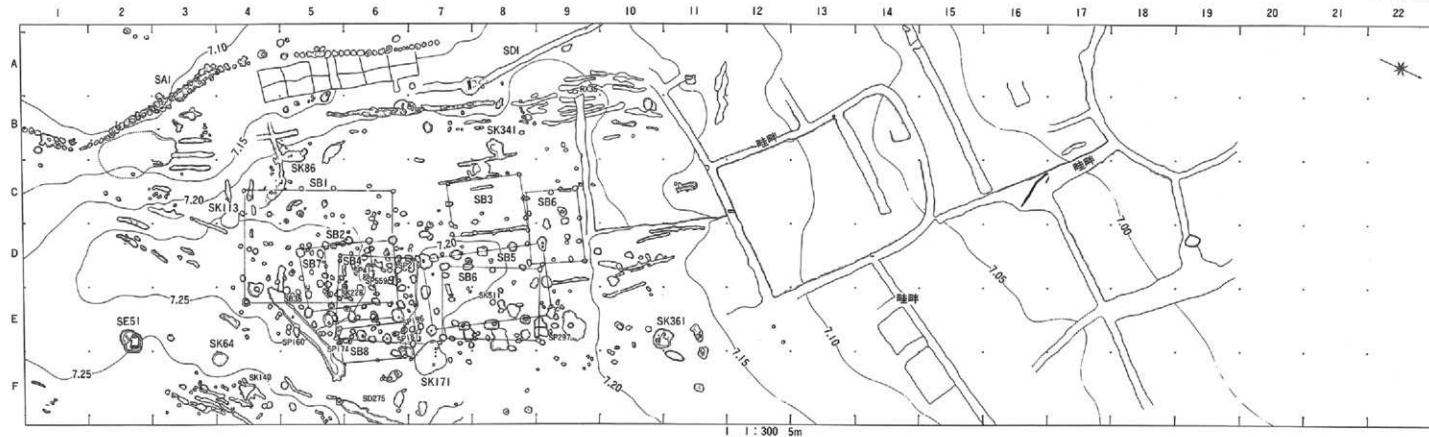
N-30°-Wで、梁行2間×桁行3間の建物跡で庇がつく。長軸はE B 85とE B 354で6m、短軸はE B 348とE B 85で3.4mを測り、桁行20尺と梁行はおおむね11尺7寸を測る。庇となるE B 85とE B 605の間は90cmを測り3尺となる。

S B 4 (第36図)

N-70°-Eで、2間×3間の建物跡である。長軸はE B 175とE B 548で6.6m、短軸はE B 175とE B 193で6mを測り、桁行22尺と梁行は20尺を測る。

S B 8 (第36図)

N-29°-Wで1間×2間の建物跡である。長軸はE B 189とE B 176で5m、短軸は2.6



I - B 10YR6/1褐色灰色粘質土 純土腐植物を多く含む
I - B 10YR6/2深褐色粘質土 旧耕土
II 10YR4/1褐色灰色粘質土
III 10YR6/3にい黄褐色粗砂シルト
ところどころ小礫を含む



I - A 10YR6/1褐色灰色粘質土
I - B 10YR6/2深褐色粘質土 旧耕土
I - C 10YR5/1褐色灰色粘質土
II 10YR4/1褐色灰色粘質土にい黄褐色土粒含む
III 10YR6/1褐色シルト 明黄褐色土粒含む

0 1:40 1m

mを測り、桁行は16尺7寸弱、梁行は8尺7寸弱となる。

S B 5 (第37図)

N-32°-Wで2間×4間の建物跡である。長軸はE B607とE B596で9.6m、短軸はE B596とE B498で5.5mを測り、桁行は32尺、梁行は18尺7寸弱となる。

S B 7 (第38図)

N-28°-Wで2間×2間の建物跡である。長軸はE B227とE B231で5.6m、短軸はE B227とE B561で5.2mを測り、桁行は18尺7寸弱、梁行は17尺4寸弱を測る。S D551が伴うとすればほぼ正方形の総柱の倉庫風の建物であるとも考えられる。

S B 6 (第38図)

N-27°-Wで2間×4間の建物跡である。長軸はE B314とE B584で7.5m、短軸はE B584とE B201で5.7mを測り、桁行は25尺、梁行は19尺となる。

S B 9 (第38図)

N-61°-Eで2間×3間の建物跡である。長軸はE B34とE B82で2.9m、短軸はE B34とE B640で1.9mを測り、桁行は9尺7寸弱、梁行は6尺3寸となる。

2) 井戸跡

S E51 (第39図)

井戸枠を有し、覆土の観察によると別の土坑に南端部が切られている可能性がある。そのため南端部の井戸枠が抜き取られたと考えられる。R P53・43はF 2下面より出土し、R P73は掘り方4の下面から出土した。

3) 土坑

S K341 (第39図)

長径175cm、短径125cm、深度10cmを測り、溝との切り合い関係はつかむことができなかった。山上遺物はあかやき上器の鉢と内黒上器の壺などが出土した(41-16~19)。須恵器や土師器の出土は無かった。

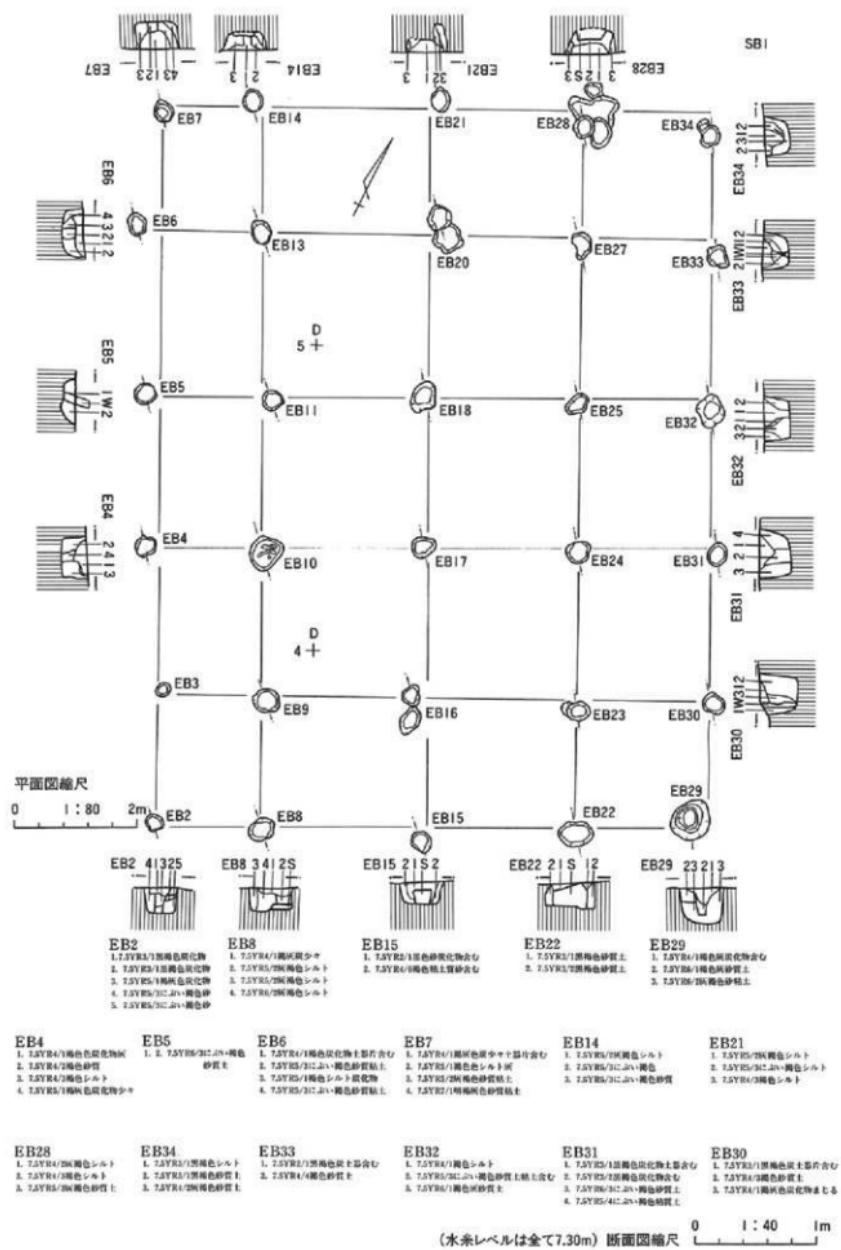
覆土は炭化物や土器の小片が入り交じった状態で、全体に黒褐色をしており底面は固くしまっていた。覆土の上面では火山灰らしい混入物が確認された。

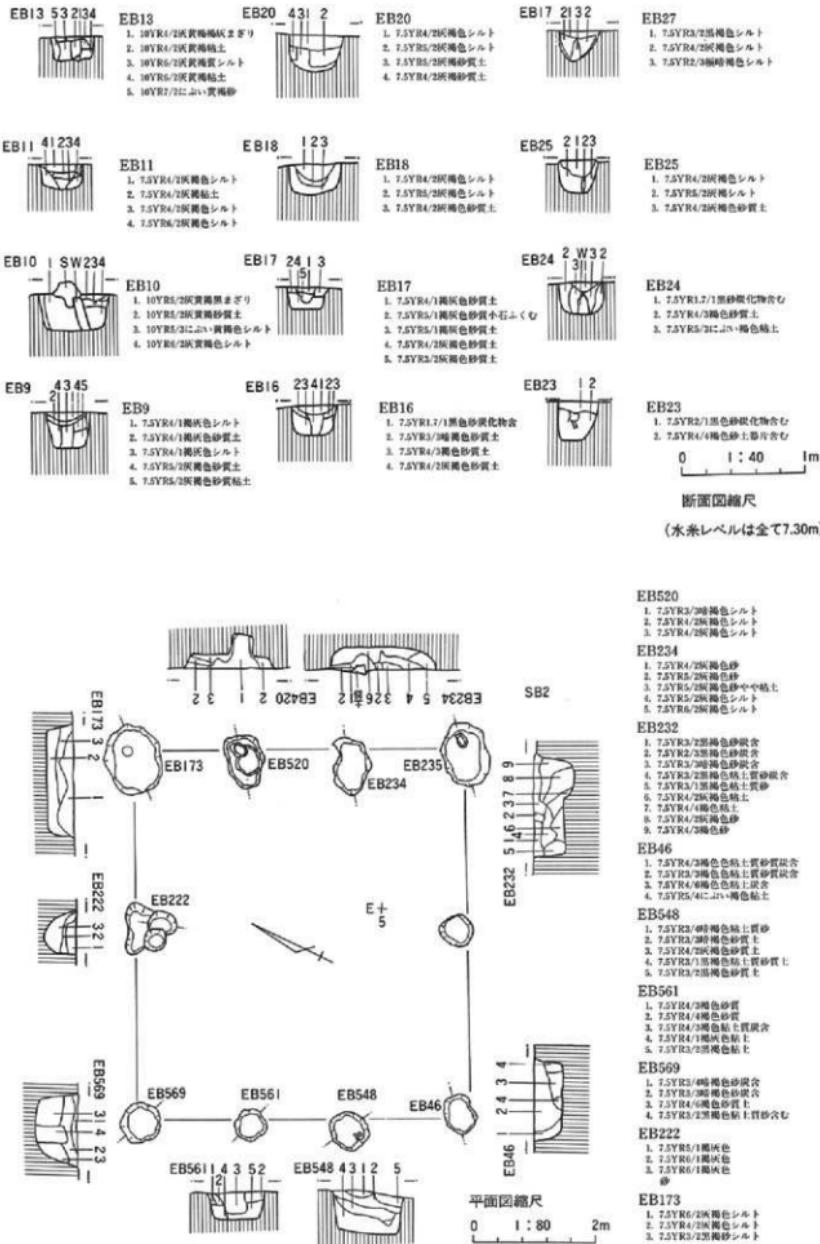
S K361 (第39図)

長径・短径とも140cmで深度は最大で14cmを測り、底面は緩やかな凹凸があり、地山との境が明瞭につかめなかった。遺物は須恵器、あかやき土器、内黒土器が底面付近からまとまって出土した(41-1~11)。

S K171 (第39図)

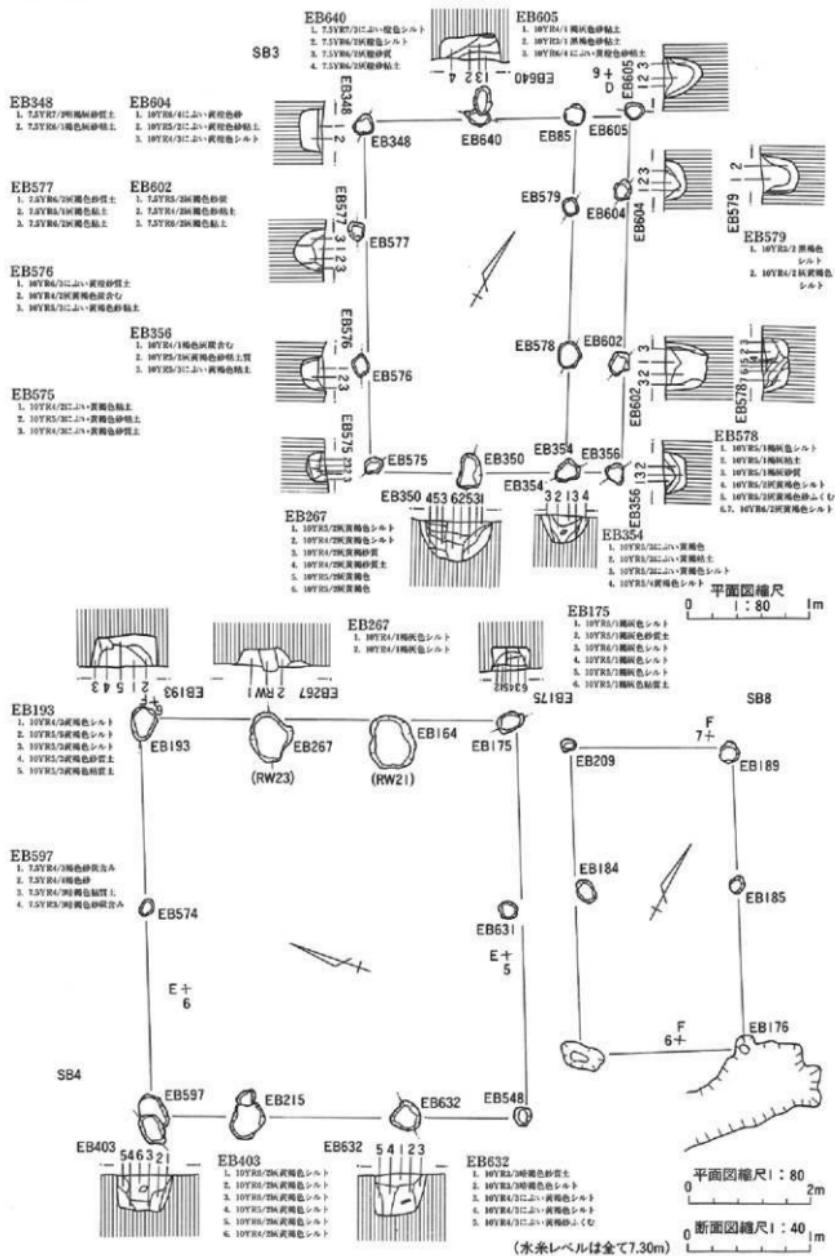
長径280cm、短径220cm、深度21cmを測り、今回確認された土坑の中では最大である。底面は比較的明瞭に確認する事ができ、覆土はレンズ状に堆積していた。出土遺物は須恵器、あかやき土器、内黒土器が出土した(40-1~18)。



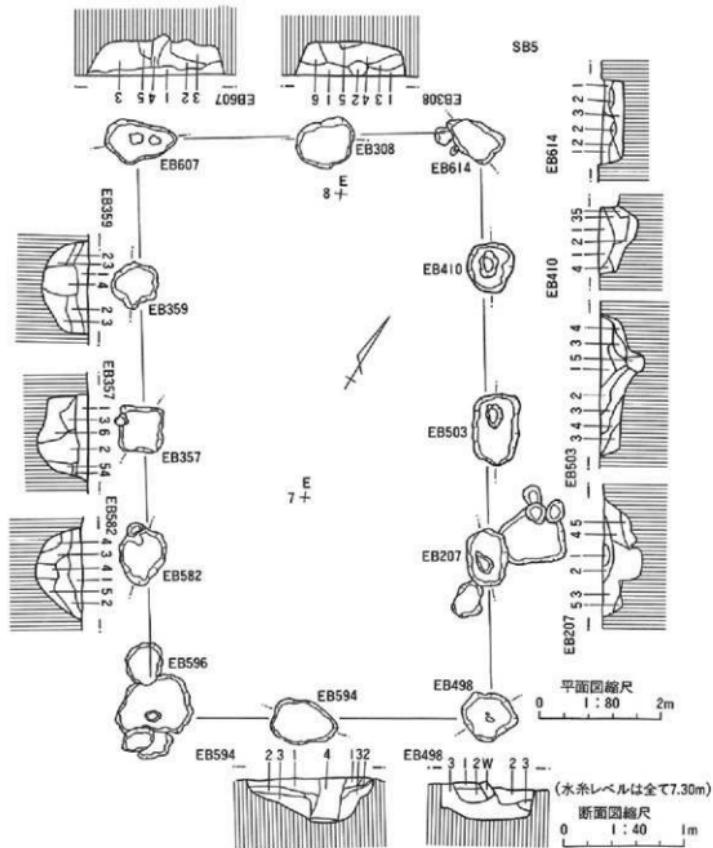


第35図 SB2遺構実測図

V 堂田遺跡



第36図 SB3・SB4・SB8遺構実測図



EB359

1. 7.5YR4/4褐色砂質土
2. 7.5YR4/3褐色砂質土
3. 7.5YR4/6褐色砂質土
4. 7.5YR4/3褐色砂質土
5. 10YR5/2灰褐色粘土砂含み

EB357

1. 10YR3/2暗褐色砂くずむ
2. 10YR3/2暗褐色
3. 10YR6/3暗褐色シルト
4. 10YR5/3暗褐色シルト
5. 10YR6/2暗褐色シルト
6. 10YR5/2灰褐色粘土砂含み

EB582

1. 7.5YR4/6褐色砂質土
2. 7.5YR3/3褐色砂質土
3. 7.5YR4/6褐色砂質土
4. 7.5YR4/4褐色粘土砂含み
5. 7.5YR4/6褐色粘土砂

EB607

1. 7.5YR3/4褐色砂炭化物含む
2. 7.5YR4/1褐色砂質土
3. 7.5YR4/4褐色粘土砂
4. 10YR4/4褐色粘土砂含む
5. 7.5YR4/4褐色粘土シルト

EB308

1. 7.5YR3/3褐色砂質土
2. 7.5YR3/2暗褐色砂炭化物含む
3. 7.5YR4/4褐色砂質土
4. 7.5YR4/6褐色砂質土
5. 7.5YR3/4褐色砂質土
6. 7.5YR4/4褐色砂質土

EB614

1. 7.5YR3/2暗褐色砂
2. 7.5YR3/3暗褐色砂
3. 7.5YR4/3褐色粘土質

EB410

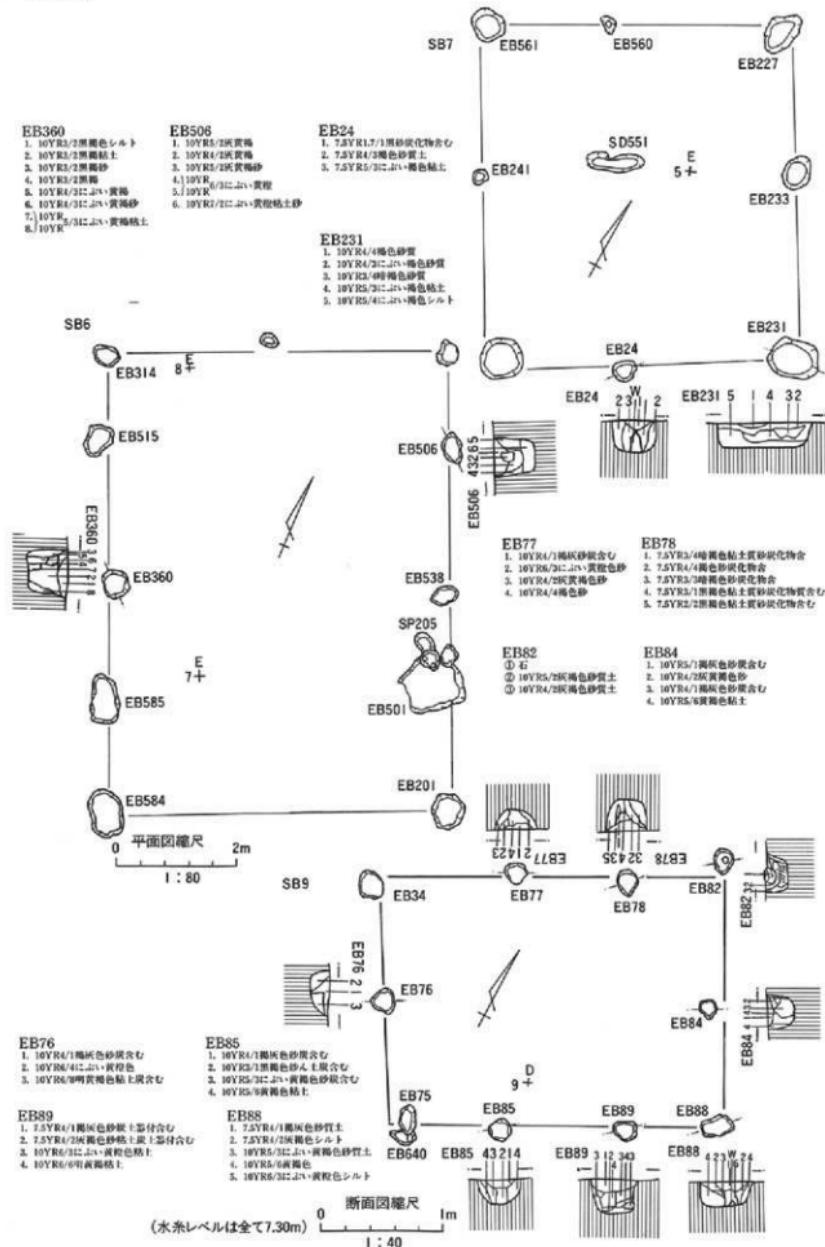
1. 7.5YR3/4褐色砂粘土含む
2. 7.5YR4/3褐色砂質土含む
3. 7.5YR4/4褐色粘土質
4. 7.5YR4/6褐色粘土質
5. 7.5YR4/6褐色粘土砂含む

EB503

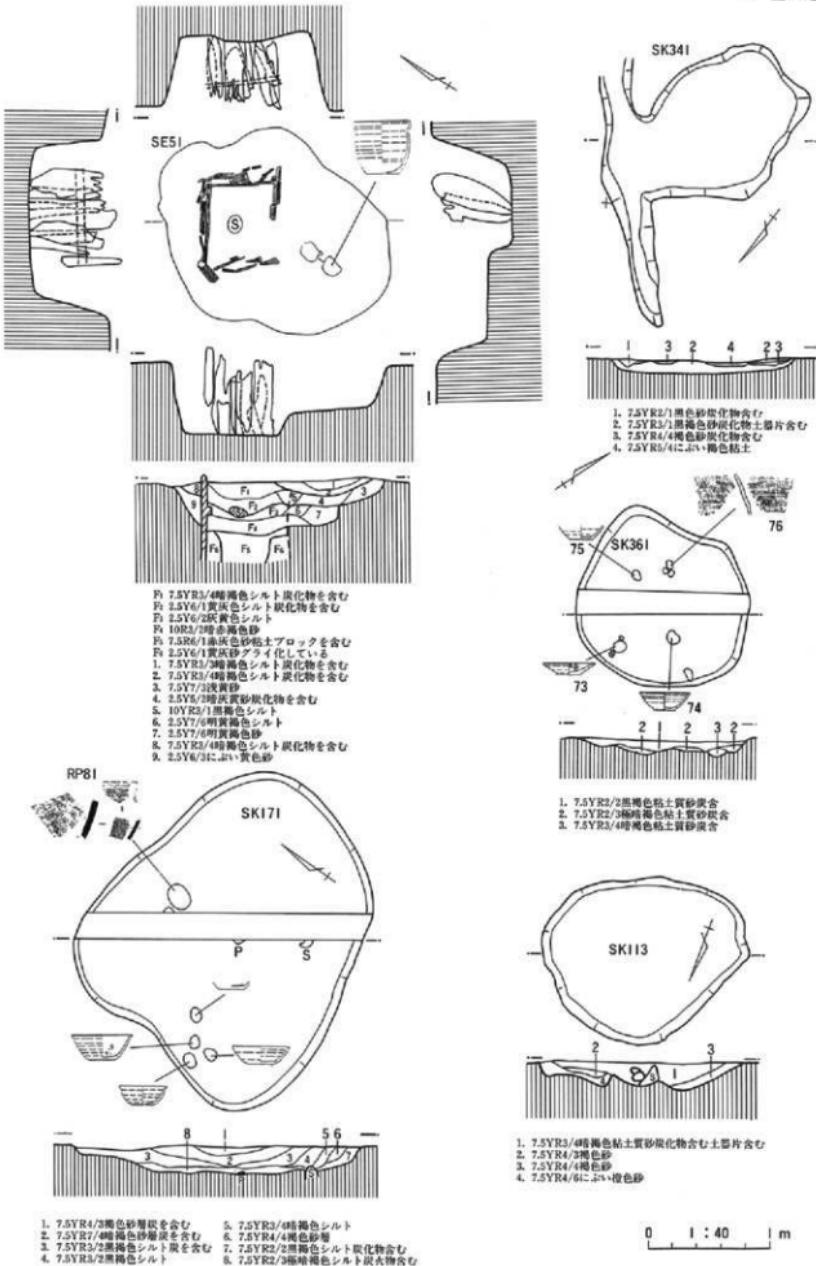
1. 7.5YR3/4褐色砂粘土含む
2. 7.5YR4/3褐色砂質土含む
3. 7.5YR4/4褐色粘土質
4. 7.5YR4/3褐色粘土質
5. 7.5YR3/3褐色粘土質

EB207

1. 7.5YR3/4暗褐色砂質土
2. 7.5YR4/4褐色砂質土
3. 7.5YR3/3褐色砂質土
4. 7.5YR4/3褐色砂質土
5. 7.5YR4/4褐色砂質土



第38図 SB6・SB7・SB9遺構実測図



第39図 SE51・SK171・341・113遺構実測図

4) 棚列（第33図）

S A 1

直径20~30cm、深さ10~20cmのピットが二重になって延びている。列を境にして、標高の高い部分は遺構が密集し、低地の部分には遺構は存在せずに、土器の破片が分布している。

5) 遺跡・畦畔（第33図）

S D 1・畦畔

時期を特定するような遺物の出土は無かったが、近世の遺構と思われる。一般に今回の調査区の中では低地の部分に位置する。

6) その他

その他の遺構として、畝状遺構と、A~B + 4~6付近で確認された水田状の遺構がある。水田状の遺構に関しては、ほぼ同じ形で、土手状の土の盛り上がりによって区画されている。性格や時期は不明である。

5 出土遺物

1) 土師器

今回の調査で出土した土師器は、ロクロを使用せずにナデやケズリによって調整された壺（40-15、41-10）と、ロクロを使用して形成された壺がある。ロクロを使用した壺には、内面を磨いて黒色処理したもの（遺物観察表では黒色土器として分類した）と、内面を磨いてはいるが黒色処理されなかったもの（40-9）がある。量的には前者が多い。さらに、高台の有無によって、高台を持つ高台付壺（40-9、41-8など）がある。内黒の高台付壺（41-6）も存在する。蓋と思われる破片も出土している（40-20）。

2) 須恵器

器種は、壺（40-1、41-12など）、高台付壺（42-18、45-10~12）、高台付皿（44-2、3）、双耳壺（44-4）、蓋（42-10~14）、壺（42-15、19）、壺（44-17・18、45-23など）、鳥形須恵器（46）がある。壺底部の切り離しは回転ヘラ切り（40-1、45-9）と回転糸切り（42-17など）があり、量的には回転糸切りが多い。両者の分布には顕著な差異は認められなかった（第33図）。

鳥形須恵器は高さ27.9cm、幅22.8cm、長さ（残存値）19.9cm、器厚9mmである。作り方は横瓶と同じで、閉塞部が明瞭に確認できる。外面の観察では底部に脚が付いていたことがうかがえる。正面の馬蹄型の沈線は、少なくとも大きさの異なる2種類の当て具によって施され、背面にも矢羽状の沈線が施されており、羽根と体部の区別に隆線を用いている。焼成は非常に良い。

3) あかやき土器

器種は壺（41-13~15、42-1~4など）、高台付壺（40-7、43-6など）、壺（42-5~6、43-11など）、鉢（40-16、41-16~17など）、壺（43-10、44-33~34など）が出土している。40-20は須恵器の可能性があり、44-21~22、44-20、45-20は土師器の

可能性がある。44-16は口唇部が内側に傾き、他の甕の口縁とは形態的に異なる。

4) 製塙土器 (第45図)

S D275からまとまって出土したが、全形がわかるものは無かった。断面は輪積みまたは積み上げの痕跡が明瞭で、外面の調整は認められないが、内面にハケメを持つもの(45-2、5)がある。

5) 木製品 (47図・48図)

47-1・2は箸と考えられる。47-3・4は大きさが異なるが、斜めの擦痕が認められる。47-5・6、48-2・7は板状で、両面とも削り取られた痕跡が認められる。47-7・8、48-3・5・6は礎盤と考えられる。48-1は曲げ物の底部または蓋と考えられる。48-4は板状であるが、上部に2孔の穴が開けられている。

6) その他 (47図他)

上記以外の遺物として、古鏡(47図9から13)が5点出土している。9は大觀通宝、10は熙寧通宝、12は皇宋通宝と読み取れる。47-14は土製の装飾品と考えられる。40-21と47-15は土鍾である。石製品としては、凹石(42-20)と砥石(47-16)がある。47-17は繩文時代の石鍬である。表土除去の段階で青磁の破片や、馬蹄、キセルなども出土した。

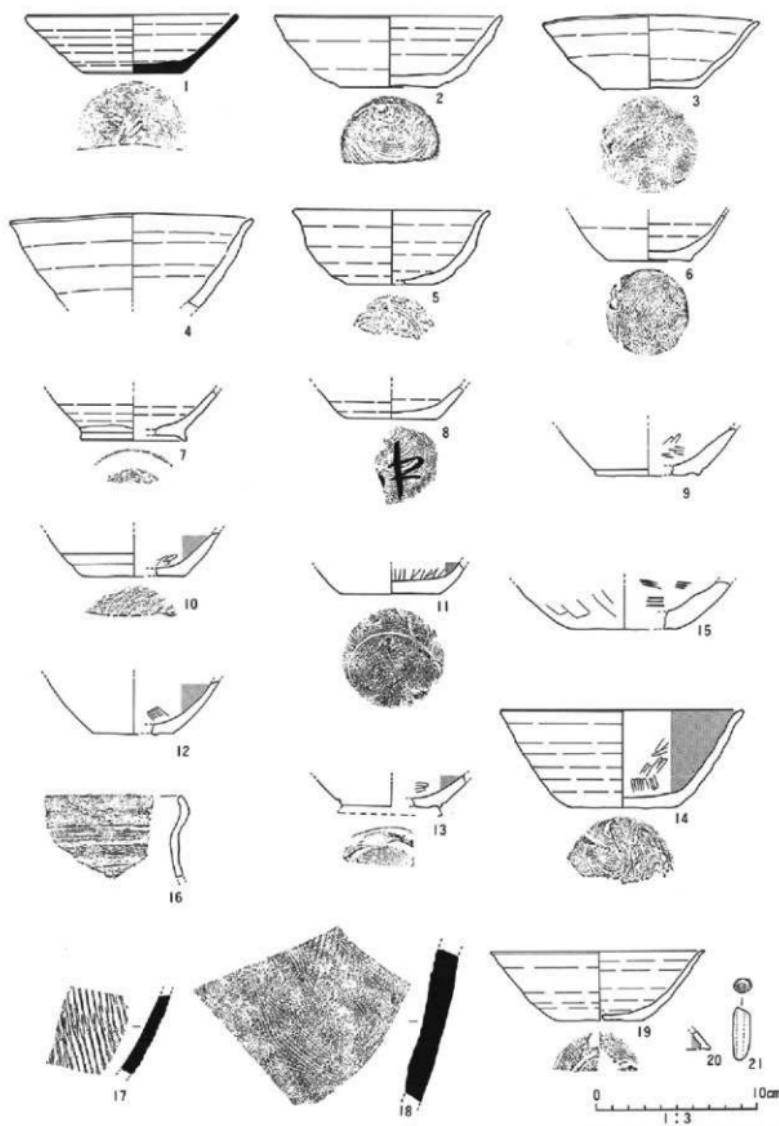
6まとめ

遺構は、9棟の掘立柱建物跡を確認することができ、柵列(S A 1)と思われる遺構を境にしてその東西では遺構の分布に大きな違いが見られた。また、明確な切り合い関係はつかむことができなかつたが、S B 6はS B 3を切っており、S B 4はS B 5を切っていることがわかった。覆土などの様子からS B 5が一番古いのではないかと考えられる。SK171とSK361からはまとまりのある土器群が得られ、9世紀後半代の年代が考えられる。

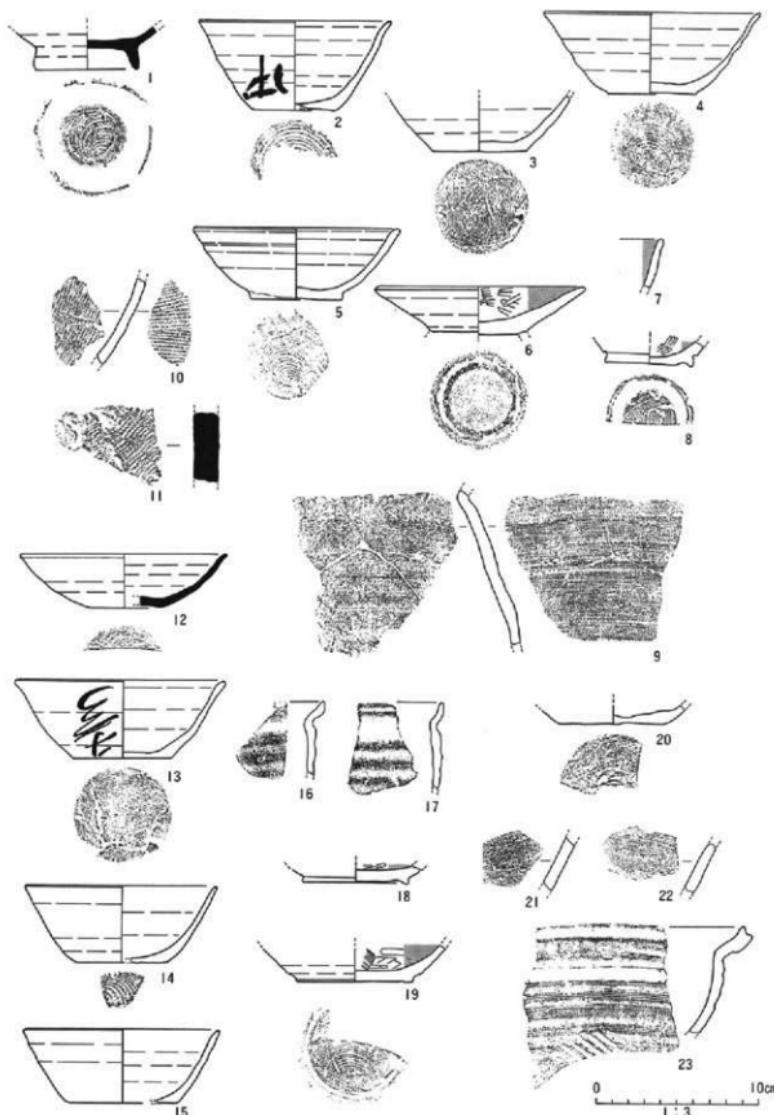
遺物に関しては、特筆すべきものとして鳥形須恵器があげられる。類例は久々忠義氏によれば、1983年現在で28例が知られており、それ以後では金沢市末窯跡群、塙尻市勝負沢窯跡、多賀城、秋田市右馬之丞窯跡、会津若松市大戸窯跡、平田町山海窯跡などで知られている程度で類例はそう多くはない。時期的には古墳時代の場合は古墳の副葬品が多く、8世紀以降になると窯跡や官衙での出土が目立つようになり、一般的な集落での出土は希である。古墳時代の鳥形須恵器は瀬戸内地方に多く分布し、8世紀以降になると北陸地方、東海地方や東北の日本海側に分布が偏るようである。しかし、堂田遺跡が関係する8世紀以降に関しては、完形もしくは完形品に近い資料は少なく、しかも破片の場合は横瓶と区別がつきにくいということなどが類例の増加を妨げているものと思われる。今後出土例が増加すれば、分布範囲や時期についてより明らかになるであろう。本遺跡の出土例は9世紀前半頃ではないかと考える。

〈参考文献〉 富山県教育委員会 小杉流通業務団地内遺跡群 第6次緊急調査発掘調査概要 1984年

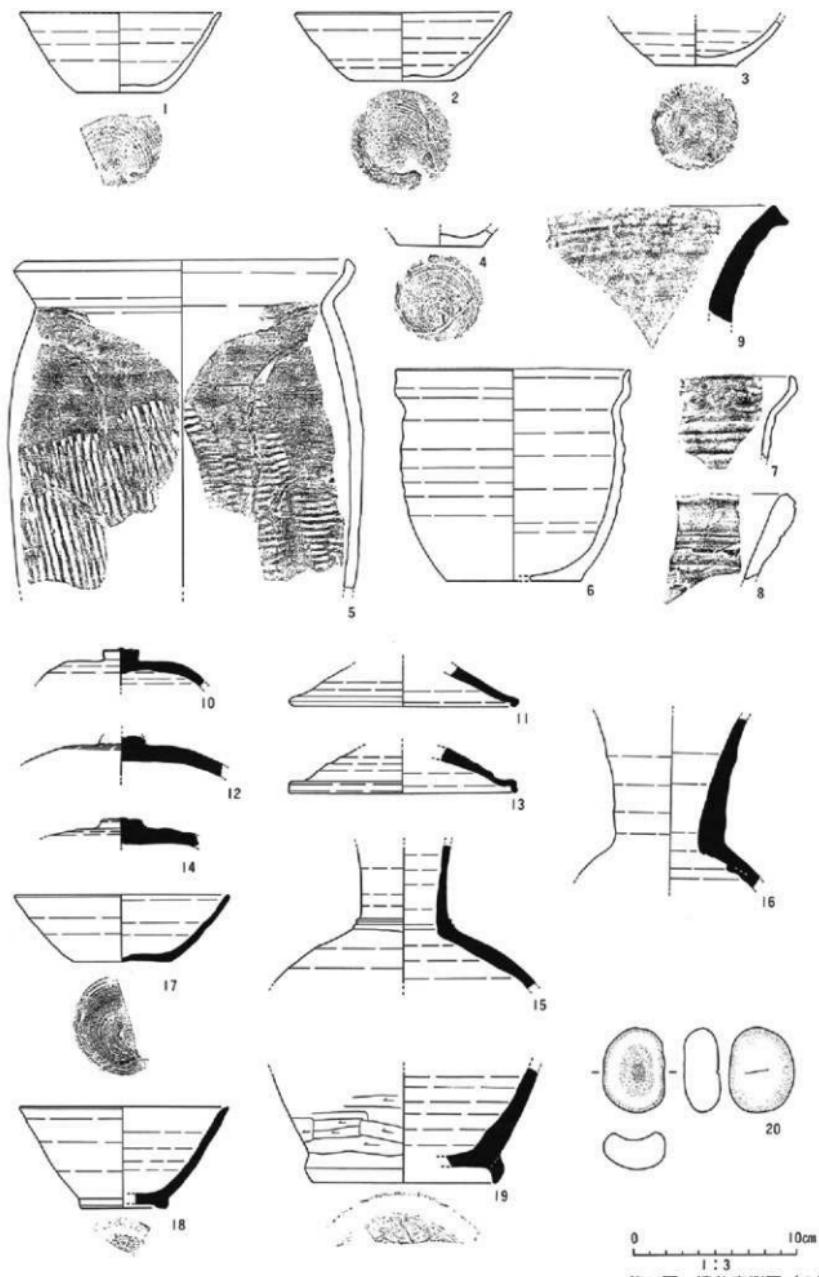
富山県埋蔵文化財センター「埋文とやま 第5号」 1983年



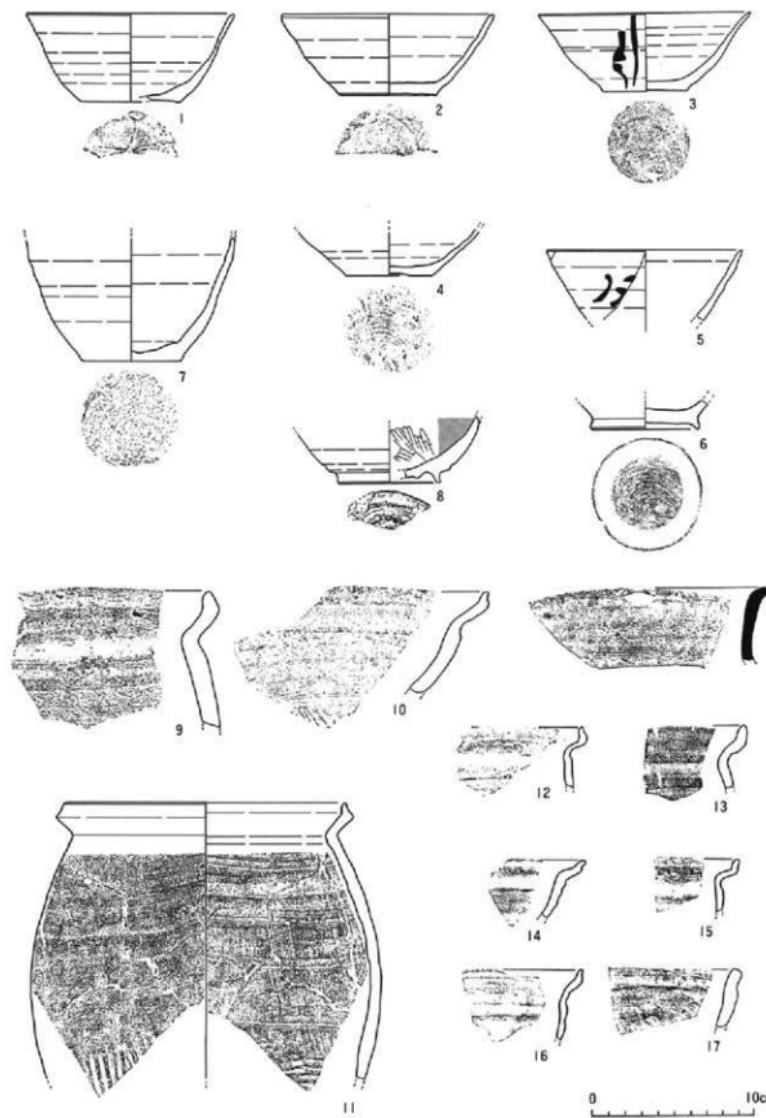
第40図 遺物実測図 (I)



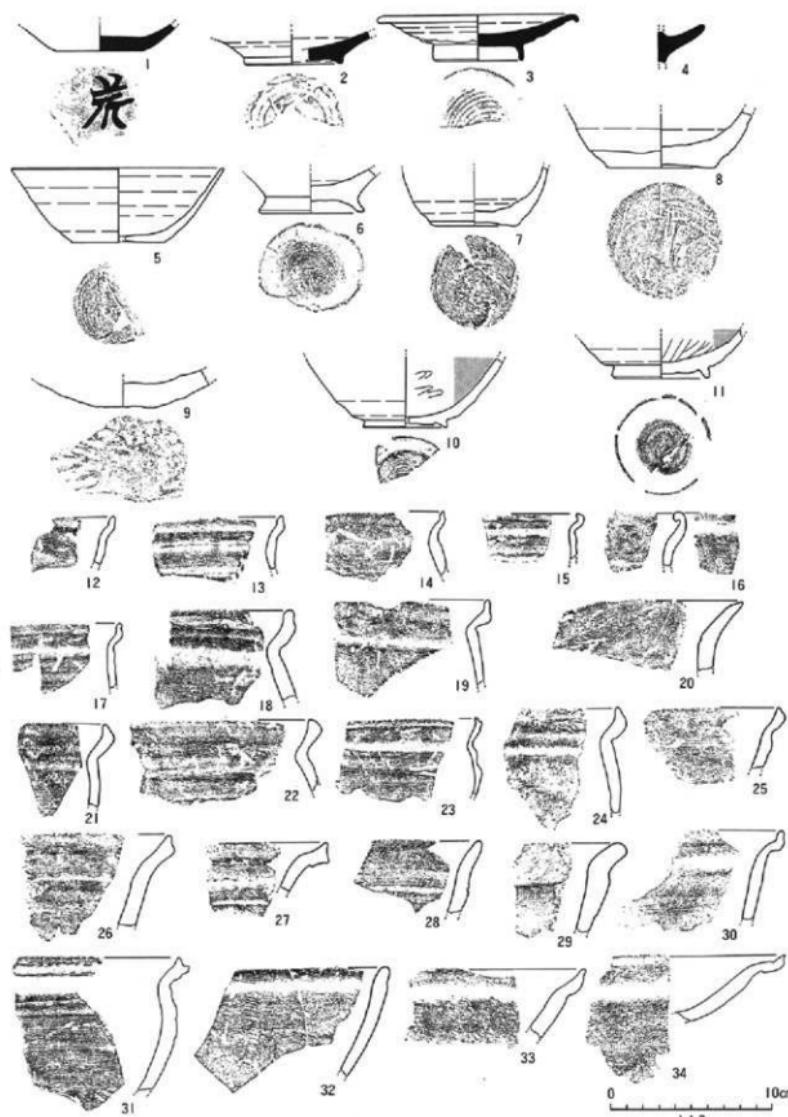
第41図 遺物実測図（2）



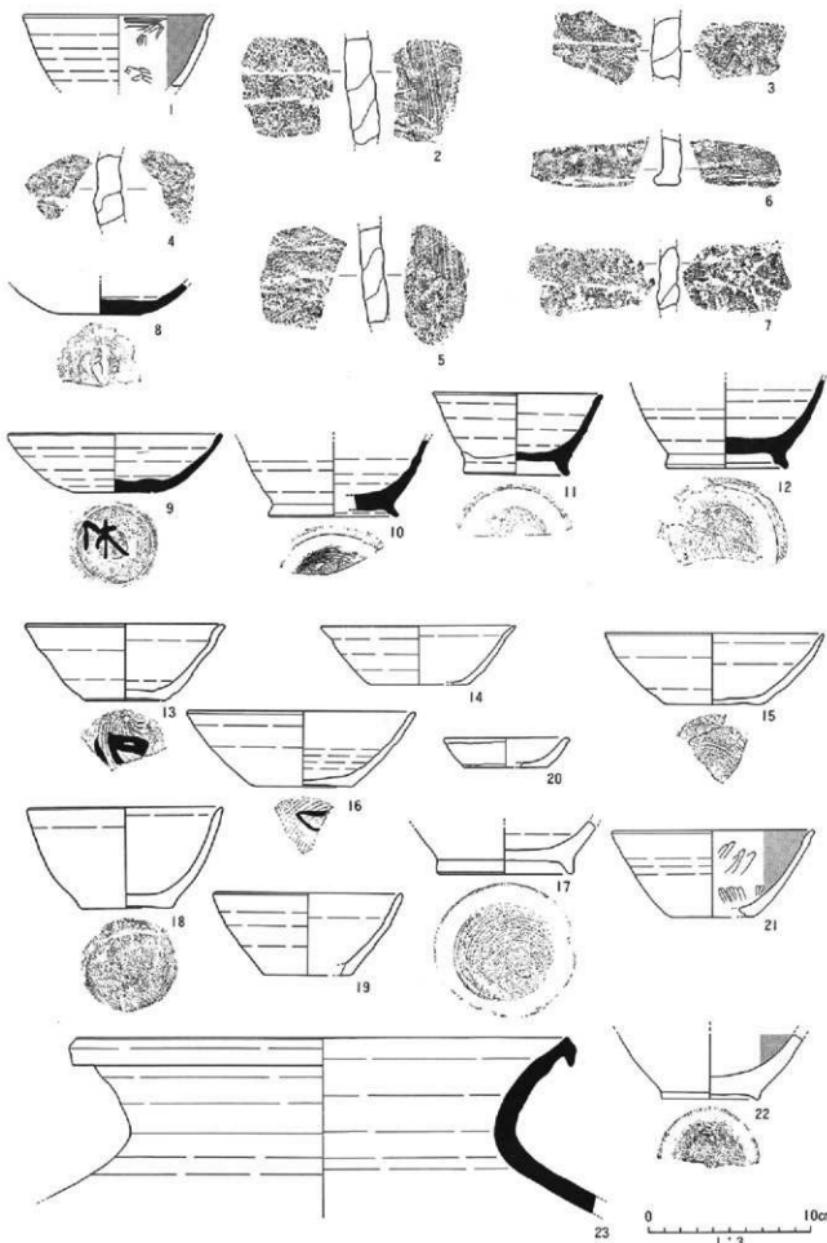
第42図 遺物実測図（3）



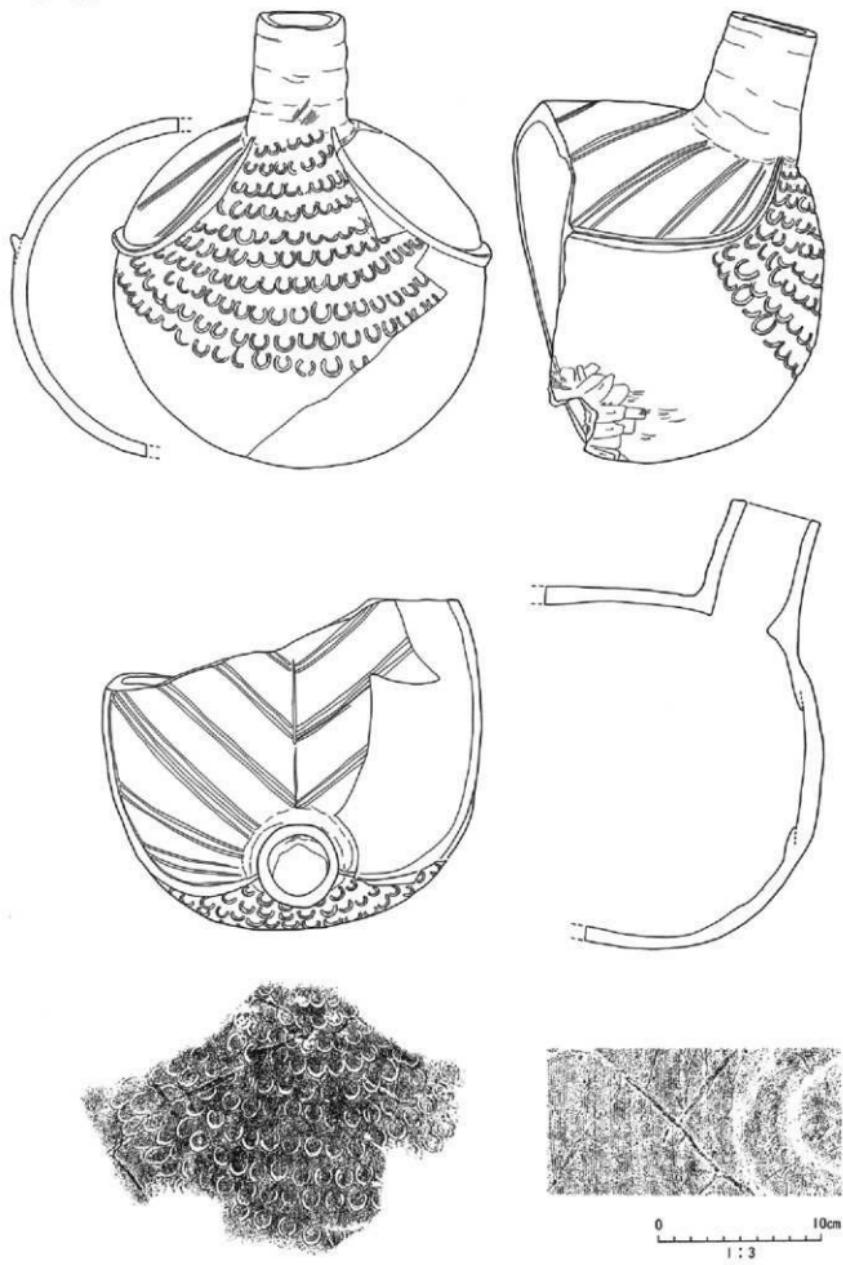
第43図 遺物実測図(4)



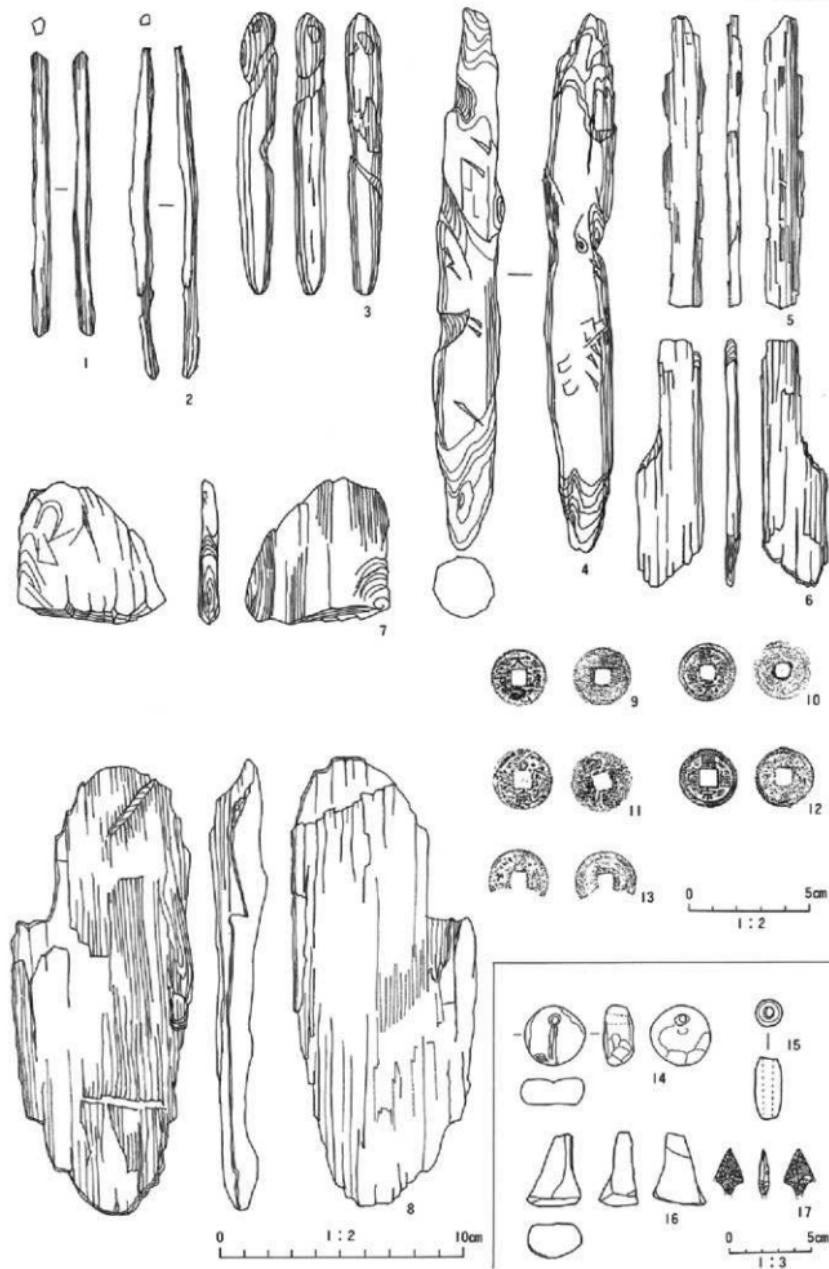
第44図 遺物実測図（5）



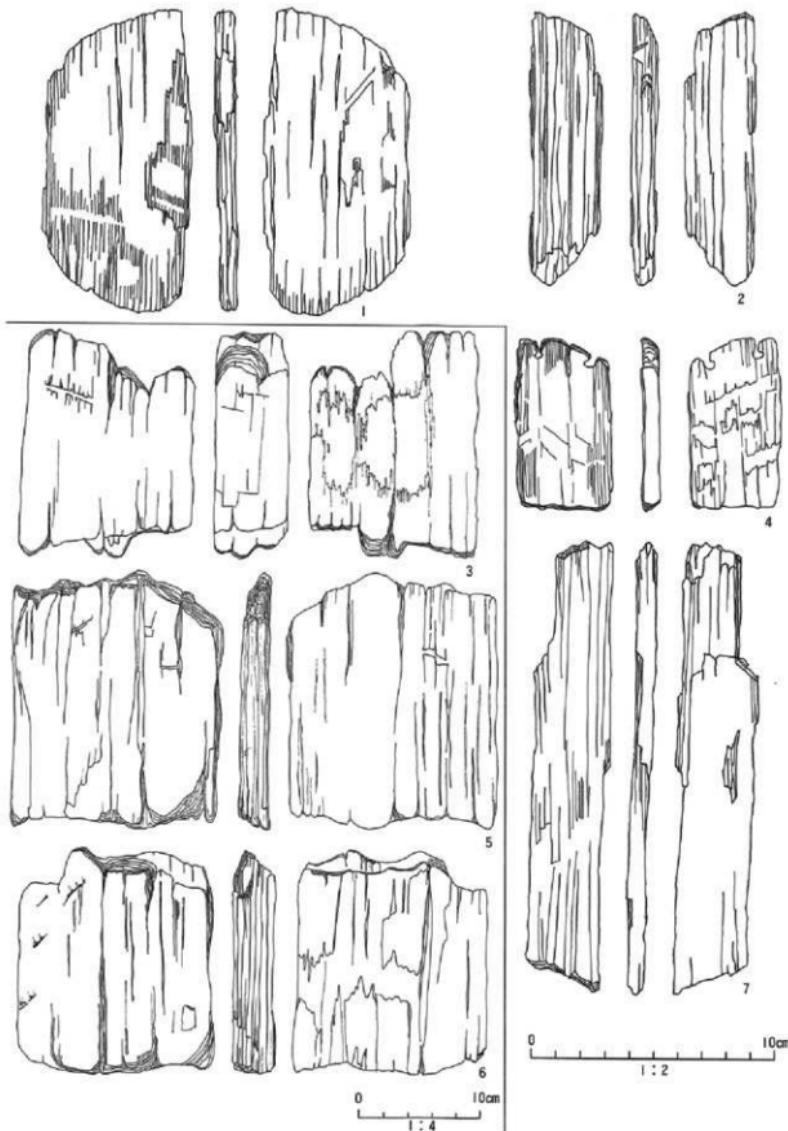
第45図 遺物実測図（6）



第46図 遺物実測図（7）



第47図 遺物実測図 (8)



第48図 遺物実測図 (9)

表一五 遺物観察表(1)

編 物 番 号	種 別 ・ 器 類	計測値(mm)				底部切離	調整技法		出土地点 登録番号	備 考	
		口径	底径	高さ	基盤厚		内面	外面			
第 四 回	須恵器	(130)	(60)	36	3	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK171(F7)		
	あかやき土器	(140)	(60)	44		回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK171(RP98)		
		(131)	60	45	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK171(RP81)		
		(150)			6		ロクロ	ロクロ	SK171		
		(120)	(54)	46	7	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK171(RP82)		
	高台坏			50	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK171		
					5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK171		
					5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK171	底部墨書き「中」	
	土器器	高台坏	(65)			回転糸切	ミガキ		SK171		
	黑色土器		(65)		7	回転糸切	ミガキ	ロクロ	SK171	内黒	
			(60)			回転糸切	ミガキ		SK171(RP84)	内黒	
			(50)			回転糸切	ミガキ		SK171	内黒	
		高台坏			6	回転糸切		ロクロ	SK171	内黒	
第 五 回	坏	(150)	(65)	60	6	回転糸切	ミガキ	ロクロ	SK171(RP97)	内黒	
	土師器	壺	(68)		12		ハゲメ	ナデ	SK171		
	あかやき土器	鉢			4		ロクロ	ロクロ	SK171(RP81)		
	須恵器	壺			7		タタキ	タタキ	SK171(RP81)	体部	
					15		タタキ	タタキ	SK171(RP81)	体部	
	あかやき土器	坏	(130)	(52)	44	3	回転糸切	ロクロ	ロクロ	EB78(SB9)	
	黑色土器	壺				4			EB9(SB1)	内黒	
	土製品	土鏡			高32	φ9.5			EB173(SB2)		
	第 六 回	須恵器	高台坏		60	4	回転糸切		ロクロ	SK361(RP77)	
			(110)	(50)	56	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK361(E10)	体部墨書き「中」
					57	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK361(RP75)	
			(132)	55	50	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK361	
			(126)	(56)	44	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK361(RP74)	
		台付壺	130	(48)	28	7	回転糸切	ミガキ	ロクロ	SK361(RP73)	内黒
		黑色土器	坏			4		ミガキ		SK361	内黒
			高台坏	(54)		7	回転糸切	ミガキ		SK361	内黒
	あかやき土器					7		ロクロ	ロクロ	SK361(RP76)	体部
	土師器	壺			6		ハゲメ	ハゲメ	SK361	体部	
	須恵器	壺			15		タタキ	タタキ	SK361	体部	
第 七 回			128	(46)	33	3	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK113(C4)	
			128	60	49	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK113(RP111)	外面墨書き「千万呂」
			(110)	(56)	47	3	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK113(RP85)	
	あかやき土器		(120)	(66)	46	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK113(RP87)	
		黑色土器				4			SK341(B8)		
						5			SK341		
			坏	(65)			回転糸切	ミガキ		SK341	内黒
	あかやき土器	高台坏		72		5	回転糸切	ミガキ	ロクロ	SK341	
		坏	(65)			5	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	EB410(SB5)	
	あかやき土器	壺				7			EB410		

表-6 遺物観察表(2)

測定番号	遺物番号	種別・器種	計 横幅(mm)				底部切離	調整技法		出土地点登録番号	備考
			口径	底径	高さ	厚さ		内面	外面		
22	あかやき土器	甕			6			ロクロ		EB410	
					7			ロクロ		EB410	
第41回	23	あかやき土器	(122)	(52)	50	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SE51(RP53)	
	1		(133)	60	42	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SE51(RP42)	
	2				50	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SE51(RP54)	
	3				53	6.5	回転糸切			SE51(RP46)	
	4		(186)		9		タタキ	タタキ		SE51(RP52)	
	5		(142)	(82)	130	6	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SE51(RP44-45)	
	6					4		ロクロ		SE51(E2)	
	7					12	ロクロ	ロクロ		SE51	
	8										
	9				12			ロクロ		SE51(RP53)	
第42回	10	須恵器			6			ロクロ		C-5	
	11		(136)		13		ロクロ	ロクロ		E-11 II・III	
	12						ロクロ	ロクロ・ケズリ		E-6 II・III	
	13		(140)		3			ロクロ		(RP15) C-3 II・III	
	14				8					F-6 II・III	挑成良くない
	15				7		ロクロ	ロクロ		B-3 II・III (RP70)	
	16				8					A-6	
	17		(120)	(60)	41	3	回転糸切	ロクロ	ロクロ	A-6 II・III	
	18		高台坏	(126)	62	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	A-6 II・III	
	19		壺?	(110)		8	回転糸切	ロクロ	ケズリ	G-8 II・III	
第43回	20	石製品	くぼみ石	巾37		高52 厚20				D-4 II・III	
	1		(128)	(60)	54	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SB35(E5)	ゆがみ多い
	2		(130)	(60)	50	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	E-6 II・III	
	3		(128)	51	49	5	回転糸切		ロクロ	EB82(SB9) II・III	側面墨書き
	4				53	3	回転糸切			EB205(SB6)	
	5		(120)		4			ロクロ		SP559(D6)	側面墨書き
	6		高台坏		66		回転糸切			(RP67) C-4 II・III	
	7		壺		60	7	回転糸切			SK511(E8)	
	8		黒色土器	高台坏	(62)	7				SP196(E6)	内面に付着物有
第44回	9	須恵器	壺		11		ロクロ	ロクロ		SK228(E6)	
	10		瓶		9		ロクロ・ナデ	ロクロ・タタキ		EB665(SB6)	
	11		壺	(170)		7	タタキ・ケズリ	タタキ・ケズリ		SK86(RP63)	(C5)
	12				4		ロクロ	ロクロ		SP160(E5)	
	13		あかやき土器		5		ロクロ	ロクロ		SP41(D6)	
	14		鉢?		5		ロクロ	ロクロ		EB233(SB7)	
	15				4		ロクロ	ロクロ		SP297(E9)	
	16				4		ロクロ	ロクロ		EB354(SB3)	
	17		鉢?		7		ケズリ・ロクロ	ケズリ・ロクロ		EB216(D6)	
	18		壺		7		ロクロ	ロクロ		EB501(RP91)	(SB6)
第44回	1	須恵器	环		50	4	回転糸切			(RP8) B-7	底部墨書き
	2		高台付皿	(60)		7	回転糸切	ナデ		B-9 II・III	内面鏡に転用?

表一7 遺物觀察表(3)

編 目 番 号	著 者 番 号	種 別 ・ 器 種	計 測 値 (mm)				底部切端	調 整 技 法		出土地点 登録番号	備 考
			口径	底径	器高	器厚		内 面	外 面		
3	須恵器	高台付皿	(120)	(56)		5	回転糸切			B-4 II・III	
4		双耳环								B-5 II・III	
5	环	(130) (54)	46	3	回転糸切	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	D-9 II・III	
6											C-4 II・III
あかやき土器	要	高台环	62		7	回転糸切					
7			52		4	回転糸切				B-5 II・III	
8			66		回転糸切	ナデ	ケズリ			A-6 II・III	
9			(34)			ナデ	タタキ			C-4 II・III	
10		黒色土器	(52)		5	回転糸切				A-6 II・III	底部ケズリ調整
11		高台环	60		7	回転糸切	ミガキ			C-3 II・III	底部ケズリ調整
12					4	ロクロ	ロクロ			C-3 II・III	
13					5	ロクロ	ロクロ			F-9 II・III	
14					5	ロクロ	ロクロ			C-3 II・III	
15					4	ロクロ	ロクロ			B-4 II・III	
16		要			6	ロクロ	ロクロ			B-4 II・III	
17		鉢			4.5	ロクロ	ロクロ			X-O	
18					8.5	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	X-O	
19		要			6	ロクロ	ロクロ			X-O	
20		鉢			9	ミガキ	ナデ			A-3 II・III	土師器か?
21		縹			6	ロクロ	ロクロ			B-4 II・III	
22					7	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	D-7 II・III	
23	あかやき土器	鉢			3	ロクロ	ロクロ			RX35(B-9) II・III	
24					8	ロクロ	ロクロ			B-6 II・III	
25					6	ロクロ	ロクロ			B-2 II・III	
26					10	ロクロ	ロクロ			A-6 II・III	
27					8	ロクロ	ロクロ			F-4 II・III	
28					9	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	C-5 II・III	
29					12	ロクロ	ロクロ			E-6 II・III	
30		甕			7	ロクロ	ロクロ			A-6 II・III	
31		鍋			9	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	A-6 II・III	
32		鉢			7	ロクロ	ケズリ			D-1 II・III	
33					8	ロクロ	ロクロ			A-4 II・III	
34		鍋			8	ロクロ	タタキ	ロクロ	ロクロ	A-6 II・III	
1	黒色土器	坪	(116)		5	ミガキ				SD275(F6)	内黒
2					17					SD275	
3					17					SD275	
4	製塙土器				17					SD275	
5					14					SD275	
6					11					E-7 II・III	
7					12					SP187(E6)	
8	須恵器	环	(50)	51	36	4	ヘラ切			B-5	
9			(130)					ロクロ	ロクロ	C-4	底部墨書き・内面転用印
10		高台环	(80)		6	回転糸切	ロクロ	ロクロ	ロクロ	B-15 II・III	底部調整
11			(100)	(65)	50	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	E-6 II・III (RP31)	

表一 8 遺物観察表(4)

器物 番号	種別・器種	計測 値(mm)				底部切離	調整 接法		出土地点 登録番号	備考
		口径	底径	器高	器厚		内面	外面		
12	須恵器	高台坏	(75)		4	回転糸切	クロ	クロ	A-6 II・III	
13			(122)	(40)	47	4	回転糸切	クロ	クロ	E-8 II・III (RP23)
14			(118)	(60)	37	3	回転糸切	クロ	クロ	C-4 II・III (RP60)
15			(139)	(60)	44	4	回転糸切	クロ	クロ	C-7 II・III C-4
16	あかやき土器		(140)	(60)	46	5	回転糸切	クロ	クロ	B-5 II・III (RP62)
45			82		7	回転糸切			B-7 II・III (RR8)	底部墨書き
17			(118)	55	62	5	回転糸切			B-7 II・III (RP28)
18			(116)	(52)	50	5				C-4 II・III (RP68)
19			(76)	(51)	18	5	回転糸切			A-7 II・III
20			(122)	(56)	53	4	ミガキ		X+O	内墨
21	黒色土器	高台坏	(66)		8	回転糸切			A-6 II・III	底部ナゲ調整
22			(300)		110		タタキ	タタキ・ナゲ	A-1 II-B-2 A-3 II-B-3-B-4 (RP57)	
23	須恵器									
46	須恵器	鳥形須恵器					ロクロ	割剥・ケズリ・沈錆	A-1 II・III A-3 II・III B-1 II・III B-2 II・III	
1			巾7	長17	厚8					EB207(SB5)
2			5	137	5					EB207(SB5)
3			15	116	15					RW51 G-9
4			27	226	25					RW50 G-6
5			16	120	6					B-1
6			27	102	6					B-6
7			60	57	11					A-8
8			75	182	24					X+O
47	9									B-20(RM40)
10		古鏡								B-8(RM41)
11										A-7
12										E-22(RM-2)
13										C-2
14			17.5		37					C-8
15	土製品	石製品	土鉢	17.5	37					B-4
16			碗石		43	14				D-3
17			石鐵	17	27	6				B-16 II・III
48	1	木製品		58	127	10				C-2
2				29	112	12				C-2
3			盤	139	185	59				SB187(E-6)
4				37	68	7				B-6
5			盤	170	210	20				SP174(E-5)
6				158	173	35				EB538(SB6)
7				34	184	6				B-1

VI 総括

今回の北目長田遺跡・穢待遺跡・堂田遺跡の3遺跡は、いずれも平成6年度の県営ほ場整備事業（高瀬川地区）に係ることから実施された緊急発掘調査である。各遺跡の調査成果については既にIII～V章中で述べた通りであり、各々に時期や性格を異にする注目すべき内容があったと考えられる。また、ここで記載した3遺跡の他にも、近接して位置する上高田遺跡・木戸下遺跡あるいは石田遺跡・宅田遺跡・大坪遺跡などのいわば高瀬川流域に展開した主として平安時代の集落（あるいは官的な要素を含む）遺跡群のあり方が古代の郡や郷のどの部分を如何に表しているのかが大いに気にかかったところでもある。

少なくともこれまでの継続的なほ場整備事業を契機として知ることとなった平安期を主体とする遺跡群が、この高瀬川流域の両岸（自然堤防）に沿って20箇所近くも数えることのできる事実は注目されよう。これほどの遺跡集中をどう理解すればよいのかは、古代の郡（越海郡）・郷（遊佐郷？）・戸・戸戸などの実態にせまる上では重大な問題と認識されるからである。しかし、そのためにはこれら相互の有機的関連を探り、時代的に同時と言える部分がどの程度となるのか、あるいは遺跡と認識される範囲とそれを形成した単位数、仮に単位数が把握されたとしてその単位の構成員数と意味（戸戸？）そしてその集合体と推測される最小の経営単位（戸？）の把握と評価と言った検討と追求が課題となろう。

そうした意味での作業や研究の推進はこれからである。加えて、もう一方では当時の生産の基盤となった水田や畑等の生業の実態がどのようなものであったかの追求も大きな課題として残されたままの状態である。北目長田遺跡等で顕著に認められた畠跡と思われる畠状溝跡群の意味するところも安に「園地」と理解するだけでよいのかはこれらの問題に少なからず係わってくるものだろう。堂田遺跡・木原遺跡・筋田遺跡・大坪遺跡他でも検出されるところを見れば、その存在は當時とすれば一般的なありかただったと推測される。そこに栽培された作物が何であったか、生業との係わりは如何にあったかが解明できればより当時の生活像に近づけることは間違いない。果してそこに何を栽培して収穫したかであるが、今のところ手がかりはない。

また、北目長田遺跡からは製塩に係わりを持つと判断できる土器群の様相が窺えた。遺跡の標高や古環境については既に述べた通りである。従来から注目された所謂丸底形態を呈する煮炊具の支脚（コンロ形土器と呼ぶこともある）類とは明らかに異なる器形と出土状況が認められ、集落内部で小規模な製塩等の作業を行っていた可能性が強いと指摘できることも手工業の展開を知る上での成果として特筆される。最後に土器群について述べれば北目長田遺跡での9世紀前半代の土器組成、堂田遺跡では北陸起源（経由）と考えられる須恵器の「水鳥」形水瓶等、穢待遺跡では溝跡での古手の須恵器や井戸跡の火山灰下層の一括などが注目される。これら土器の編年はもとより、生産遺跡としての窯跡と消費集落遺跡との関連から導かれる経路・流通・政治的な地域圈（国・郡・郷域）と言った問題にまで止揚できればより地域の古代史像が鮮明化することは当然のことながら明かである。

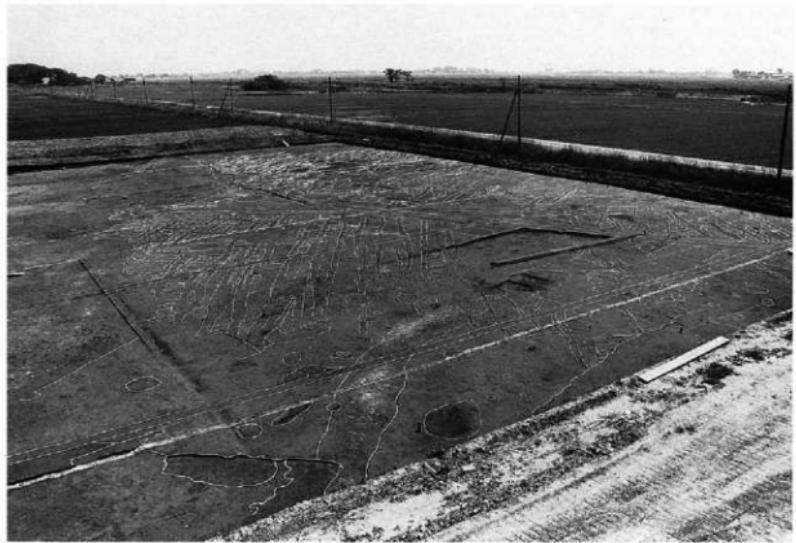
報告書抄録

ふりがな	きたぬ ながた いせき そりまちいせき どうでんいせき ほくくつちょうきほうこくしょ							
書名	北目長田遺跡・櫛待遺跡・堂田遺跡発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第24集							
編著者名								
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 0236-72-5301							
発行年月日	西暦1995年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きたぬながた 北目長田	山形県鮎海郡 遊佐町大字 北目字長田	6461	平成3年 度登録	39度 02分 28秒	139度 54分 00秒	19940510～ 19940708	3,300	県営ほ場 整備事業 (高瀬川地区)
そりまち 櫛待	山形県鮎海郡 遊佐町大字 北目字櫛待	6461	平成3年 度登録	39度 02分 19秒	139度 54分 16秒	19940822～ 19940828	1,000	
どうでん 堂田	山形県鮎海郡 遊佐町大字 北目字堂田	6461	2085	39度 02分 21秒	139度 54分 26秒	19940511～ 19940715	3,800	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
北目長田	集落跡	平安時代	柱穴 土壙 溝跡 歟跡(烟跡)	須恵器 あかやき土器 黒色土器 製塗土器			歎状の溝(烟跡)跡が建物と重複して検出され、統じて前者が後出である。製塗土器が量的に多い。	
櫛待	集落跡	平安時代	土壙 溝跡 井戸跡	須恵器 あかやき土器 黒色土器			トレンチ調査により土壙・溝跡・井戸跡等が検出され、堂田や北目長田遺跡の間に広がる集落跡。	
堂田	集落跡	平安時代	獨立柱建物跡・土壙 井戸跡・溝跡・歟跡 柱列	須恵器 あかやき土器 黒色土器 青磁・古鉄			9世紀前半代の所産と考えられる水鳥形の須恵器は北陸的な遺物として注目される。	

図 版



北目長田遺跡近景（西から）



北目長田遺跡調査区全景（北から）



調査風景（南から）



調査風景（南西から）



調査風景（北東から）



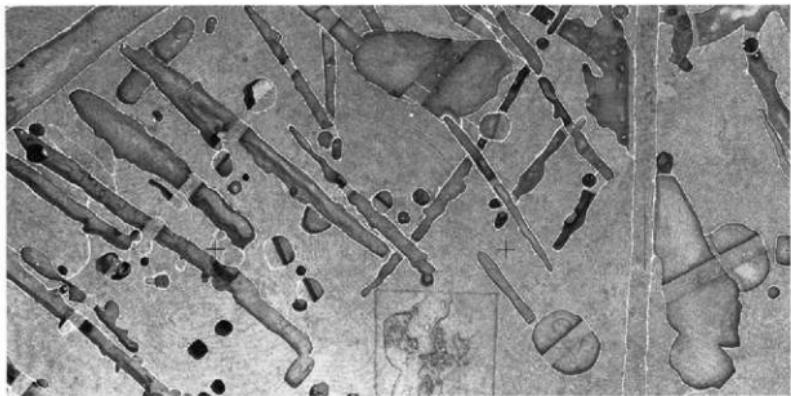
調査風景（北から）



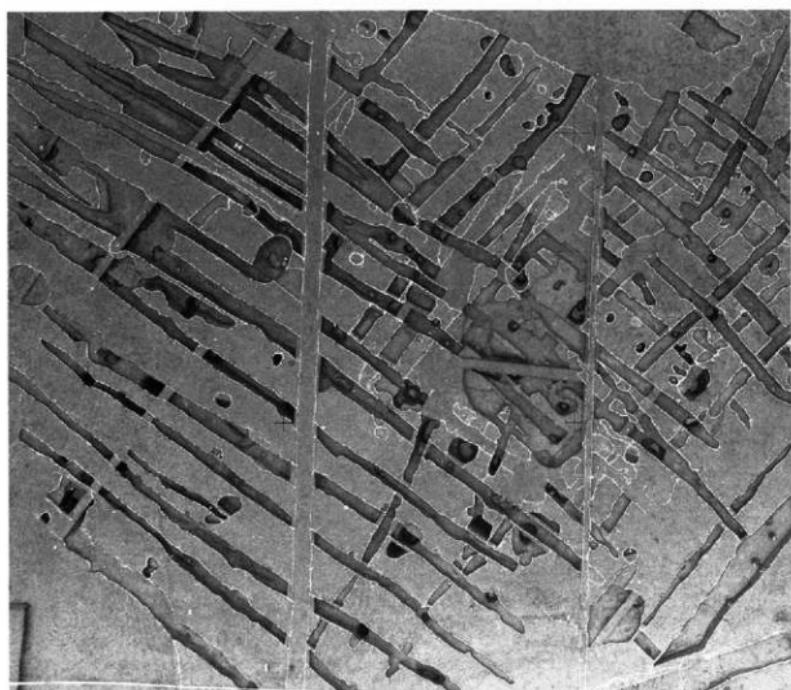
調査風景（北から）



鉢状溝跡 C 区（上空から）



歎状溝跡 A 区（上空から）



歎状溝跡 D 区（上空から）



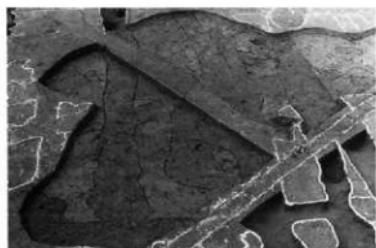
鉄状溝跡 D 区 (北から)



SD492・493土層断面 (南から)



SD490土層断面 (南から)



SX667内遺構検出状況 (南から)



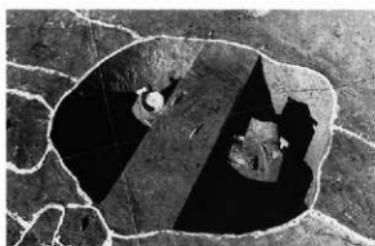
SK48遺物出土状況 (北から)



SK6検出状況 (北西から)



SK6土層断面 (北西から)



SK7検出状況 (西から)



SK7土層断面 (南から)



SK8検出状況 (南東から)



SK8土層断面 (南から)



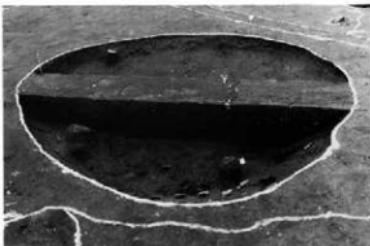
SK9検出状況 (南西から)



SK9土層断面 (南から)



SK26検出状況（北から）



SK26土層断面（南から）



SK50検出状況（北から）



SK50土層断面（南から）



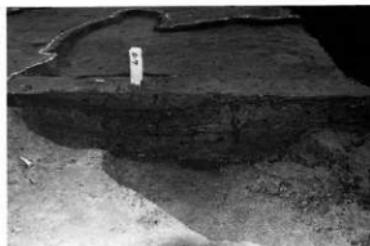
SK62検出状況（南から）



SK62土層断面（南から）



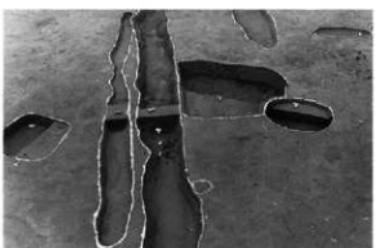
SX64検出状況（東から）



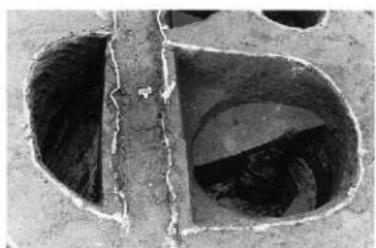
SX64土層断面（北東から）



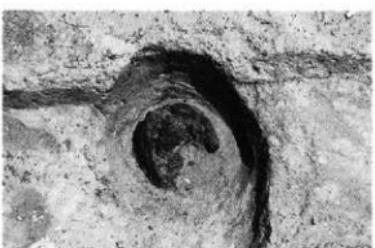
SK11・SK12検出状況（北から）



SK60・SD396・397検出状況（南から）



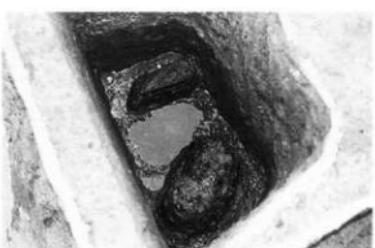
SK36検出状況（北東から）



SD492検出状況（西から）



SD577検出状況（北から）



SP171検出状況（南から）



SP616検出状況（東から）



SP614検出状況（北から）



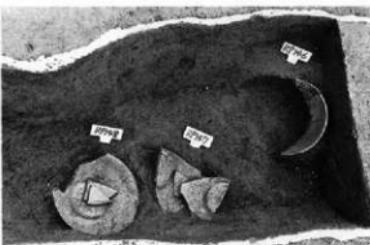
SK206製塙土器出土状況（北から）



RP72製塙土器出土状況（南東から）



SK26遺物出土状況（北から）



SD397遺物出土状況（東から）



SX64遺物出土状況（西から）



RP79黒色土器出土状況（北東から）



RP192墨書き土器「千」出土状況（東から）



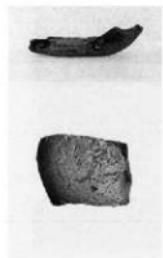
RP22支脚出土状況（西から）



15-1



15-2



15-3



15-4



25-15



15-5



15-6



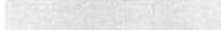
15-7



15-9



15-10



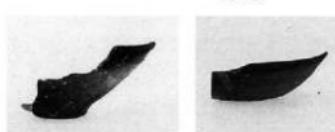
15-13



15-8



15-14



15-11



15-17



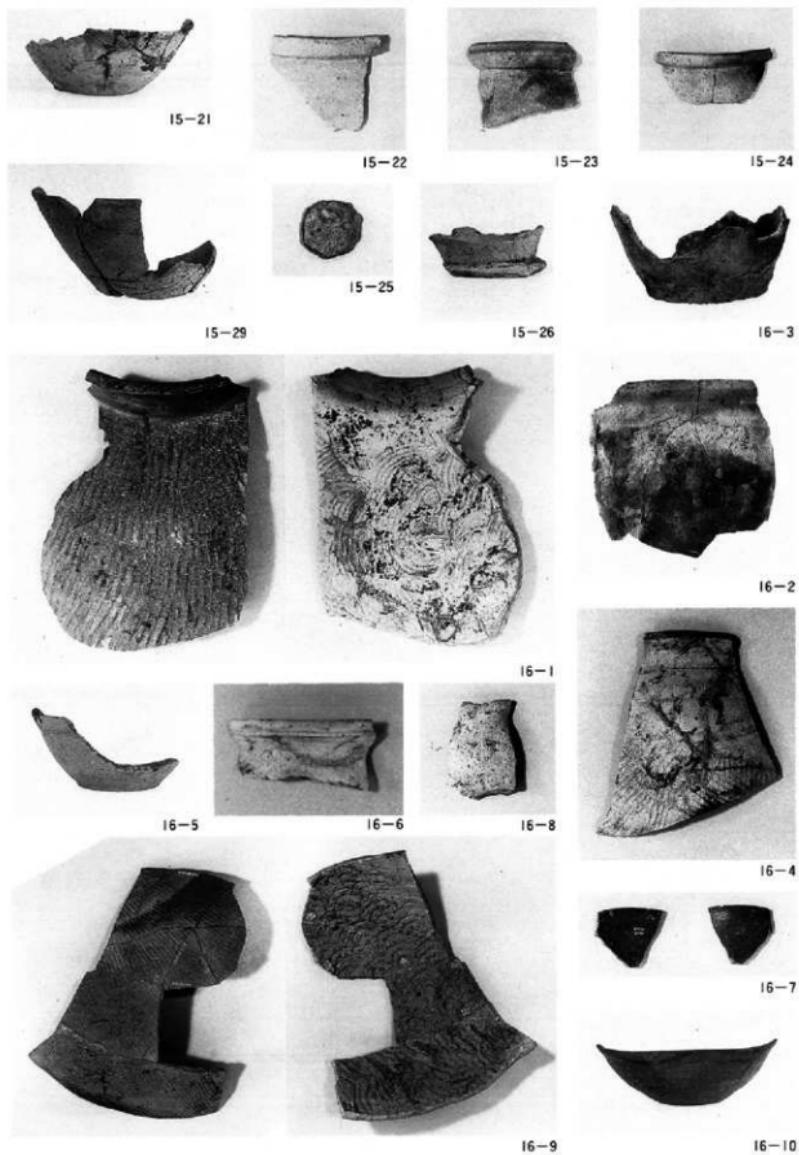
15-15

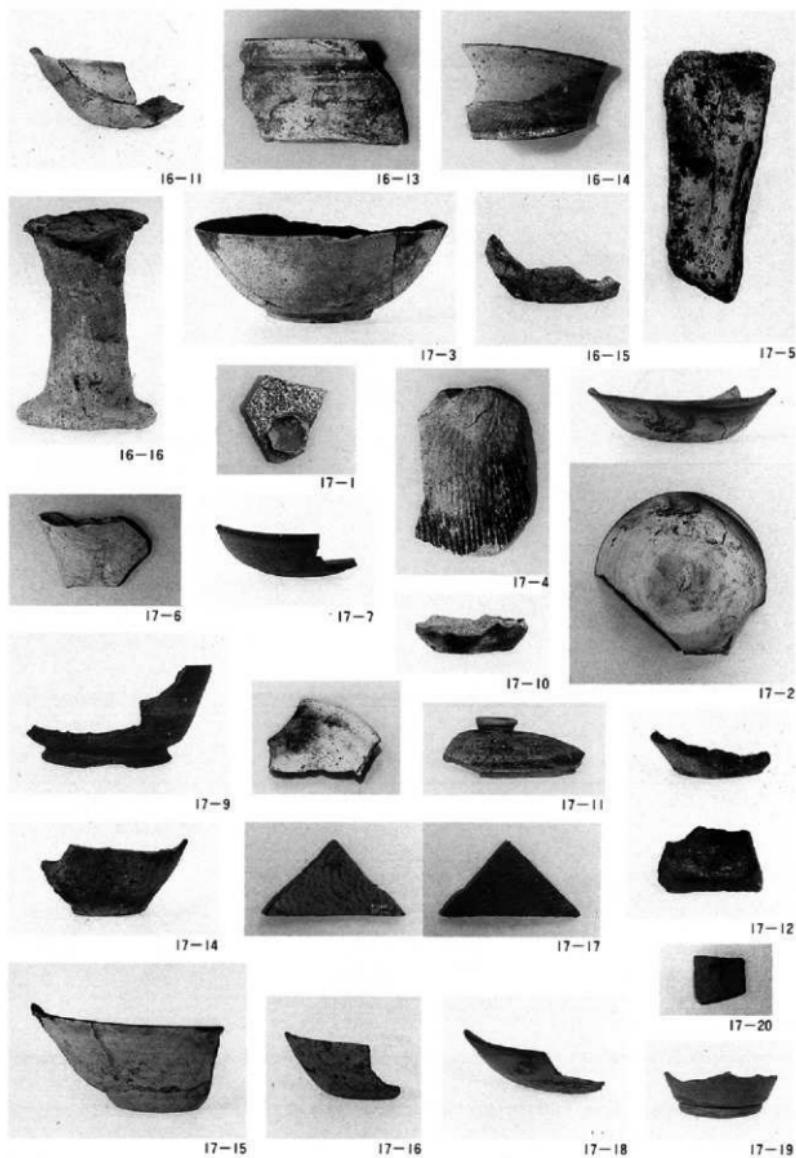


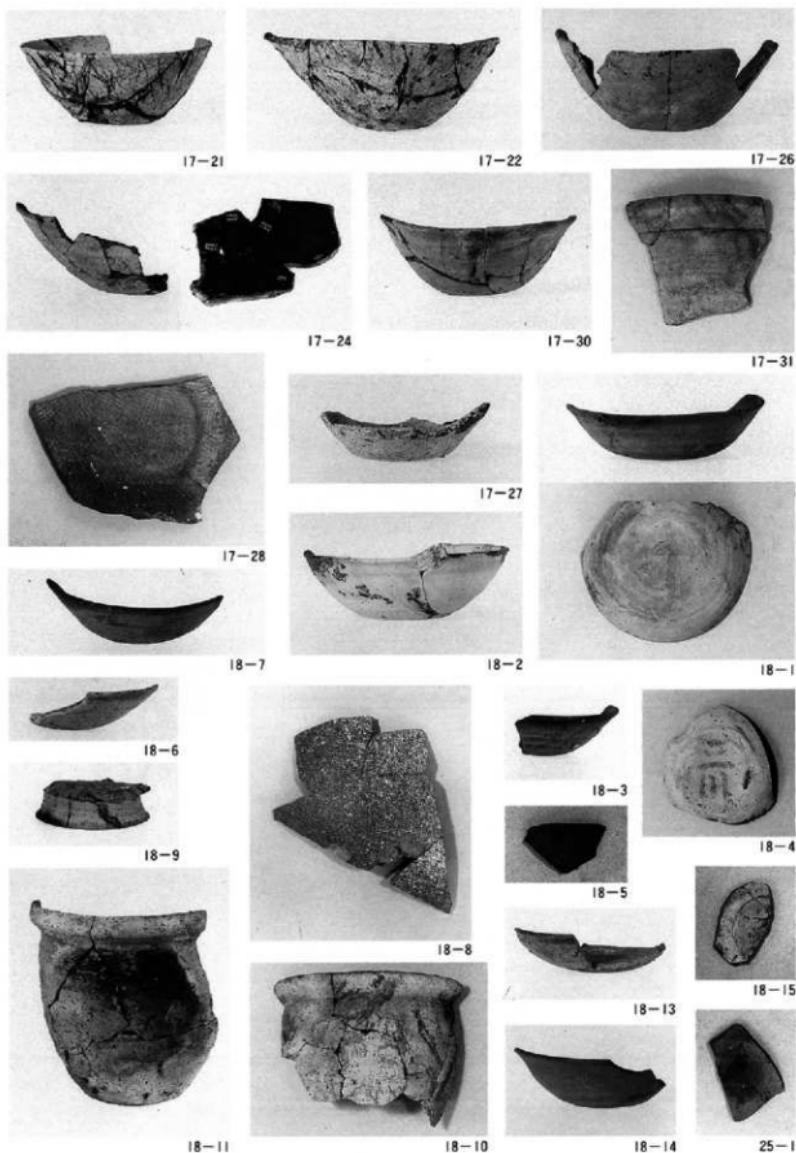
15-16



15-20









18-16



18-20



18-25



18-26



18-17



18-27



18-22



18-18



18-24



18-28



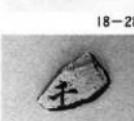
18-21



18-23



18-19



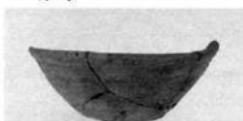
19-6



19-5



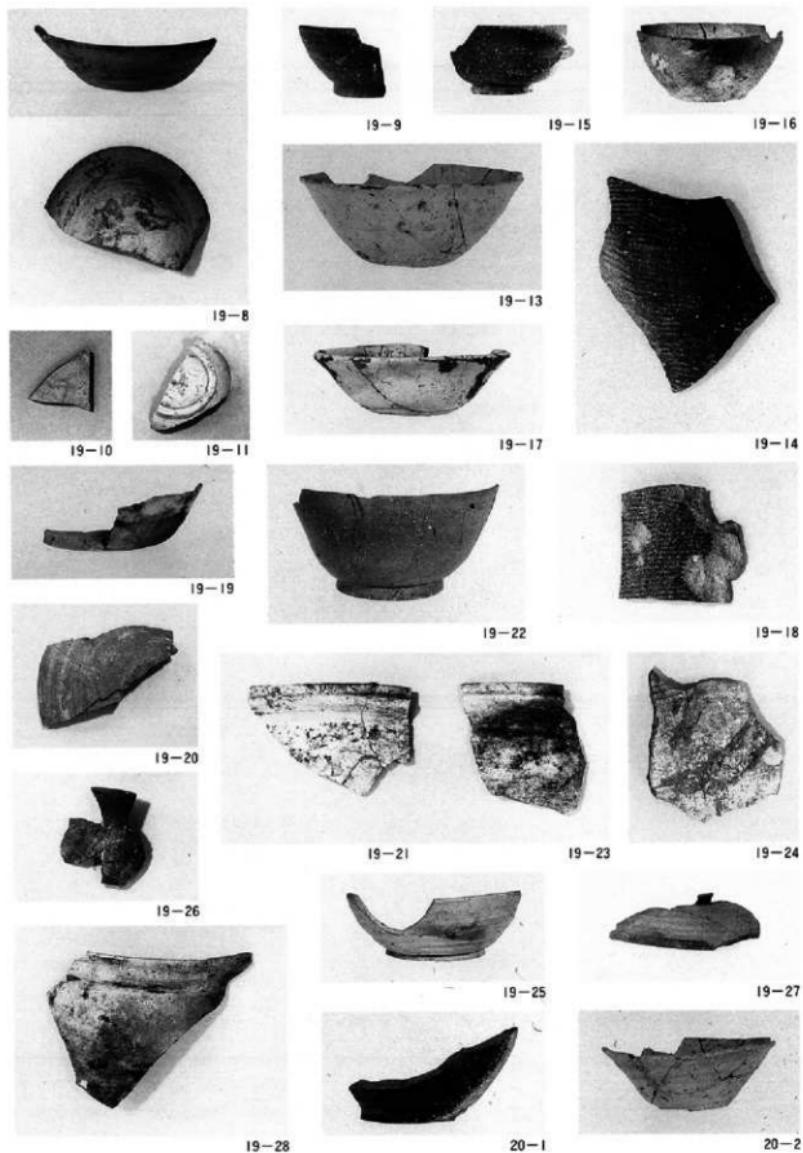
19-3

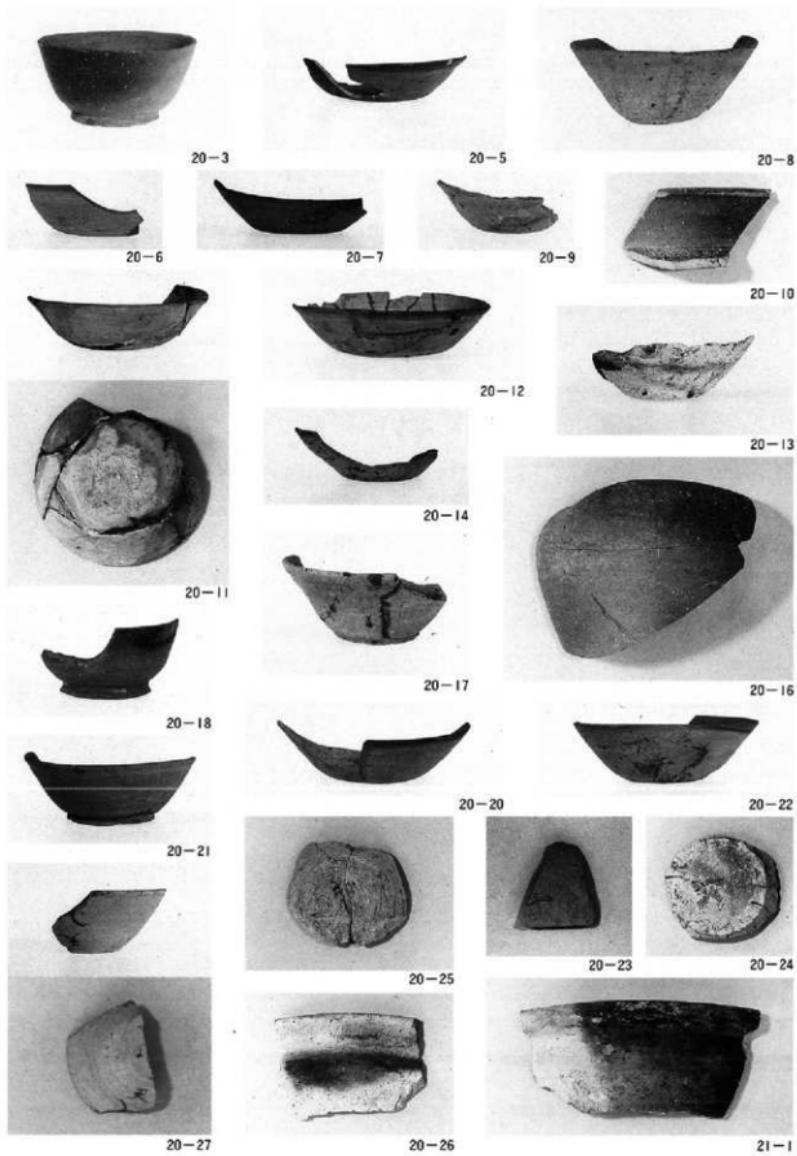


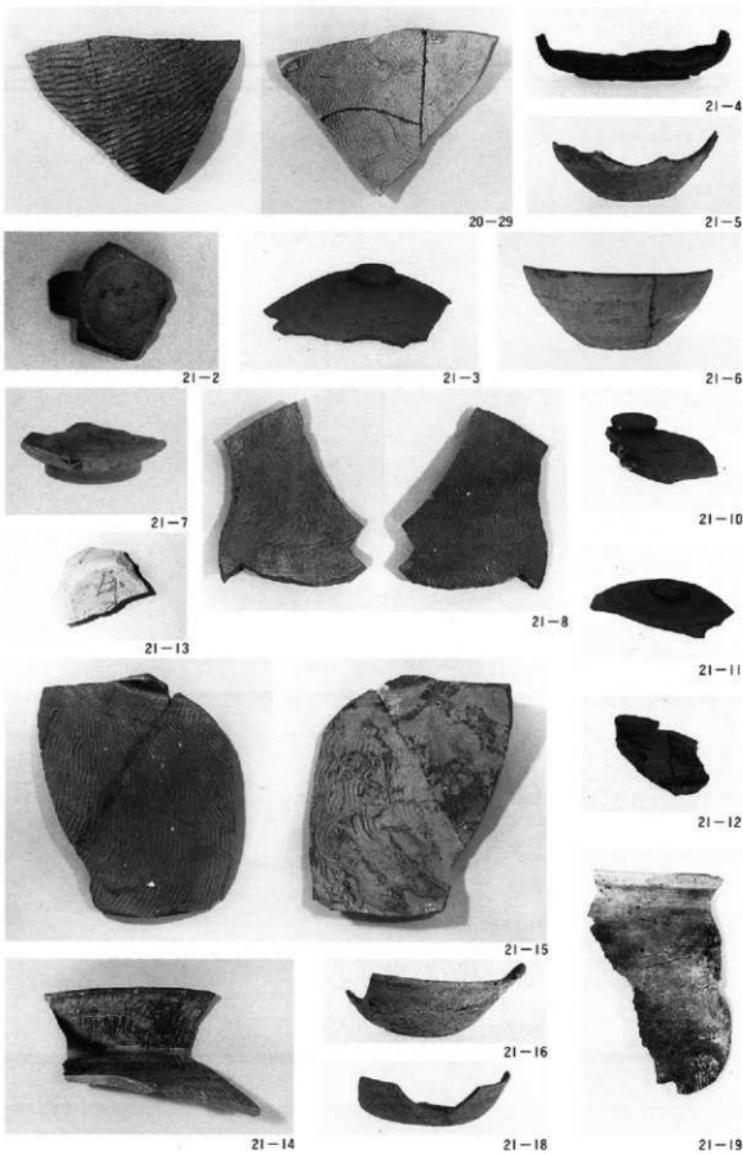
19-4

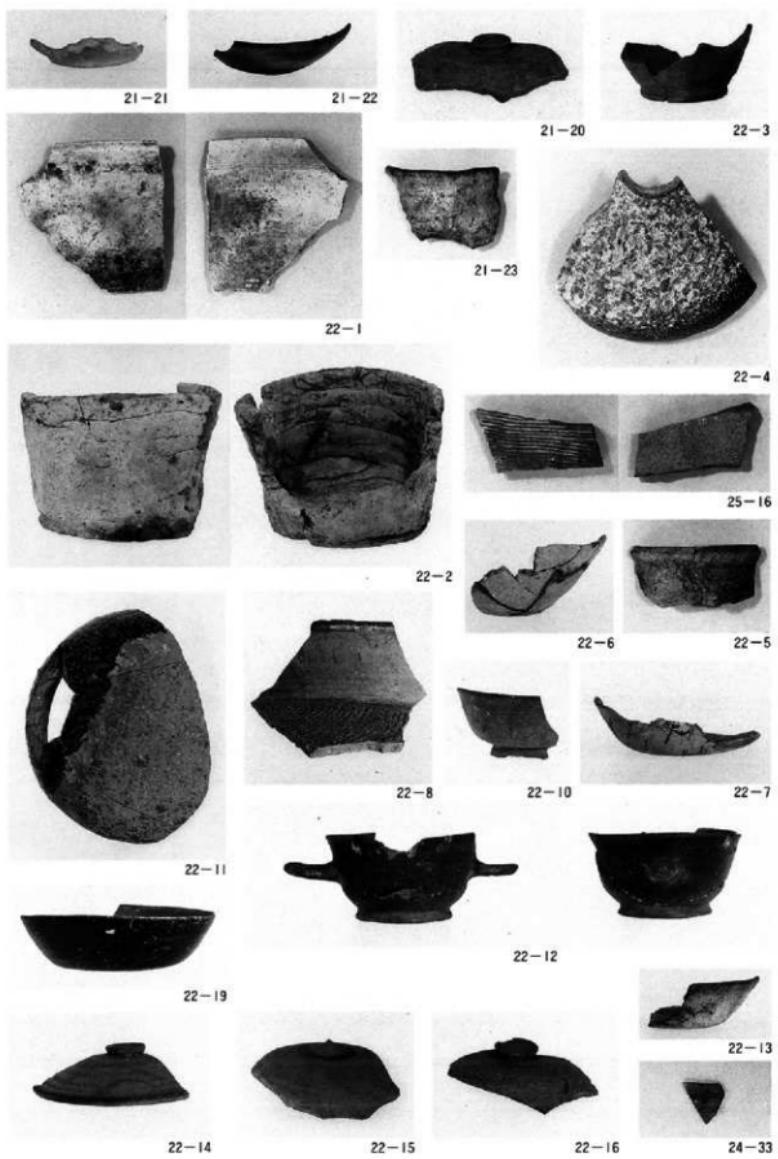


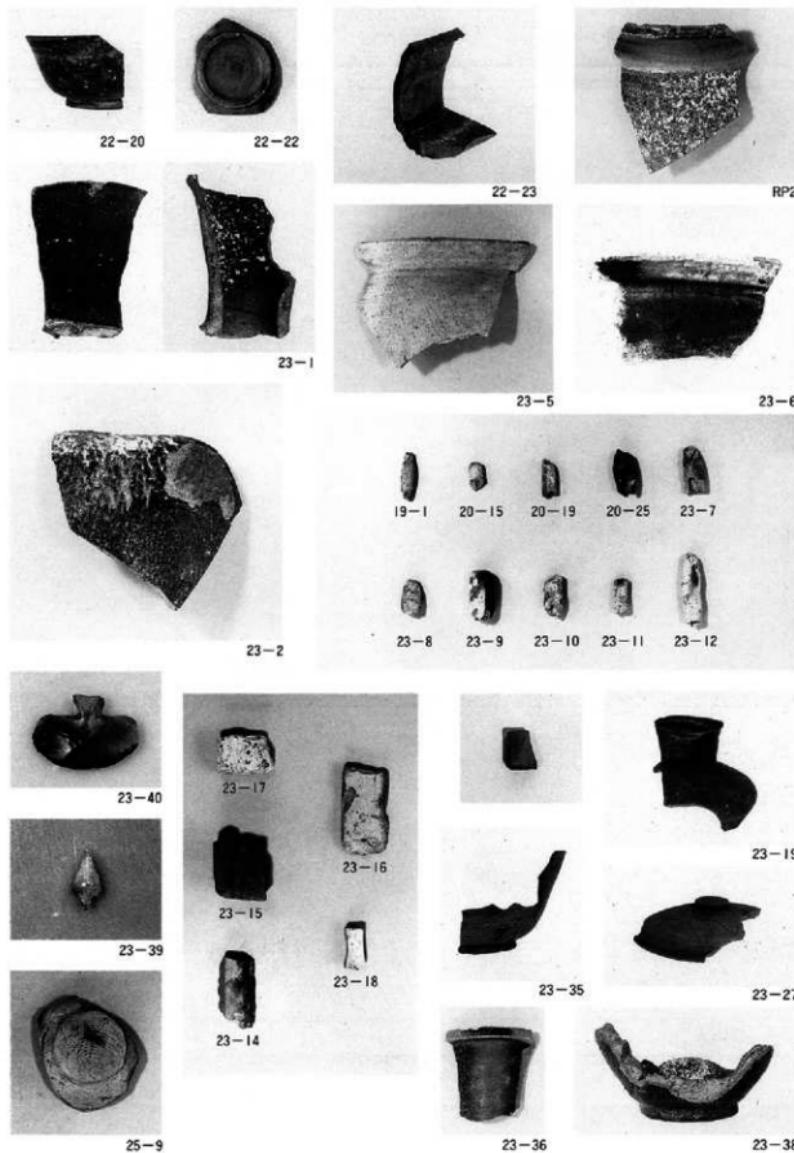
19-7

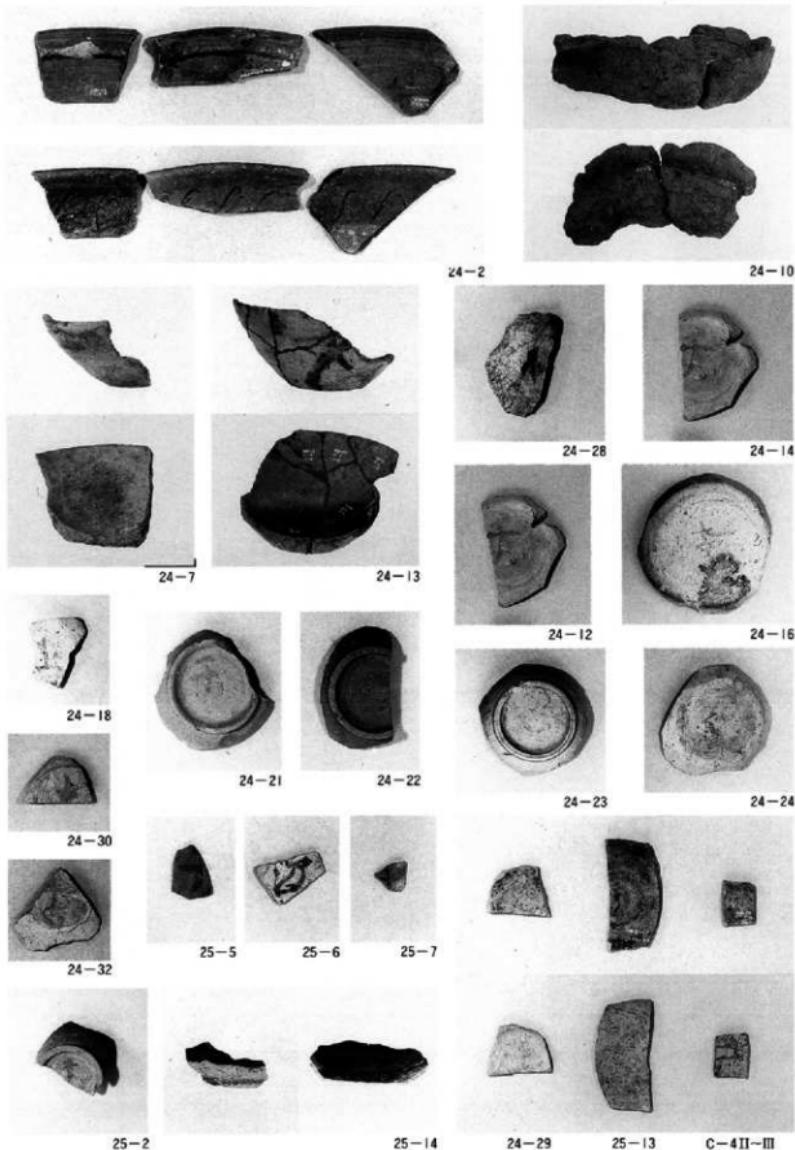


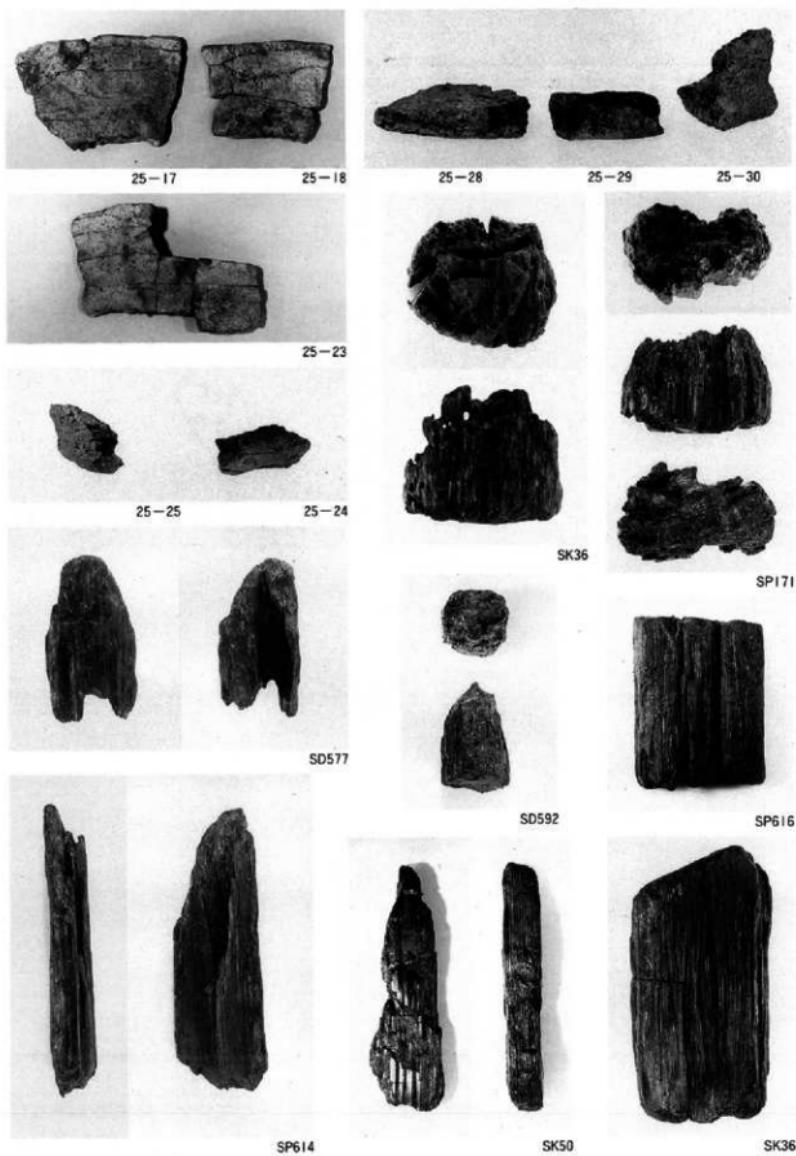














橋待遺跡調査区近景（南東から）



調査風景（南東から）



SD1検出状況（南から）



SE2検出状況



31-1



31-4



31-7



31-2



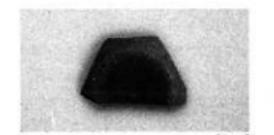
31-5



31-8



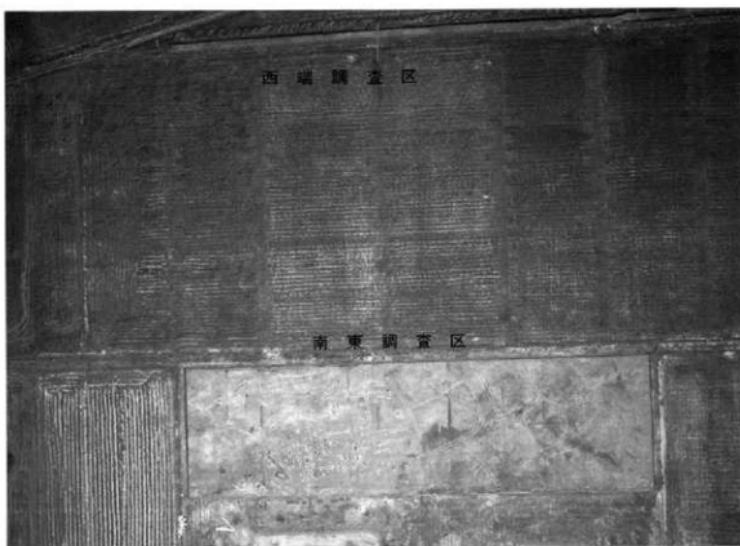
31-6



31-3



調査区全景（東から）



調査区全景（真上から）



B～F・5～9グリッド検出構造（真上から）



A～D・I～5グリッド検出構造（真上から）



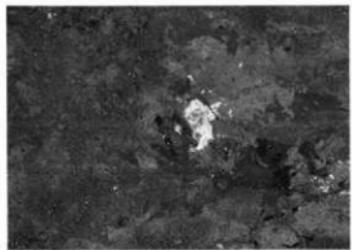
調査区近景（南から）



調査風景（西から）



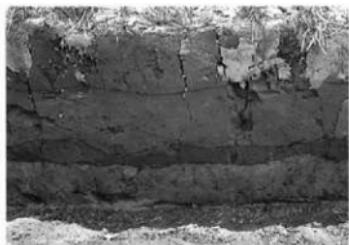
SK64調査風景（西から）



火山灰検出状況（B-4）



火山灰検出状況（左断面）



土層断面 (C-I)



SB1検出状況 (南から)



SB3検出状況 (南から)



SB5検出状況 (東から)



SK36I完掘状況 (東から)



SK36I遺物出土状況 (RP73, 100)



SK17I完掘状況 (西から)



SK17I遺物出土状況



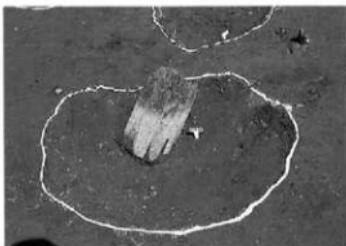
SK113検出状況（南から）



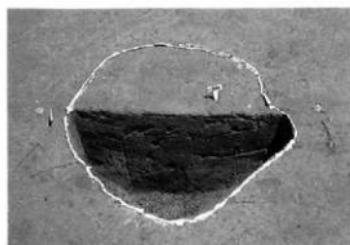
SE51半截状況（北から）



SK86（RP63・64）遺物出土状況（西から）



RW22出土状況（SB4・EB164）



EB359土層断面（SB5）（西から）



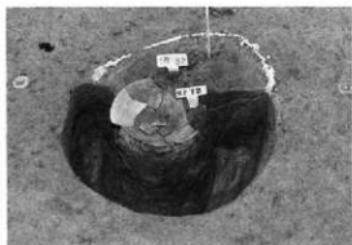
EB498土層断面（SB5）（南から）



EB13土層断面（SBI）（西から）



EB10土層断面（SBI）（西から）



EB82遺物出土状況 (SB9) (北から)



SDI検出状況 (南から)



SAI検出状況 (北から)



SAI検出状況 (北から)



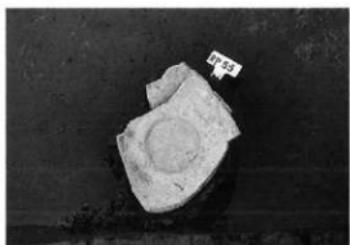
RP6 (土鐘) 出土状況 (B-4)



RP7 出土状況 (B-7)



鳥形須恵器出土状況 (A-2)



鳥形須恵器出土状況 (A-3)



40-1



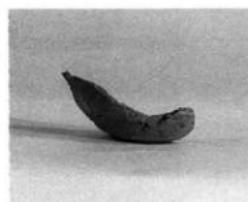
40-2



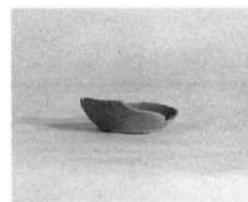
40-3



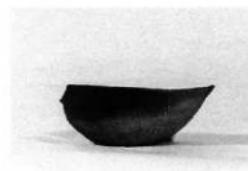
40-4



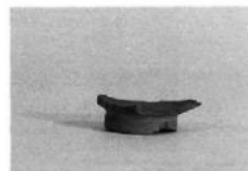
40-5



40-6



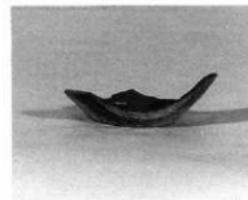
40-19



41-1



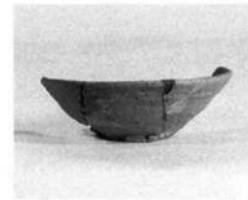
41-2



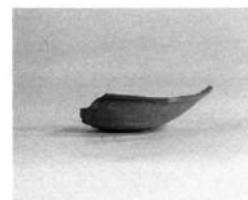
41-3



41-4



41-5



41-12



41-13



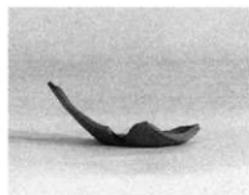
41-14



42-1



42-2



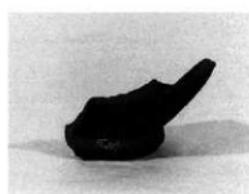
42-17



42-15



42-18



42-19



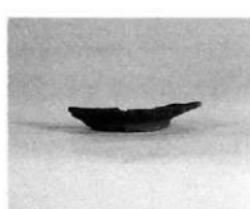
43-1



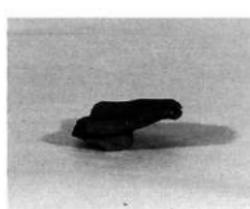
43-3



43-7



44-2



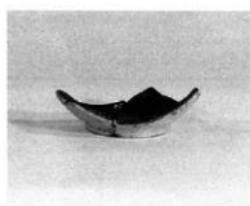
44-3



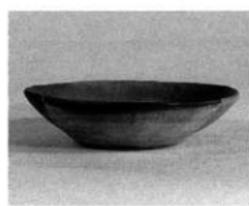
44-5



44-7



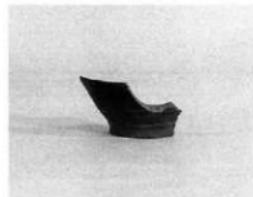
44-11



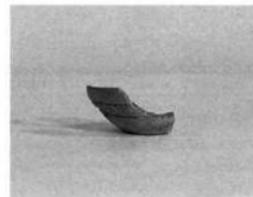
45-9



45-10



45-11



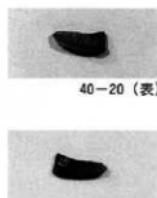
45-13



45-18



45-23

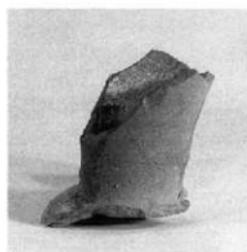


40-20 (表)

40-20 (裏)



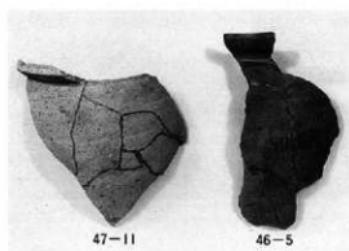
42-6



42-15

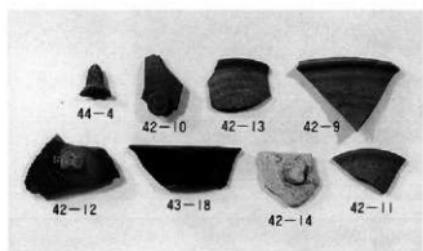


45-20



47-11

46-5



44-4

42-10

42-13

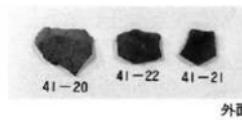
42-9

42-12

43-18

42-14

42-11



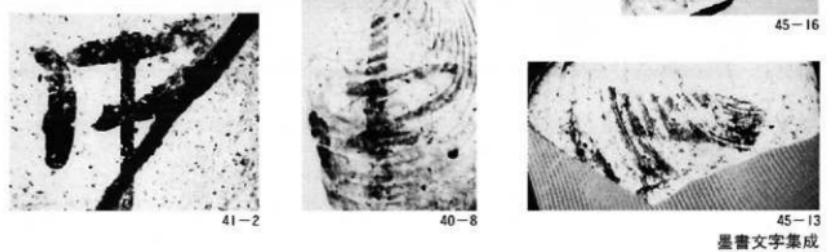
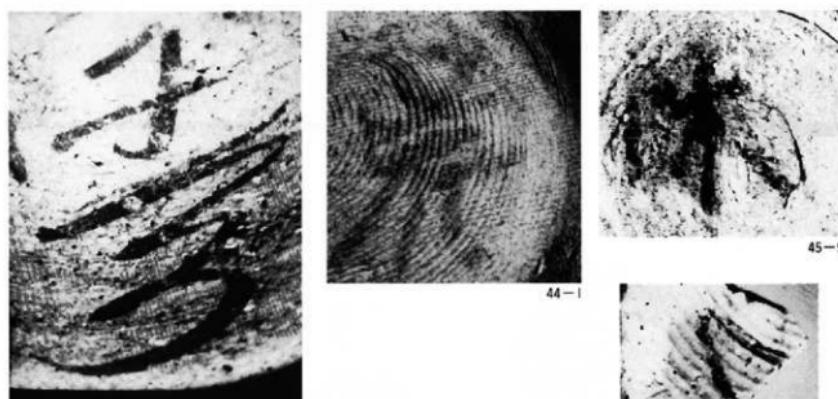
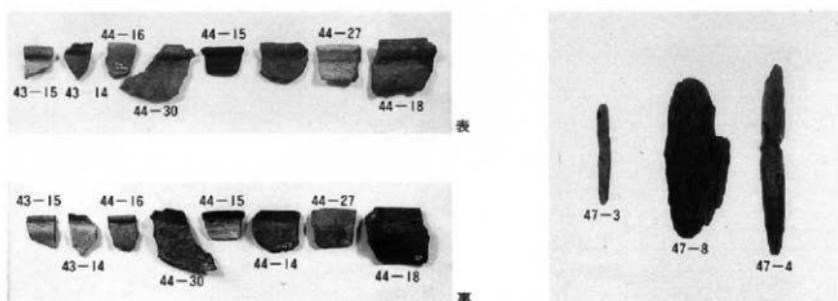
外面



内面



外面



山形県埋蔵文化財センター調査報告書第24集

北目長田遺跡
櫛待遺跡
堂田遺跡
発掘調査報告書

平成7年3月25日 印刷
平成7年3月31日 発行

発行 山形県埋蔵文化財センター
印刷 山形印刷株式会社
